
神様がくれた60分

かず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様がくれた60分

【Nコード】

N7633P

【作者名】

かず

【あらすじ】

平成二十三年一月四日、鎌倉の鶴岡八幡宮の本殿の屋根の上で赤白黄緑青の五体の神が会議をしていた。その会議の議題はその竜頭が押されている間、願い事を叶えるという「魔法の時計」をその年、絵馬を買って板に掛けた者のうち、誰に貸し与えるかいうものだった。赤神が選んできたのは名前も絵馬に書いた願い事も平々凡々とした、東京の広告代理店に勤めるサラリーマンの鈴木宏（二十八歳）だった。

担当の青神から魔法の時計「マジカルウォッチ」を受け取り、その使

い方や効能を伝授された宏はもらった翌日、会社の行き帰りに使い、その力を凄さを実感したが、その夜、現れた青神にその使い方をたしなめられた、時間の大切さを考え、深く反省し、使い方を改めることを誓う。

プロローグ（前書き）

はじめて書いた小説ですので、ぜひ、辛口のコメントを頂きたく、
宜しく、お願いします。

ブローグ

ブローグ

平成二十三年一月四日 午後六時。

鎌倉の鶴岡八幡宮の本殿の屋根の上から、白・赤・青・黄・緑の衣装に身を包んだ、五体の神たちが下の方を見下ろしていた。

「今年もたくさんの人が来よったの」

白い衣装の白神がそう言うと、黄色の黄神 - これは女なのだが - が、
「それでも川崎大師には勝てんがね」

と切り返した。

「お賽銭はどうかの。昨年はえらく賽銭が少のうて、我々の手当も大幅にカットされたがのう」

と緑神がいうと、白神が

「昨年は一昨年がえらい不景気だったせいで、賽銭も少なかったが、今年は少しはましじやろうて。絵馬やお守りの売れ行きも上々のようだし」

と算盤をはじくまねをした。

「しかし、去年も失業率が下らん上に、円高も響いて業績を落とした企業が多いから。あまり期待せん方がいいんじゃないだろうか。人間界にならった、神様界の手当カットも今年も継続という話ですから」

と赤神がはじめて口を開くと、最後に残った青神が口を尖らせて不満げに言った。

「俺さのところはガキが三人もいるから、苦しくて、苦しくて。このところ、至るところで、人間界に倣おうってしてるから、神様界も子供手当が支給されるかなって思ったら、見送りになったって、ガツクリだ」

「そりゃ、しょうがないでしょ。一応神様なんだから、建前上は。」

そういう俗世間の政策をすべて取り入れるわけいきませんよ」

赤神が諭すように青神をなだめた。

「さあ、さっさと人選終わりにして、お開きにしましょうよ」

赤神が身を乗り出そうすると、

「だけど、一昨年、去年と人選が悪いと、八幡様が随分とお怒りだとか」

と黄神が心配そうに声をかけた。

「ほー、そうかいの。一昨年、去年で選んだ人間は時間を何に使ったのかいの」

白神が尋ねると、

「確か、一昨年は淀破りの痴漢騒動で即没収。昨年は学生で、期末試験の時間が足りないちゅうて、時間を止めて、自分だけその間、時間稼ぎをしたとか。それでも結局落第したみたいだが。もつともここ百年くらい、まともに神の力を使いきった人間などおらんがの。本当に人間という奴は時間の使い方をわかつとらん」

頑固な緑神が半ば怒りの表情で答えた。

「そんなんなら、もうやめにした方がよろしいのでは？」

と黄神が提案すると、白神が

「いやー、八百有余年続いた伝統をうちの代で、なくすわけにはいかんじやる。だから、今年はしっかり、人選を頼むよ、赤さん」と両手を合わせて、赤神に頼んだ。赤神は顔を真っ赤にして、吐き捨てた。

「頼むといわれても、絵馬書いて吊るしてあるところから、エイッと一つ選んでくるだけですからね。人選が悪いって言うなら、今年はあるあなたか緑さんが選べば」

緑神がこう反論した

「わしの専門は交通安全じゃ。天下人を選ぶのはわしの仕事じゃないわい。もつとも大昔のように天下人など現れんがね」

緑神がふくれっ面をして言った。白神がなだめるように赤神に言った。

「いやー、これまた八百有余年前から、赤さんが選んで、青さんが案内役をするって決まっているから、そりゃできん。赤さんのせいにはせんから、一つ宜しく頼みます」

白神が重ねて、頼み込んだ。赤神は機嫌を直したように

「それでは、ちょこつと下に行つて選んできますわ」

とすーっと下に降りて、吊るしてある絵馬を物色した。

一昨年、去年は確か、偉そうなこと書いてあつた絵馬を選んだような記憶があつた。だから、今年はそういうのは避けて

「今年も平穩無事に過ごせますように」

平成二十二年元旦 鈴木宏

と書いてある絵馬を手にとって、上に戻つて来た。そして、

「今年はいいつにした。いろいろ望みを書いてある絵馬が多い中で、これはシンプルだ。」

シンプルが一番です」

と満足げに言いながら、青神に手渡した。

青神は絵馬を見て、大笑いをした。

「何かおかしい？」

赤神が尋ねると、

「だつてさ、鈴木さんちの宏君だよ。この国に何人いるのかと思うとね。頼み事もシンプルなら名前もシンプルなのがおかしくて、おかしくて」

と青神は腹を抱えて笑いながら答えた。そして、左手を胸にかざすと、エイッと念を入れた。すると、一瞬、胸元に煙が立ちこめ、その中から巻物が現れた。青神は巻物を広げ、周りの神々にもわかるよう大きな声で、読み始めた。

「本名 鈴木宏 昭和五十七年九月二十三日生まれ……」

それは神のみが知ることのできる、その人の生まれた時からの履歴書のようなものである。

「……犯罪暦 なし。交通違反 駐車禁止で二点……
……以上」

青神が一通り読み終えると赤神が不機嫌そうに言った。

「あら、頼み事も名前も人生もゼーんぶシンプルだね。こらまた、つまらない奴を選んじやったこと」

「まあ、いいでしょ。シンプルな人だから、変な使い方もしないと思っし」

白神がなだめると、赤神もうなずいた。

「まあ、そうだね。僕もこれ以上、八幡様を怒らせたくないし」
黄神が

「まあ、中々の男前じゃない。いいんじゃないかしら」というと、緑神も納得したように、頷いた。

白神が白い布袋を青神に手渡し、みんなを見渡しながら、散会の音頭を取った。

「それでは、時計を鈴木宏君に渡すのは青さんにまかせて、次の例大祭まで、ごきげんよう」

白・黄・緑の神が消えるなか、赤神だけは、青神の見送りにと手を振っていた。すると、

何か気づいたように、青神に尋ねた。

「青さん、青さん、あなたはなぜ東北訛りがあるの」

「それは前に何度も話したんだよな。俺の親父が東北の神社の次男坊だったの。そんでもって、俺のお袋のところに婿養子にきたの。で、親父がずっと東北弁しゃべっているから、それ聞いて育った俺も訛りがとれねえのよ。わかった？ んじゃ、また」

第一章 魔法の時計

第一章 魔法の時計

平成二十三年一月四日 午後十時くらい

鈴木宏は風呂に入っていた。年始の休暇は今日までで、明日から会社が始まる。宏はどことなく憂鬱な気分だった。それにさっきからくしゃみが止まらない。

「誰かが俺のこと、噂でもしてるのかな」

風呂から上がり、バスタオルで頭を拭きながら浴室から出てくるなり、男の声がした。

「お風呂はどうだったべか」

いきなりの言葉に宏はたじろいだ。玄関の鍵はかけたつもりだし、窓も閉めていたはずである。仰々しい青い服を着たその男は青神であつた。

「あなたは誰ですか」

恐る恐る宏が尋ねると、青神は

「誰に見えるべか」

と強い東北訛りの声で尋ね返した。

そんなに悪人では無さそうであつたので、宏は少し安心し、半ば冗談で、

「うーん、変なオジサン？」

と答えた。すると青神は

「そうです、私が変なオジサンです。変なオジサン、変なオジサンって、違つたろう」

と、少しむつとしたように、口を尖らせた。

「それはあなたが自分でやっていたんでしょう。僕は別に頼んでませんよ」

宏はその男が悪人でないことを確信した。

「それで、どこのどなた様ですか？」

「私は神様です」

「神様って、どちらの？」

「あなた、今年の初詣に八幡様の所へお参りに来たでしょ」

「八幡様って、鎌倉の鶴岡八幡宮のことですか。それなら、毎年行ってますけど」

「そこで、絵馬買って、願い事書いて、吊るしたでしょ。その吊るしてある絵馬の中から一年に一人にだけ、魔法の時計を貸し出すのが習わしなんだわ。八幡様ができてから八百有余年続いた神から人間への施しで、あの徳川家康公もその力で幕府を築いたとか。まあ、昔のことだから、本当のところはよくわかんねえけども」

「魔法の時計ってなんですか」

「まあ、今風に言えばシックスティミニッツマジカルウォッチというところかな。シックスティミニッツ、つまり六十分の魔法の時計なのよ」

「六十分って、一時間のことですか」

「まあ、そのとおりなんだけど、一時間っていうと何だか有り難みがなくなるじゃない？だから、六十分になっているのよ」

「それなら三千六百秒にしたら、もつと有り難みが出てくるんじゃないんですか」

「そりゃ、そうなんだけど、あんまり大きくなると管理が大変だからね。六十分がちょうどいいのよ」

「で、六十分の意味は」

「この魔法の時計、いや、マジカルウォッチを持つと、この竜頭の部分を押してから、次に押すまでの時間、願い事をかなえることができるのよ。例えば、三〇秒間、時間を止めるとか、十分間、鳥になつて空を飛ぶとか、魚になつて海に潜るとか。論より証拠でやってみるべか」

「あ、はい」

宏がうなずくと、青神は懷から白い布袋を取り出した。そして、そ

つと袋の口をあけ、中から何かを取り出した。ありていに言えば、ストップウォッチなのだが、それよりは一回りほど小さかった。

青神はそれを宏に手渡した。そのウォッチは針が一二時を指した状態で止まっていた。

青神が説明をはじめた。

「普通の時計から短針がないものだと思ってくれればいいんだ。最大で六十分だから、時間を表す短針は意味がないから。使い方はまず心の中で願いごとを唱えてから、ここの竜頭を押すと、唱えた通りのことが起きるわけ。そんでもって、もう一回竜頭を押すと効果が止まって、もとの状態に戻るんだ。今からこのミカンを上に掲げるから、「時間よ

止まれ」って念じてから、竜頭を押してごらん。じゃ、いくべ」

青神が宏の部屋のテーブルにあつたミカンを手に取り、上に放り投げると、宏は、

「時間よ止まれ」

と心に念じて、ウォッチの竜頭を押した。

すると、ミカンは宙に浮いたままでピタツと止まり、微動だにしない。信じられない表情を浮かべている宏に青神は、

「外を見てごらん。全部止まっているから」

宏がベランダに出て、下を見ると、確かにすべてのものが止まっている。犬の散歩をしている初老の男も、塾帰りの中学生の集団も、止まったままで動かない。

「本当に止まってます。すごいっすね」

宏が青神にいうと、青神は

「あ、もう一回押さないとずっと止まったままだし、お前さんが使える時間も減っちゃうよ」

と宏に促した。宏は慌てて、竜頭を押すと外の風景が動き出し、宙に止まっていたミカンもすんと下に落ちた。

「こんな力を俺が持つちゃっていいんすか」

宏が尋ねると、

「ドリームジャンボ宝くじと同じなの。誰かには当たるけど、誰に当たるかはわからねえ。まさにお前さんは当たったんだよ。一億円をどう使うかと同じで、このマジカルウォッチで時間をどう使うかはお前さん次第ってことなの」

「はい、わかりました。でルールのようなものはあるんですか」

「犯罪とか悪用するのはご法度。即没収だし、確実に刑務所に行くことになるから気をつけて。多少の悪戯は大目に見るけど。それと時を止める時はお前さん以外はすべて止まるから、何かを運ぶ場合はお前さん自身が運ばねばならない。あと使っているところを他人に見られちゃダメだし、他人に魔法だと思わせるのもダメだよ。使用期限は今年の大晦日まで。ただし、六十分を使い切ると、期限を待たずに返してもらおう。そして、人の生死がかかわる願い事ことには使えない。死ぬ時間を遅くしたりとか。最後に基本的にはどう使おうと自由なんだけど、できるだけ、有意義に使って頂けると助かるんだな。一昨年、去年とどうしようもない使い方して、八幡様がカリカリしてるらしいから、そこんこは宜しく頼むよ」

早口でしゃべる青神の一言一言を聞き漏らすまいと、宏は真剣な表情のまま、青神を見つめていた。

「一年で一時間か。もっとあればな」

宏がつぶやくようにいうと青神は幾分怒気を含んだ声で、こう諭した。

「あのね、お前さんたち人間は時間がない、時間がないと言いながら、時間を浪費するんだ。朝、電車に乗り込む寸前でドアを閉められると、何故、五秒間待つてくれないと電車の車掌を恨めしく思う。何故五秒早く駅につけなかったか、何故五秒早く家を出られなかったか、何故五秒早く起きれなかったか、と反省すべきなのに。このマジカルウォッチはそんな人間に時間の大切さを学んでもらう道具でもあるんだ。一分一秒がどれほど重要かっていうこともね」

「すみません。気をつけます」

「まあ、いいべさ。とにかく大いに役立ててちょうだい。時々、様

子を見に来るから。くれぐれも悪用はだめだからね」

宏が大きくうなずくのを確認すると、青神はくるっと一回転して、白い煙とともに消え去った。

（残り時間五九分三八秒）

第二章 無駄遣い（その1）

第二章 無駄遣い

翌日の目覚めはやけによかった。

「昨夜起こったことは真実なのだろうか」

目覚めてすぐ、昨夜のことを思い出し、テーブルの上を確認した。竜頭が一つ付いたストップウォッチのようなものが確かに置いてある。マジカルウォッチだ。

「やはり、夢ではなかったんだ」

あらためて、手に取ってみた。秒針が二十二秒を指していた。間違はなく、昨日、青神から手渡されたマジカルウォッチである。それでも宏は確認したかった。すーっと窓を開け、ベランダに出てみると辺りは朝の始まりの気配が漂っていた。ジョギングしている年配夫婦。犬の散歩の途中であろう若い女性。

――時間よ止まれ――

そう念じて、ウォッチの竜頭を押した。その瞬間、動いていたものがすべて動きを止めた。

ちょうど、黄色だった五〇メートルほど先にある交差点の信号も、ずっと黄色のままであった。そして、もう一度竜頭を押す。止まっていたすべてのものが、何事もなかったように再び動き出した。黄色だった信号も慌てたように赤に変わった。

「俺ってなんだか神様みたい」

よくよく考えてみれば、神様から渡されたものなのだから、神様みたいになるのは当然である。しかし、宏はそんなことは忘れて、ウォッチを握りしめ、何度もガッツポーズをした。人にならないものを手に入れた喜びをかみしめながら。

人間、誰しもそうであるように、嬉しく、楽しい時間は超高速で過ぎ去ってゆく。宏が腕にはめた時計――これは人間が普通に使う腕

時計なのだが - はいつも宏が家を出る時刻にあと五分のところを指していた。

「やべえ、新年早々、遅刻じゃないか」

急いで身支度をし、家を出た。駅までは歩いて十分ほどのところなのだが、全速力で走れば、いつもの電車に間に合う。宏はカバンを小脇に抱え、全速力で走った。しかし、駅まではちょうど中間点というところでパタリと走るのを止めた。

- 俺は何をやっているのだろう。時間を止めればいいのに -

宏は、時間よ止まれ、と念じ、背広の内ポケットに入れてあるマジカルウォッチの竜頭を押した。周りのものが一瞬にして止まった。道と並行して走っている電車も信号待ちで待機しているかのように止まった。

宏以外のものがすべて止まっている、音もない世界で宏の歩く靴音だけがコツコツと響いている。五分ほど - 実際は時間は進んでいないので、宏のマジカルウォッチが刻んだ時間という意味での - して、駅に到着した。

改札口で定期をかざし - これも時間が止まっているので、かざす意味などないのであるが - 駅のホームに下りたところで、マジカルウォッチの竜頭を押した。ちょうど、宏がいつも乗る電車がホームに滑り込んだところであった。何事もなかったかのように、並んでいた背広やワンピース達が電車のドアに押し寄せる。

「まもなく発車します。ドアを閉めます」

車掌の声のあと、ドアは閉まった。階段から降りてきた四十歳くらいのサラリーマン風の男が両手を膝につけて、大きく息をしながら、恨めしそうに電車を見送っていた。

「あら、あと十秒早く着けたら、電車に乗れたのにね」

宏はそう心の中でつぶやきながら、上着の外からマジカルウォッチを触った。誇らしく思った。

宏の会社は東京の新橋駅近くにある中規模の広告代理店であった。仕事は一応クリエイターなのだが、大手と違い、営業も一緒にしな

ければならないことが多かった。徹夜で企画書を書き上げ、朝一番にクライアントにプレゼンすることかもしれない。宏はクリエイターとしての才能はそこそのものだったが、プレゼンは全くダメで、そのために失注することもしばあった。だから、今は企画に専念し、プレゼンは同期で弁の立つ杉田保にまかせるという分業体制をとっていた。

「新年明けましておめでとうございます。本年も宜しく願い申し上げます」

フロアの入り口で宏は大きな声で新年の挨拶をした。

「おう、おめでとう。今年も宜しく頼むよ」

部長の片桐が少し面喰らったように挨拶を返すと、それがきっかけになったかのように、挨拶の輪がフロア中に出来上がった。

「あら、鈴木君。おめでと。今年も宜しくね。新年早々、何かあったの」

と一年先輩の大野恵美が尋ねると、

「あ、恵美さん、おめでとございます。別に何もありませんよ。毎年のごとく、平々凡々な正月でした」

「あら、そーお。いつもより元気よくて、絶対にいいことがあったと思ったのになあ」

「いいえ、本当に何もありませんから」

「あつても言えるわけないだろう」

宏はそう思った。

宏の所属するセクションは部長の片桐の指揮の下、クライアントに広告の企画を提案するところである。課長の大島と一年先輩で同郷の大野恵美、宏と大学の同期で相棒ともいうべき杉田保、そして入社三年目の課の庶務事項を担当する加藤梨香の計五人であった。課長の大島が宏に声をかけた。

「鈴木、お前と杉田と俺の三人は今日一日担当のクライアントに年始の挨拶回りだ。準備を頼むぞ。それが終わったら三人で軽く一杯だ」

この「軽く一杯」というのがクセ物だった。

「軽く」で終わったことは一度もない。いつも終電ギリギリだった。二十三区内に住んでいる大島と杉田保は電車がなくなって、タクシ―を拾っても、懐はそれほど痛まない。しかし、いわゆる「湘南」である藤沢に住んでいる宏にとってはタクシ―で帰ることはそれこそ大出血であつた。東京に勤務が決まってから住むことを変えることも考えた。しかし、大学時代から住んでいて、この街が好きだったし、東海道線一本で通えるから、そのまま住むことにした。いわゆる「湘南ボーイ」に誇りを持っていた。

第二章 無駄遣い（その2）

三〇分ほどしてから、三人は挨拶回りに出かけた。午前中に二件、午後に四件のクライアント回りして、新橋で「軽く一杯」が始まった。

「それじゃ、今年も宜しく。乾杯！」

大島の音頭で飲み会が始まった。大島はとにかく酒が強い。ビールであれ、日本酒であれ、ウイスキーであれ、ぐいぐい飲みまくる。杉田保もそこそこ飲める方ではあったが、大島には遠く及ばない。宏にいたっては少し飲んだだけで顔が赤くなるぐらいの下戸であった。

「お前たち、ゆっくり休めたか」

大島が二人に訊いてきた。杉田保は

「ええ、私は秋田の実家に帰ってゆっくりしてきました」

「ご両親は元気ですか」

「ええ、元気です」

杉田保は秋田出身で宏の大学の同期生である。といっても、大学時代からの知り合いではない。同じ会社に入って、同じ大学と知ったのである。

「鈴木は実家に帰ったのか」

「いいえ、私は帰ってません。静岡なんでちよくちよく帰れますから。課長はゆっくりできたのですか」

「まあ、ゆっくりはできたんだけどな。いつもほとんど家にいないから子供たちと会話が成り立たなくなってきた。家にいても何か居心地が悪いんだ」

実際、大島は普段も仕事は午前様、休日出勤も多かった。そして、時間があるところして「軽く一杯」に部下たちを誘う。

「早く帰ればいいのに」

宏は心の中でつぶやいた。こういう時間を過ごすから家で居心地が

悪くなるのか、居心地が悪いからこういう時間を過ごすのか、いずれにしても、悪循環に陥っているのは確かだろう。

二時間ほどその店で過ごし、二次会は大島行きつけのスナックだった。そのママさんが大島のお気に入りなのである。

改めて乾杯した後、大島のカラオケが始まった。十八番は「安全地帯」である。

大島が歌っている間、杉田保が宏に声をかけた。

「なあ、宏。俺たちの歳で結婚なんてまだ早いよな」

いきなりの質問に面食らったが、宏は答えた。

「別に早いつていうことないじゃねえの？俺たち、今年で二十九歳だろ。今は晩婚化とかで確かに結婚してない奴も多いけど。昔だったら子供の一人くらいいてもいい歳だぞ」

「そうか、早くもないのか」

「何かあったのか、優子ちゃんと」

田中優子は保と同郷の恋人である。保が高校三年の時、一年生だった優子と付き合い始めたから、もう十年以上の付き合いになる。

「いや、なんでもない。すまん、変なこと訊いて」

「いや、俺は別にいいんだけど。何かあったら相談してくれ」

宏はそれ以上は深入りしなかった。極めてデリケートな部分であり、第三者が口を出すべき話ではないと思った。

大島の安全地帯はまだ続いていたが、宏の腕時計は終電ギリギリの時刻を指していた。

「課長、すみません。もう終電なんで、これで失礼致します」

「おお、そうか。今年も頼むぞ」

「はい、どうも失礼致します。保、また明日な」

「おー、気を付けて帰れよ」

第二章 無駄遣い(その3)

手を振る保を横目で見ながら、新橋駅へと急いだ。何とか走れば間に合う。しかし、宏は突然走るのを止めてしまった。

「また何をやってんだろ。俺にはこれがあるじゃないか」

内ポケットのマジカルウォッチを握りながら、宏はつぶやいた。
- 時間よ止まれ -

ウォッチの竜頭を押すと終電に乗り遅れまいとせわしく動いていた背広やワンピース達がピタツと止まり、今朝と同じように宏の靴音だけがコツコツ響いた。

ほどなくして新橋駅に着き、階段をゆっくり上がった。ホームに出ると最終電車はまだ着てないようで、ホームにはたくさんの人が列を作って待っていた。宏が竜頭を押す今までの静寂が瞬時に喧騒に変わった。やがて、最終電車が到着し、たくさん人の喧騒を飲み込んだ後、静かに新橋駅を湘南を向いて出発した。

「ただいま」

ささやくような声で出しながら、宏は玄関のドアを開けた。別に誰か待っている人がいるわけでもない。単なるクセと言ってしまえば、その通りなのだが、この一言を言うと、無事今日一日が終わったような気分になれるのだ。しかし、今日はいつもと違った。

「はい、おかえり」

電気をつけたと同時に返ってきた言葉に宏は驚愕した。男の声だが、聞き覚えのある声である。青神だった。

青神はワンルームの真ん中にあるテーブルで缶ビールを飲んでいたら、宏が風呂上り飲むためにと買って、冷蔵庫に入れてあった缶ビールであった。少し怒ったような物腰で宏が訊いた。

「一体、何をやってるんですか」

「いやー、マジカルウォッチさ持ってた初日だから、どうだった

べかなと思つて来て見たのよ。しばらく、待つてたら、腹さ減つてきてな。何かねえかなと思つて冷蔵庫見たら、缶ビールと旨そうなチーズかまぼこが飲んでくれ、食つてくれーって顔するから、有り難く頂くことにしたんだ」

「そんな顔、どこについてるんですか」

「いや、本当にそういう顔してたんだよ」

「ビールとチーズかまぼこもいいですから、終わったらさっさと帰つて下さいよ」

「そういうわけにはいかないんだな。俺は一応あなたのフォロー担当だから。ウォッチを返してもらつた時までは、あなたにアドバイスしたりしなくちゃなんねえの。しかし、今日のマジカルウォッチの使い方は見てられないなあ」

宏は少し不安になった。青神は神だから今日何に使つたは説明しなくてもわかるだろう。もしかしたら、使い方が悪くて、没収されるのではないか。

「今日一日で十分以上使つたべ。六十分だから六分の一を一日で使つたことになるな。一体何に使つたか、自分の口で話してみ」

「そんなこと、わかつてるでしょ」

そう言いながら、宏は今日一日の出来事を話した。

「電車で遅れそうだったから、時間止めたつてか。じゃ、このマジカルウォッチがなかったら、どうすんの」

「それは走つて間に合わせますよ」

「んじゃ、今日は何でそうしなかったの？いつもの通り、全力疾走すれば間に合つたでしょう」

「それはそうですね。でもマジカルウォッチがあつたんで使つてしまいました」

「あのね、これは魔法の力なの。魔力なの。だから六十分の制限があるわけ。魔法の力はどうしても力を使わざるを得ない時に使うものなのよ。魔法の力があるから、何でも使つとしたら、本末転倒でしょ。わかるかな」

「はい、よくわかります」

「だいたい、このペースで使っていつてみ。一週間後にこの時計さ回収に來なければならねえだよ」

「確かに青神様のおっしゃる通りです。使い方を間違っておりまして」

「昨日も話したけれど、人間は時間の使い方がいい加減なの。君らから下の世代は特にそう。十分という時間は貴重だべ。三分の一分という時間を考えてみ。ボクシングでいうところの一ラウンドさ。第一ラウンドから第十一ラウンドまで、圧倒的に戦ってきてさ、このままでいけば、間違いなく判定で勝てるという場合を想像してみ。自分の勝利を確信してむかえた最終ラウンドに、一発逆転の力ウンターパンチくらって、立てなかったら負けよ。いくら、十一ラウンドまで差をつけても、そんな差、全く意味ないわけよ。三分という時間は人によっては人生変えるんだから。サツカーでもロスタイムが五分もあれば逆転されることはいくらでもあるでしょ。時間というのは本当に重いわけよ。それじゃ、あんたが今日使った十分間はあるたにとって、どれくらい意味があるの」

宏はずっと下を向いたまま、返事を返せないでいた。すると青神は少し優しい口調で、

「何に使うかはルールに反しない限り、あんたの自由だよ。俺にどうこういう権限はねえだよ。ただ、俺みたいな歳になると、若い人に対して老婆心みたいなものがあるわけよ。そこところ、よく考えて、明日から過ごしてちょ。今日はもう遅いから、お休みなさい」

「はい、ありがとうございます。お休みなさい」

消え入りそうな小さな声で宏は返事をした。青神が消えた後、宏はしばらくボーっとしていた。シャワーを浴びようと浴室に入った。シャワーから出てくるお湯が心なしが、いつもより熱いように感じられた。宏の今日一日を叱り付けるように。

浴室から出て、髪を乾かしながら、マジックウォッチを改めて見た。

十分と四十四秒を指している針が妙に胸を締め付けた。決してそんなことはないのだが、まるで人生の六分の一を無駄に過ごしてきたような気がしてならなかった。

「明日からは無駄に使うのはやめよう。大事な時だけにしよう」
そう心に決めた。少し気分が楽になった。

マジカルウォッチに両手を合わせて、祈るように

「お休みなさい」

と言って、宏は床についた。

（残り時間 四九分一六秒）

第三章 運命の予感（１）

第三章 運命の予感

平成二十二年三月二十三日午後十時、まだ肌寒い気候ではあったが、辺りには徐々に春への息吹が漂い始めていた。神奈川県横浜市戸塚区にあるワンルームマンションの一室で東京の商社に勤めるOLの木村美里が、黄色い衣装をまとったあの黄神の話を聞き入っていた。黄神が言った。

「さあ、いよいよ明日が運命の日だぞえ」

「本当に会えるのでしょうか」

「当たり前じゃ、今年の初詣で八幡様の木の枝に大吉のおみくじを結んだ時から決まっていることじゃ」

「その方がいたとして、私が見逃すことはないのでしょうか」

「会った瞬間、わかるわい。そなたは自分の感覚を信じればいいのじゃ」

「わかりました。自分を信じて、頑張ります」

翌日の新橋の東京エージェンシーのオフィス。

あの日以来、宏はマジカルウォッチを使っていない。正確に言えば、使うべき大事な状況はなかったということなのだが、そのくらい宏の時間は平々凡々と過ぎていった。もっとも、魔法の力を頼るべき状況など大抵の人間は持ち合わせていないから、むしろ、宏は日常一般人の象徴というべきであろう。宏自身と同じくらい、宏の周りも平々凡々としていた。

「なあ保、何か面白いことねえか」

宏は向かいの席に座っている杉田保に話しかけた。

「特にねえよ。お前は？」

「あつたら話してるよ。彼女は元気か」

「まあな。ただ、このところ喧嘩ばかりしていな」

「何かのトラブルか」

「いいや、そういうんじゃない。俺たち、付き合い長いからさ」

「付き合い長いと問題あるのか」

「もういいよ。彼女いない歴三年のお前に話してもしょうがないからな」

「二年と十一ヶ月ですよーだ」

「細かいな。あ、そういえば、さっき営業の奴に聞いたんだけど、一昨日、俺たちが外回りしている時、東洋商事の女子社員が挨拶にきてたらしいぜ。とびっきりの美女だったとか。俺たち、ついてないよな」

「で、その美女はどんな娘？」

「うーん、歳は二〇代半ばくらいで、スタイルのよい、可愛い娘だつて言つてたぜ」

「あー、その娘、見たかったな」

「彼女いない歴三年のお前には、ちょっと目に毒だろうけど」

「だから二年十一ヶ月っていつてるでしょうが」

「はいはい。来月になったら三年ということだな。じゃ俺、今日外で打ち合わせがあるから出かけるぜ」

「三年になる前に、何としても彼女つくるからな」

「がんばってちょ。じゃ、失礼」

「じゃあな、気をつけて」

手を振って、保を見送った。

「どんな娘なのかな。見たかったな」

宏はペンをあごにこすりつけるようにしながら、その娘のことを想像した。

終業のチャイムが鳴り、六時を回ったところで、宏は仕事を切り上げて帰ることにした。課長の大島も杉田保も外出先から直帰だったので、宏は早く家に帰って、夕飯を作ろうと思った。

- 彼女いない歴三年か -

二年十一ヶ月と口でいいながら、あつさり三年と認めている自分が少し情けなかった。

確かに三年前までは、当時の彼女と食事をしたり、彼女の家で手料理を作ってもらったりした。一人身はやっぱり寂しい。

－それから三年も彼女がいなのはチャンスがなかったからか、それとも前の彼女が忘れられないのか－

－えーい、昔の話だ－

思いを断ち切るように、席を立った。

「お先に失礼しまーす」

「お疲れ様でした」

いつもの元気な加藤梨香の声が返ってきた。外に出ると春分の日が近いせいか、まだ明るかった。

第三章 運命の予感（2）

いつものように新橋駅のホームに上った。帰宅時のラッシュアワーそのままに、ホームには人が溢れていた。一番短そうな行列の後ろに並んだ。その時である。人で溢れる駅の喧騒の中でもはっきりとわかる、けたたましい悲鳴がホームの中に響いた。

「きゃー。線路に人が落ちた！」

宏が乗る下り線ではなく、上り線側の線路らしかった。運悪く、上り線には東京行きの列車がすべりこんでいた。ヤジ馬の列はできていても、助けようという気配はない。それもそのはずで、このタイミングで助けようとしたら、助けようとした方も犠牲者になってしまう。

「誰か早く、助けて」

中年くらいの女性の悲痛な叫び声が駅中にこだました。

宏はここぞとばかりに、内ポケットのマジカルウォッチに手をやると

「時間よ止まれ」

と念じ、竜頭を押した。実に二ヶ月半ぶりの使用である。その瞬間、騒々しかったホームの映像と音声がぴたりと止まった。宏は電車を待つ人々の間を拭って、上り線ホームの人だかりのする方へ向かった。

線路に落ちたのは若い女性だった。チャームリングな髪を茶色に染め、顔はモデルさんのようにきれいで可愛かった。何故か、宏が想像した、会社に挨拶にきたという美女とかぶった。幸い、大きな怪我などはしてないようである。しかし、上り電車の先が三十メートルくらい先に迫っていた。時間を止めていなければ、確実に轢かれる。何としても彼女をホームに引き上げなければならぬ。そして、時間を止めている最中に動けるのは宏だけだった。

——俺がやるしかない——

宏は上り線の線路に降りた。身長はそれなりにあったが、スレンダーで体重も軽そうだから、簡単に引き上げられると踏んだが、その読みは完全に外れた。考えていたより、遥かに重かった。足と体を抱える、いわゆる「お姫様だっこ」ではホームに上げるのは無理であった。「死体は思い」と聞いたことがあったが――無論、目の前にあるのは死体ではない――全く意識のない体がどれほど重いかを改めて知った。

今度は、右肩に彼女の体を乗せて、くの字にし、全身で抱え上げた。今度は上げられそうである。その状態で彼女のまず下半身をホームに置き、次にゆつくりと上半身を置いた。

そして、自分もホームに上がり、彼女を安全なところまで運んだ後、マジカルウォッチの竜頭を押した。時間が再び歩みを始めた瞬間、悲鳴があちこちでこだましたが、――宏が時を止める直前の情性である――人々は宏と女性を見つけると一挙に悲鳴を歓声に変えた。

「助かったんだね、よかった。よかった」

「君が助けたの。勇気があるね」

人々は口々に喜びを分かち合った。助けた女性が口を開いた。

「助けていただいて、ありがとうございます」

改めて正面からみると、本当に目の覚めるような美人だった。だから余計に照れて、何でもないように装いたかった。

「怪我はない？どうして落ちたの。まさか自分で降りたってことはないよね」

「ちよつと、擦り傷ができただけです。ぼーと考え事していたら、人にぶつかって、その拍子にストーンと落ちちゃって」

「なら、いいけど」

その時、駅員が確認にきた。駅長室へと促されたが、早く帰りたいと断った。

「でも、本当に危ないところだったのに、どうして助けようとしてくれたのですか」

「どうしてって、目の前に人が亡くなるところなんて見たくないし、

それに上り線で人身事故が起きると下り線のダイヤも乱れるから」
およそ、理由にならない理由だったが、あまりにきれいだったので、
つい、などとは言えなかった。

「本当にありがとうございました。あのお礼をしたいのですが」

「いや、そんなことはいいから。貴女は事務室で傷の手当てをして
もらって下さい。僕は帰りますから」

「それでは名前だけでも」

「ほんとうに気にしないでいいから。偶然通りがかっただけだから
「でも」

宏は彼女に手を振りながら、反対側のホームに來た下り電車に飛び
乗った。振り返ると、閉まったドアの向こうに深々と頭を下げる彼
女がいた。

第三章 運命の予感（3）

宏は他の乗客たちに見つからないように、内ポケットのマジカルウォッチを確認した。針は十五分五十三秒を指していた。彼女を助けるのにはもつと時間がかかったような気がしたから少し安心したが、もう全体の四分の一以上を使ったことになる。改めて、二ヶ月前の無駄に使ってしまった十分間を後悔した。 - 過ぎたことをいつてみてもしょうがないじゃないか - 宏はそう自分に言い聞かせた。今日使った五分は、少なくとも一人の命を救ったんだ。これからも意味のあることに時間を使おう。意味のあることを願い事にしよう。例え、それが自分自身のことではなくても。

ゴトゴト走っていた電車はやがて、宏の家の最寄駅である藤沢に着いた。本当はスーパーに寄って料理の材料を買うつもりだった。

だが今日はあんなことがあったせい、と疲労感が体全体を被っていた。料理はあきらめて、コンビニで弁当を買うことにした。「何にしようかな」

それほど食欲はなかったので、軽めののり弁当と缶ビールを一本買った。

アパートの前に来て愕然とした。部屋の灯りが点いていた。朝出る時は必ず確認するので電気と戸締りには自信があった。

「空き巣にでも入られたかな」

階段をそつと上がり、ドアノブに手を掛けると鍵は閉まっていた。

「やっぱり電気の消し忘れかな」

少し緊張した。不測の事態に備えて、マジカルウォッチを握りしめた。鍵を開け、ドアをそつと引いて開けると

「おかえり」

と聞き覚えのある声が出た。もしやと思い、玄関から部屋に入ると、案の定、青神が缶ビールとチーズかまぼこを並べて、一人で酒盛り

の最中だった。

「ひさしぶりだね。また、ご馳走になっているよ」

青神が赤ら顔で宏に声をかけた。

「ご無沙汰しております。二ヶ月半ぶりくらいですよ。で、今日は何をしにいらしたんですか」

「何をしに来たって、そりゃ、今日マジカルウォッチを使ったですよ」

「はい、使いました。何か問題でもありますか」

「問題なんてあるわけないでしょ。もう俺は嬉しくて、嬉しくてしょうがないのよ。だって人一人の命を救ったんだよ。八幡宮八百有余年の歴史の中で、人の命を救うためにウォッチを使ったのはお前さんともう一人だけだよ。八幡様も大喜びだっぺ」

「そうなんですか。もう一人ってどなたですか。八百有余年の歴史で皆さんはどういう使い方をされていたんですか」

「もう一人はね、白神様に教えてもらったんだけど、確か幕末に活躍した、えーと、忘れた。一番多いのは使ってはダメだっていうのに、悪事に使って没収されたっていうの、これがほとんどだね。

あとは試験の時間を延ばすっていうのも多いな。まず、自分の利益にならないことには使わなんだな。だども、不思議なもので、このマジカルウォッチを使った奴は、その後、えらい大人物になるか、不幸になるかのどっちかな。後のほうが圧倒的に多いけど」

「ええ、そんな。最初にそれを言っておさいよ。それを聞いていたら、マジカルウォッチを辞退したのに」

「あ、それはダメ。俺の同僚のな、赤神っていう、顔がのぺーっとした奴がいるんだけど、そいつが八幡様の境内の吊るしてある絵馬の中からエイっと引っ張ってきた絵馬を書いた人にマジカルウォッチを渡すのが八百有余年続いたきたりだから、許してちょうだい。それにあんたは最近百有余年で初めて自分の利益にならないことに使ったから、幸せになれるかもしれないねえし」

「わかりました。不幸にならないよう、できるだけ控え目に使わせ

て頂きます」

「あ、そうそう、悪用はいかんが、多少の悪戯くらいは大目にみよ。それに・・・」

「それに？」

「詳しいことは言えないけど、その、まあ運命の人も見えるし」

「運命の人って誰っすか、それ」

「だから、詳しいことは言えないの。担当が別だから。そのうちわかるから。んじゃ、俺はそろそろ、おいとますんべ。缶ビールとチーズかまぼこ、ご馳走さま。また、買っておいてね」

最後の言葉を言ったか言わないかのうちに、青神は消えてしまった。「運命の人って何だろう」

考えてみても浮かばなかった。ふうーとため息をつきながら、上着を脱いでベランダに出てみた。三月の夜風はまだ冷たく、肌に突き刺さるようであったが、何故か、宏には心地よい、そよ風のような気がした。

（残り時間 四十四分七秒）

第四章 めぐりあい（１）

第四章 めぐり会い

翌日、会社に着くと、何やらザワザワした雰囲気漂っていた。

「おはようございます」

宏が挨拶をしながら席につくと、隣の席に座ってる大野恵美が覗き込むように宏の顔を見上げた後、こう訊いてきた。

「ねえ、鈴木君、昨日、新橋駅でホームに落ちた女性を助けたんだって？」

驚愕の表情で宏が訊き返した。

「え、何でそんなこと知っているんですか」

「たまたま、総務の高田さんが目撃したんだって。神技くらいの速さだったって、言っていたわよ」

やばい、他人にばれると使えなくなる。この場はうまく取り繕わなければ。

「いや、いわゆる火事場のバカ力っていう奴ですよ。必死だったものからです」

「それより、鈴木君の助けた女性、実は一昨日、挨拶に来た東洋商事の〇しさんなんだって」

「え。そうなんですか」

宏は驚いたというより、興奮した。一昨日来た美女と自分が助けた美女は同一人物？

頭の中で事実と願望がごちゃごちゃになっていた。そうと知っていれば、連絡先交換できたのに。だが、この認識は間違っている。普通は一昨日来た美女と知らなくても、連絡先交換できるのだから。昼休みになって保が昼飯に誘ってくれた。宏はうなずき、上着を手に取った。昼食時はどこも混んでいるのだが、会社にほど近いところにある行きつけの喫茶店はメニューが少ないせいか、いつも席が

空いていた。宏も保もこのカレーピラフがお気に入りだった。

カレーピラフを食べ終わったところで、保が唐突に尋ねてきた。

「午前中、やけにそわそわしていたけど、助けたっていう女のことか」

「いや、そういうわけじゃないけど」

「そわそわする必要があるか。簡単に言えば。お前が一日挨拶に来てたOLの命を救ったっていうことだろ」

「それはそうだけど、そんな偶然であるのかなって思ってた。ちよつと不思議な気分になったのよ」

「ところで、その女は実際、きれいで可愛かったか」

「ああ、可愛かったよ。彼女だったらいいなあと思えるくらいの」

「なら、付き合っちゃえよ。連絡先くらい訊いたんだろ。」

「いや、何も訊いてないよ。俺も知らないし、彼女も俺の連絡先知らないし」

「何やってんだ、お前。だから彼女いない歴三年になるんだよ」

「だから、二年十一ヶ月っていつているだろう」

二人は残りのコーヒーを飲み干し、勘定を済ませて外に出た。会社のあるビルに近づくといつとエントランスの所に女性が一人立っていた。近づいて、はつきり確認できる距離になった時、宏は自分の目を疑った。

・あの娘は昨日、助けた女性。一日挨拶に来た女性・

宏は保に買い忘れたものがあるから先に行ってくれと嘘を言って、こつそり裏口に回った。

・何でまた来ているんだ・

午前中と同じように整理しようと思ったが、今度はどうしても整理がつかなかった。

「鈴木、あさつてのプレゼン資料、大丈夫だろうな」

課長の大島がフロアにきた。

「はい、大丈夫です」

うわの空で答えたものの、大丈夫ではなかった。企画書自体はでき

ていたのだが、プレゼン要領書ができていなかった。プレゼン要領書とは企画案をプレゼンターが説明する際の手順を記したもので、これがないと、プレゼンターの杉田保が立ち往生してしまう。

しかし、宏に要領書つくる気力も意欲もなくなっていた。とにかく、早く終業のチャイムが鳴って欲しかった。

午後五時三十分、業務終了を告げるチャイムが鳴った。結局、要領書はできないままであったが、その気になれば、明日の午前中には仕上げる自信があった。

「保、悪い。要領書は明日の午前中に作るから。具合悪いから帰るわ」

と声をかけ、席を立った。

「おーわかった。大丈夫か。気を付けてな」

保が言い終わるか終わらないかというところで、廊下に飛び出した。エレベータを押して待っているうちに宏の心の中に不思議な感情が芽生えていた。

- 何故、俺はあの女性のことが気になるのだろう。何故、彼女のことをこんなに避けているのだろう。俺は彼女をたまたま持っていた魔法の力で助けただけなのに -

第四章 めぐりあい(2)

謎が解決しないまま、エレベータが一階に着いた。柱に隠れながら、エントランス付近を覗くように観察すると彼女はいない。ほっとして、エントランスを出て、足を駅の方へ向けた、その瞬間、

「こんにちは」

という女性の声と肩をポンと叩かれる感触が同時に来た。例の彼女である。何か言おうとしたが、何も出て来ない。代わりに彼女の方が、話かけてきた。

「昨日はありがとうございました。今、こうやって、お話できるのもあなたのおかげです」

とぺこつと頭を下げた。宏はようやく落ち着きを取り戻して、

「何故、僕がここの社員だとわかったの」

と彼女に尋ねた。彼女は

「胸の社章で東京エージェンシーの方だとわかったんです。ここで待っていると会えると思って」

「それで、ずっと僕を待っていたの」

「はい、もう足が棒になってしまいました」

「今日、お勤めは？昨日も言ったけど、気にしないでいいんだよ」

「会社は休暇を取ってきました。お礼をしないなんて、そういうわけにはいきません。命の恩人だから、ちゃんとしないと」

「だから、お礼なんて別に・・・」

「させて下さい。そうしないと明日も着てしまいますよ」

宏は観念した。

「じゃ、有り難くお受けします。何をしてくれるの」

「そうですね。これから食事でもいかがですか」

「良いよ。じゃ、連れて行って。どこでもいいから」

「じゃ。イタリアンのお店に行きましょう」

彼女が連れてってくれたのは、こじんまりとした、けれど所々に

洒落た内装の施してあるイタリアンレストランである。

席に着くなり、

「お酒はワインでいいですか」と彼女が訪ねた。

「なんでもいいよ。僕はあまり酒にはうるさくないんだ」

「あ、自己紹介してなかったですね。私、木村美里といいます。東洋商事の宣伝部に勤めてます」

「え、宣伝部なの。それでうちに挨拶に来ていたんだね」

「そうです。異動で新しく宣伝部にきたので、挨拶しにきました」

「付き合ってる彼とかいるんでしょ」

「いいえ、いません。もう二年近くフリーです。今年こそ彼を見つけてようと鎌倉の八幡様をお願いにいったら、三月二十四日に新橋駅で巡り合えるって、黄神さまがおっしゃられたから、あたりをきよるきよる見ていたら、人にぶつかって、線路に落ちたんですよ」

「キガミサマ？」

「あ、それはどうでもいいです。占いみたいなものですから」

「でも、込んでる駅だから気をつけなきゃ。そんなん、命を落としたら、もともこもないよ」

「そうですよね、本当に感謝しています、あ、失礼ですが、お名前を伺っていいですか」

宏は名刺を渡しながら、

「あ、ゴメン。俺の名前は鈴木宏。どこでもいそうな平々凡々な名前、仕事は一応、クリエーターだけど」

二人のパスタやピザを食べながらの会話は、ほんの数時間前までに宏が抱えていた不安を一挙に吹き飛ばすように弾んだ。

最後のデザートを食べ終わった頃には、住まいは同じ神奈川県で同じ電車で通勤していること、二人とも一人っ子であること、郷里は彼女が名古屋であることなど、お互いの素性も明らかになっていった。

「携帯の番号とメアド交換しましょうよ」

美里がいうと宏もうなずき、赤外線通信で交換をした。

二人の会話は店に出て、新橋駅まで歩き、そこで東海道線の下り電車に乗った。発車してしばらくするとちょうど品川駅に着く直前くらいに、酔客同士が口論を始めた。五十くらいの初老の男と二十半ばの青年であった。初老の男が電車の揺れで青年の方にぶつかったのに謝らなかつたらしい。近頃は分別のあるはずの大人同士がくだらないことで小競り合い、果ては殺人まで発展することもあったりで、何とも物騒な世の中である。

品川に着くと、駅の係員が仲裁に入ったが、双方とも譲る気配はない。これでは電車も止まったままである。

「うーん、ちよつと悪戯するか」

宏は左胸のマジカルウォッチに手をやり、

「あの二人のズボンが脱げ落ちる」

と念じて、竜頭を押した。すると、まず若い方の男のズボンが下へずり落ち、周りで笑いが起こつた。喧嘩の相手方も笑つた。しかし、すぐに年配の男のズボンもずり落ち、これも笑いを誘つた。双方、ズボンが脱げないよう、手で押さえてるのが滑稽でおかしかった。

そんなことを続けているうちに双方の怒りも収まつたのだらう。駅員の仲裁を受け入れて、二人の争いも収まつた。宏は竜頭を押して、魔法を解いた。美里が

「何だつたのかな、あれ」

聞いたので。宏は

「笑いの神様が人間の争いの仲裁に入ってくれたんだらうね」とすつとぼけて答えた。

電車はやがて彼女の最寄駅である戸塚に着いて、互いにサヨナラをした。電車が発車するまで、彼女はホームで手を振ってくれた。

宏は彼女と別れて、電車の中で一人でつり革につかまりながら、黒いままで変わり映えのしない、だけど自分の顔をはつきり映し出している窓の外をぼんやり眺めていた。

と、突然、何とも表現のしようのない、そう、帰りのエレベータを待っている時に感じたものに似ているが、それとはまた違う感情

に襲われた。それは何となく懐かしい感じであった。

第四章 めぐりあい(3)

やがて、電車は宏の住む藤沢へ到着した。コンビニで缶ビールとチーズかまぼこを買った。別に青神に食べさせるためというわけはなかったのだが、缶ビールとチーズかまぼこはいつもそろえておきたいという思いに駆られていたからである。

アパートの近くまで来た時、アパートの明かりは点いていなかった。

「今日は来てないみたいだな」

宏は半分安心し、そして半分は少し寂しげにつびやいた。ドアを開け、中に入って、電灯を点けた瞬間、宏は思いがけず、後ろにのけぞった。青神がいきなりをたてて、寝ていたからである。

「青神様、青神様、起きて下さいよ」

宏は耳元でささやいた。それでも起きないので体をゆすった。

「う、うーん。あ、お帰り」

青神が目をごすりながら、返事をした。

「ただいま。一体何をやっているんですか」

「何って、帰ってくるの待ってたのよ。冷蔵庫みたら缶ビールもチーズかまぼこがなかったから、寝て待っているしかなかったんだ」

「ビールとチーズかまぼこはここにありますが、食べたらずく早く帰って下さいね」

宏が買ったばかりの缶ビールとチーズかまぼこを差し出すと、青神は嬉しそうに

「あら、ちゃんと買ってきてくれたのね。サンキュー。嬉しいわ」

とはしゃぎながら、缶ビールを開け、チーズかまぼこの袋を破いた。

「で、今日は何しに来たんですか」

「何しに来たって、俺は来たい時に来るよ。神様の特権だからね。逆に来たくないときがどんなに頼まれても、来ないからね」

「それじゃ、何故来たいと思ったんですか」

「だって、今日は君にいいことがあったべ」

「別に特にないですけど」

「あのね、神様にウソついたらダメでしょ。ウソついても、神様はお見通しだよ」

「だったら、言わなくてもわかるでしょ」

「それを正直に話すことに意味があるわけ。あの、ほらキリスト教でも教会に懺悔室ってあるでしょう。正直に罪を告白するところ。

あれは言わなくても神様はお見通しなんだけれども、自分の口からその罪を告白することに意味あんだ。あれと一緒に」

・懺悔とは違うだろう・

と思いながら、宏はしかたなく、昨日助けた女性と出会ったこと、携帯の番号やメアドを交換したことなど、そして、自分の心の中にある不思議な感情についても話した。

「はー、それは恋だな」

「恋ですか」

「そりゃ、そうでしょ。中学生でもわかるべ。懐かしい感じは君が彼女いない歴三年だから三年ぶりに感じたんだべ」

宏はそう言われて、顔をすこし赤らめた。

「そんないい歳こいた男が恋の一つや二つで顔赤くしてどうすんだべ。どんと構えてればいいの。これでやっと彼女いない歴がゼロクリアになるべ。俺も嬉しいわ」

「でも、まだ、彼女になったわけじゃありませんから」

「お前、アホか。彼女になりたいと思わない女性が自分から食事に誘ったり、携帯の番号やメアドの交換すっか。男はどんと構えて、女性のことを受け止めればいいの。俺はこれで帰るから、明日からちゃんと彼女のこと受け止めるんだよ」

青神はいつものように一回転して消え去った。

宏は恋だと言われて、最初はドキドキしたが、三年前に彼女がいた時の感覚が蘇ってくるのを感じた。

「そうだった。これは恋だ」

改めて、確信した。明日からは確実に生まれ変わる。彼女とどう過ごそう。どこへ行こう。そう思うだけでワクワクした。

ふと、内ポケットのマジカルウォッチを触ってみた。

「俺と彼女を引き合わせてくれたのも、このウォッチだ。神様が言っていた運命の人とは彼女のことに違いない。このウォッチは人を幸せにする力がある。だから、これは大切に使わなければならないんだ」

宏は心からそう思った。

その三十分前くらい、横浜市戸塚区の洒落たワンルームマンションの一室。木村美里は黄色い衣装をまとった黄神と向き合っていた。黄神が語りかけた。

「初デートはどうだったかの？」

「おかげさまで、仲良くなれました」

「そうか、それはよかったのう。次のデートはいつじゃ？」

「まだ、決めてませんけど」

「早く、決めんか。こういうものはスピーディに運ばなければならん」

「でも、そんなに急に迫ったら、変な女だと思われませんか」

「大体、今の男どもは軟弱すぎる。そういうときは女のほうから攻めねばならんのじゃ」

「ええ、具体的には」

「次のデートで押し倒されるようにもっていくのじゃ。そうならん時はそなたが押し倒せ」

「ええー、私の方から押し倒すのですか」

「そうじゃ、そうやって、あの男を自分の物にするのじゃ。わかつたかいの？」

「はい、頑張ってみます」

黄神は美里の返事を聞くと、宏の時の青神と同じようにくるっと回って消えた。

- 本当に大丈夫かな。はしなないって思われたらどうしよう -
美里は少し心配になったが、
- ここまできたら、黄神様を信じて、いくしかない -
そう、心に決め、浴室に入ってしまった。

第四章 めぐりあい（４）

翌朝、宏がオフィスに入ると、杉田保が

「宏、おはよう。何かいいことあったみたいだな。顔がにやけているぜ」

とからかい半分に言ってきた。

「別に何も無いよ」

宏はとぼけてみせたが、

「当てるやろうか。女ができた。そんなところだろう」

といきなり、核心をついてきた。・こいつ、本当に鋭いな・と心の中でつぶやいた。

「図星だな。で、いきさつは？」

宏は観念して、昨日あったことを正直に話した。親友の保に隠していてもしょうがない。

「へえ、そんなことがあったんだ。彼女いない歴に終止符を打つわけだ。今度、俺にも紹介してくれよ」

「ああ、わかったよ」

その後、宏は午前中のうちにプレゼン要領書を仕上げた。昨日とは打って変わって、仕事がかどった。午後一時からのプレゼン事前打ち合わせを終えると、時刻は三時を回っていた。

ふと、携帯を見ると、メールが一件入っていた。美里からだ。

「昨夜はありがとうございました。とつても楽しかったです。鈴木さんはどうでしたか。いろいろな話ができて、とつても幸せな気分になりました。また、デートしたいなあ」

彼女の明るい笑顔を想像して、宏も嬉しくなった。もし、今、目の前にいたら。ぎゅっと抱きしめたいと思った。

「僕も木村さんと出会えて嬉しかったです。今すぐにも会いにいききたい気分です」

宏はメールを返信した。女性にこんなメールをしたのは何年ぶりだ

ろう。何かとても恥ずかしい気持ちになった。すると、すぐに返事が帰ってきた。

「今度はいつ会えますか。できるだけ早くがいいな」

宏は返信した。

「今日は明日のプレゼンのリハーサルがこれからあるから、できれば、明日がいいな」

すぐに美里から返事が返ってきた。

「それでは明日、会いましょう。絶対ですよ」

本当に可愛くて、抱きしめたい気がした。

プレゼンのリハーサルが終了したのは夜の八時を回ったところだった。杉田保に食事に誘われたが、なんとなく、明日に備えて英気を養っておきたい気分だった。プレゼンもそうだったが、その後のデートも全力投球したかった。新橋で下り電車に乗り、五十分ほどで藤沢駅についた時、時刻はちょうど九時半だった。コンビニで豚肉のしょうが焼き弁当を買った。レジのところまで急に思い出し、

「すみません、ちょっと追加したいものがあるんで」

と缶ビールとチーズかまぼこを買った。今日いるかどうかはわからなかったが、ないとぶつぶつ文句を言われそうな気がした。レジで清算を済ませ、店の外へ出た。

アパートの部屋を見ると灯りが点いていた。

「あ、いるんだ」

宏は二階に駆け上がり、鍵を開けて中に入った。

「ただいま」

「お帰り」

ほぼ同時だった。青神はいつものようにテーブルのところでビールを飲んでいた。ただ、酒の肴がチーズではなく、コンビニで売っている鳥の唐揚げだった。

「あれ、チーズかまぼこじゃなくていいんですか。それ鳥の唐揚げですよ」

「チーズかまぼこ探してもないから、どうすべっかと思ったんだけ

んども、何、これ、鳥の唐揚げっていうの、中々旨いから、これでもいいわって、これ肴にして飲んだのよ」

「そうですか、じゃ時々買っておきますよ」

宏は買ってきたビールとチーズかまぼこを冷蔵庫にしまい、豚肉のしょうが焼き弁当を持って、青神がビールを飲んでいるテーブルのところへやってきた。

「彼女とはどう？」

「それが明日、また彼女に会うんですよ」

「そりゃ、仲のいいこってよかったな。それでもうエッチはしたのけ？」

宏は前につんのめりそうになった。

「昨日、正確にはおととい、知り合ったばかりですよ。何でそこまでいくんですか」

「いやー、今の男どもは草食系っていうの、何かこう受身で、エッチも時間をかけて、徐々についていう感じで。だけど、あんたのお父さんがちょうどあんたの歳くらいの時は、

もう知り合ったその日にベッドインっていうのが最高のプレイボーイ、男の鏡っていう時代だったんだ。俺も今のカミさんとは出会ったその日に子供つくったくらいだから、今の男どもが情けなくて、情けなくて、仕方がないわけよ」

「え、神様もエッチするんですか」

「そりゃ、詳しいことはいえないけどもさ、人間のそれに類することとはしねえとさ、子孫繁栄できんからね。だから、明日は絶対エッチまでもっていき」

「神様が後押しして、どうするんですか」

「いや、人間の子孫繁栄してくれなければ、神様業も大変なのよ。子供少ないと安産祈願やお宮参り、七五三のお参りも少なくてよ。神様界はそれで金入らねえと、お手上げなんだわ。そこんこは理解してくれなければ。じゃ、俺はこれで失礼するよ。じゃ、また明日」

青神はいつものようにくるっと回って姿を消した。

「いつも勝手なことばかり言う人、いや神様だ。人間よりよっぽど俗っぽい」

宏はぼやいた。

-でも、子供が少ないと困るのは人間界も同じだな。それにしても、明日のデートは何をするんだろう。食事をして、お酒飲んで、それから・・・それから先を考え始めて、思わず顔が紅潮した。-なるようになるさ-それ以上考えるのはやめにして、買ってきた弁当をレンジで温め、包みをあけ、遅い夕食をとり始めた。

（残り時間 四十一分四三秒）

第五章 恋人と上司（１）

第五章 恋人と上司

翌日のプレゼンはいい出来だった。宏の企画もよかったし、杉田保のプレゼンテーションも絶妙だった。クライアントの受けも上々で、受注できるという確信があった。

クライアントからの帰り道、宏は美里にメールを送った。

「プレゼン、うまくいきました。今日は大丈夫ですか。どこで待ち合わせますか」

すぐにメールが返ってきた。

「もちろん、大丈夫ですよ。どこでもいいです」

宏と美里は新橋の汽車のある広場で六時に待ち合わせることにした。保に花金だからと飲みにも誘われたが、用事があると断った。保はニヤけた顔でからかった。

「彼女とデートか」

「まあ、そんなところだ」

「じゃ、今日は泊まりだな」

「お前、神様と同じことを言っただな」

思わず、本音が出てしまった。

「神様？何だそれ？」

宏はしまったと思い、あわてて言葉を繋いだ。

「いや、彼女とどうなるかは、神様にしかわからないということだよ」

「そんなこと言わずに押し倒しちゃえ」

「馬鹿なこと言ふなよ」

宏は青神の言っていた自分の父親世代の話を思い出した。

- あの神様からすれば、保みたいな奴が男らしいということになるんだろうな -

会社に着いてから、終業までの間、宏と保は課長の大島と次の商談の打ち合わせをした。

それが終わった後、今度は大島に誘われたが、用事を理由に丁重に断った。

「できたばかりの彼女とデートですよ」

保がちゃかすように大島に告げた。

「そうか、じゃ、しばらく飲みには誘えないな」

「いや、そんなことはありません。こら、保、いい加減なことを言うな」

宏は慌てて、保に怒鳴った。すると大島が

「でも、今度、時間が空いてる時は付き合ってくれよ。君たちのような若い奴に訊きたいことがあるんだ」

「わかりました。今度、時間をつくります」

宏は訊きたいことって何かなと思いつながら、大島に返事をした。

終業のチャイムが鳴るなり、宏は席を立ち、

「お先に失礼します」

とフロアを飛び出した。

「お疲れ様でした」

遠く、加藤梨香の返事の声を聞きながら。

待ち合わせの場所までには十分時間があつたが、宏には寄りたいたころがあつた。花屋である。初めての本格的なデートであつたから、ちよつとキザであつたが、花束を贈りたかつた。

花屋で花束を買った後、宏は新橋の汽車広場へと足を運んだ。時刻に遅れたわけではないが、既に美里が待っていた。

「あ、ごめん。待った？」

「ううん、今来たばかりだから」

「あ、これ」

と花束を差し出すと、

「わあ、嬉しい。ありがとう」

と感激してくれたようであつた。

「どこ、行きます？おなかすきません？」

宏が尋ねた。

「もう、ペコペコ」

「じゃ、行きつけの寿司屋があるから、そこに行きましょう」

「あ、お寿司だーい好き。行きましょ」

先に歩みを始めた宏の左腕に美里は自分の右腕をからめた。一瞬、宏はドキつとしたが、何でもない風を装って、そのまま歩いた。

寿司屋に入ると、二人は左手奥のカウンター席に腰掛けた。

「じゃ、木村さん、何でも好きなものをどうぞ」

宏が促すと、美里は少しむくれたような顔をして、言った。

「その木村さんっていう呼び方と、ですます調の丁寧な物言いはやめて下さい。何か物凄く他人行儀な感じでいやです」

「じゃ、美里さん」

「美里って呼びつけにして結構です」

「いくらなんでも、それは抵抗あるな。それじゃ、美里ちゃんって呼ぶよ」

「わかった。じゃ、私は宏君って呼ぶね」

それから二人は、ビールを飲み、好きなねたの寿司を口にしながら、話をはずませた。話す口調も長く付き合ってきた男女のように、親しみ深いものになっていった。

「ねえ、そろそろお店変えない？私の好きなお店があるの」

「わかった。じゃ、そこに行こう」

宏が勘定をすまして、外へ出ると、寿司屋に向かっていたのと同じように、美里が腕をからめてきた。そして、二人は腕を組んだまま、美里のお気に入りのお店に向かった。その店はさっきの寿司屋と違い、黒を貴重とした内装に薄暗いライトという、洒落た、大人のバーであつた。

「ね、いい雰囲気でしょ」

美里が誇らしげに宏にささやいた。

「うん、そうだね」

宏はこの手のバーにはあまり行ったことがない。だから、何か自分が大人の仲間入りをしたようで嬉しかった。

二人はカウンターに座った。美里はカシスオレンジを、宏はバーボンのロックを注文した。宏は悪酔いした経験があるから、カクテルはあまり、好きではなかった。美里は覗き込むようにして、宏に尋ねた。

「私は宏君の彼女で、宏君は私の彼氏っていうことでいいんだよね」唐突な質問に一瞬たじろいだ。

「それは、そういうことでいいと思うよ」
と言うのがやっとであった。

「ふーよかった。私、確認していなかったから、もし、「俺、実は彼女いるんだ」なんて言われたらどうしようかなって思ってたんだ。これで安心。ところで彼女いない歴どれくらい」
痛いところを突かれたが、バカ正直に答えた。

「二年十一ヶ月」

美里は驚いた顔して、

「へーそんなに。宏君でルックスが良くて、性格も優しいそうだから、モテモテだと思ってた」

「そんなことないよ。結構不自由しているんだ。美里ちゃんはどれくらい」

「二年くらいかな。一昨年の夏の前くらいだったから。あ、そんな話、どうでもいいの。これから二人はどんどん親密になってゆくんだから」

「親密」という言葉を聞いて、宏はドキつとした。この言葉の持つさわやかなとその対極にあるいやらしさが宏の頭の中で交錯した。

「あ、今、いやらしいこと考えてたでしょ」

「そんなことないよ」

「だって、顔が赤くなつた」

「酒飲んだからだよ」

「まだ、お酒来てないもん」

言い合ってる二人に分け入るように、バーテンダーが注文した酒を置いた。

「カシスオレンジとバーボンのロック、お待たせ致しました」

美里が音頭を取った。

「それじゃ、改めて乾杯しましょ。二人の出会いにかんぱーい」

「乾杯！」

二人は声を交えて、グラスを寄せ合った。

二人の会話は寿司屋の時以上に弾んだ。美里が学生時代モデルのアルバイトをしていたことなど、お互いの新たな発見の数々で時間はあっという間に過ぎていった。

美里はかなり酒に強いらしく、飲むペースが速かった。しかし前にも言った通り、宏はそんなに酒が強くない。会社では皆、それを知っていたから、宏はいつも自分のペースで飲めた。しかし、美里はそんなことを知る由もないから、さっきの寿司屋でもこのバーでもぐいぐい飲み続けた。宏の許容酒量は限界に近づきつつあった。

「美里ちゃん、俺、酒弱くてね。だから、もう酔っ払っちゃって」

宏は正直に告げた。

「あら、そうなの。ごめんね、気が付かなくて。私、自分が結構飲めるものだから、ついペースが速くなっちゃって」

「いや、いいんだ。俺が弱すぎるだけだから。これ一杯飲んだら出よう」

「うん、わかった」

二人でグラスを飲み干し、バーを後にした。時刻は十時半だった。通常なら帰る時間ではない。しかし、泥酔度は十分帰る基準を満たしていた。

・酒が強ければ、もっと長く一緒にいれるのに・

宏は自分の酒の弱さを恨めしく思った。

第五章 恋人と上司（2）

二人は新橋駅の方へ歩いていった。さつきと同じように腕を組んで歩いたが、今度は幾分、美里が宏の体を支える感じだった。

二人は新橋駅から下りの電車に乗った。美里は宏の左肩に右の頬を押し当てるように、体を寄せてきた。酒の弱さは恨めしかったが、同じ電車で帰れるというのは何かの縁なのかなと思うと嬉しかった。新橋駅から四十分ほど電車で揺られたところで、社内アナウンスが響いた。

「まもなく、戸塚、戸塚に到着します」

美里が降りる駅である。今日は楽しかった。また、すぐ会いたい、名残惜しいが、と宏がお別れの挨拶をしようとした、その時、美里が信じられないことを言った。

「ねえ、宏君。私の部屋でお茶飲んでいかない？」

「でも、時間ももう遅いし」

「私、もっと、宏君と一緒にいたい」

そんなことをいう美里が無性に可愛かった。酒に弱いところを補えるかなとも思い、

「うん、わかったよ」

宏はうなずいた。

二人は戸塚駅に降りて、美里のマンションに向かった。洒落た、綺麗なワンルームマンションであった。他人の部屋に上がるわけだから、

「お邪魔します」

というのが通常であろう。しかし、宏は三年そいうことがなかったから、つい、

「ただいまー」

と自分の部屋に入る時の癖が出てしまった。

宏は苦笑し、

「変だよ。お邪魔しまーす」

と言い直した。美里は、

「どうぞどうぞ。そのうち、ただいまーが当たり前になったりして」と意味深なことを言った。靴を脱いで部屋に上がると、綺麗に整頓された、いかにも若い女性の部屋であった。

リビングの絨毯の上に腰掛けると、美里が

「コーヒーでいい？」

と訊いてきた。

「いいよ、ブラックでお願い」

と宏は返事をした。一つの部屋に若い男女がいる。それだけで十分スリリングなのにもう夜も更けている。いやがおうでも妄想が湧いてくるのを宏は頭を振って押さえ込もうとした。

「お待たせしました」

とカップが二つのつたお盆を彼女が運んできた。そして、一つを宏の前に、もう一つをそのすぐ横に置いた。そして、宏の横にピツタリ体をくっつけてきた。宏の心臓がどくどくと波を打った。

「ねえ、宏君、今年の初詣行った？」

「行ったよ。毎年同じ鶴岡八幡宮」

「私もそこに行ったの。いつもは違うんだけど。そして、おみくじ引いたらね、大吉だったんだよ」

「へえー。俺もおみくじ引くけど、大吉はないな」

「それでね。おみくじを木に結んだ時、「三月まで待ちなさい。三月になればいい人にめぐり会える」って後ろから声がしたの。したら、宏君とめぐり会った。最初に会った時にあ、この人だっと思ったの」

「俺も最初に会った時、ピンときたんだ。気のせいかと思ったけど、今、こうして・・・」

言葉は要らなかった。見つめ合う目と目。見上げるように差し出された美里の唇に、宏は自分の唇を重ね合わせた。

「夜明けのコーヒーも一緒に飲もうね」

美里の体をぎゅっと抱きしめながら、宏はささやいた。そして、そのまま倒れこんで・・・

翌週が明けて月曜日。宏はフロアに入ってくるなり、ひときわ元気な声で挨拶した。

「おはようございます」

隣の恵美がちよっと、びつくりしたように、宏に訊いてきた。

「おはよう。何か元気いいわね。いいことでもあったの」

宏がそれに答えるよりも早く、向かいの席の杉田保が余計なおせっかいを焼いた。

「そりゃ、元気でしょ。彼女いない歴が止まったんですから」

「保、余計なこと言うんじゃないよ」

と宏が止めに入ったが、恵美は

「それはおめでとう。これで飲み会で鈴木君の彼女いないいないの悩み、聞かされずにすむね」

と安心した母親のように大きく、うなずいた。

保は向かいから身を乗り出すように、今度は恵美にも聞こえないようにささやいた。

「で、押し倒したか」

「お前は どうして、そう下品な言い方するんだよ。まあいい。夜明けのコーヒ―は飲んだよ」

「あら、上品だとそういう言い方になるのね。でも、よかったじやん」

「おかげさまでな」

その時、課長の大島がオフィスに入ってきた。

「おはようございます」

課員がちが口々に挨拶をした。

「おはよう」

大島も挨拶を返した。

宏は最近、大島が元気がないように思えた。保も恵美も同じよう

に思っていた。そういえば先週、飲みに行くのを断った時、若い人の意見を訊きたいと言っていたな、と思い出した。今度誘われたら、付き合おうと思った。

午前が終わり、午後半ばを過ぎた三時半をまわったところで、課長の大島が

「今日、軽く一杯行かないか」

と誘ってきた。宏は特に用事がなかったし、大島のことになったから、快諾したが、保は取引先との接待があつて、無理だった。結局、宏と恵美が大島に付き合うことになった。

五時半になり、終業のチャイムが鳴った。

大島、恵美と宏は並んで新橋の屋台村に向かった。いつも使うおいしい焼き鳥屋があつた。

生ビールで乾杯をした。心なしかいつもより少し重い雰囲気だった。大島は今年四十五歳、入社二年のベテランだった。派手さはなかったが、コツコツ仕事をこなす努力家で、性格も温厚、誰に対しても公平で思いやりのある態度で接するので、部長の片桐からも、部下からも信頼は厚かった。家族は妻と中学生の女の子、小学生の男の子の四人家族で宏は写真を見せてもらったことがあつた。家庭内のことはわからなかったが、特に問題を抱えているようにも思えなかった。

大島が口を開いた。

「君たちが小学生や中学生の頃、お父さんはよく遊んでくれたのかな」

少し唐突な質問だったが、宏は答えた。

「遊んでくれたといえば、そうですが、たまにっていう感じでしたね。仕事、仕事っていう感じでしたから」

「私は女の子ですから、あまり父親とは接点はなかったです。相談事は母親にしてたし。」

それにうちの父、頑固でしたから、四六時中、喧嘩してたような。今じゃ、たまに家帰っても口も利きません」

と恵美が笑った。恵美の実家は偶然、宏と同郷の静岡の清水で、地元では名を知らぬ者がいない海苔の卸問屋であった。当然、恵美の父親のことも宏は知っていた。

「女の子のほうは大野君のように母親に任せていてもいいのかなと思う。年頃になれば、いろいろと難しいこともあるし。ただ、男の子はなあ」

宏が尋ねた。

「息子さんの方に何か問題でも」

「今年、小学校四年になるんだ。四月に入ると運動会があつてね。今年は絶対見に行くと約束したんだが」

「行けなくなつたんですか」

「うん、先週、取引先からゴルフ誘われてね」

「そんなの、断ればいいじゃないですか」

「そういうわけには行かないよ」

「なら、僕か、杉田が代わりに行きますよ」

「いや先方が幹部だからね」

「だったら、片桐部長に頼みましょう。私に任せて下さい」

恵美が胸を張って答えた。恵美は片桐部長にはめっぽう強かった。部長に何かやつてもらふ時は恵美に頼むというのが、鉄則であった。あまりにも強いので、部長の愛人では、などという噂があつたくらいだ。

「いや、無理しなくてもいいよ」

大島はそう言つたが、恵美はやる気満々で、

「いいえ、任せて下さい。絶対に大丈夫ですから」

と答えた。宏はそんなに深刻なこととは思えなかつたので、確かめて見たかつた。

「でも、課長、運動会を見に行く約束でそんなに悩む必要があるんですか」

「実は去年も約束したんだよ。必ず見に行くつて。でも行けなかつた。今回と同じ接待ゴルフだね。そしたら倅の奴、約束を破つたつ

て、怒っちゃってね。あまり、口をきいてくれなくなっちゃったんだ。来年、つまり、今年は絶対行くと約束してやつと機嫌直してもらったから、今年はどうしても行きたいんだ。パパが見に行くから、今年はがんばって、リレーの選手になったって、言ってさ」

大島はビールを一口ぐいと飲んだ後、続けた。

「さつき、鈴木君も言っていたが、俺も子供の頃は親父は仕事、仕事って、ほとんど家にいなかった。運動会なんて母親しか来なかったからね。でも、今は父親も育児をするって、世の中だから、発想を変えないとね」

宏は思ったことを口にした。

「子供の頃って、自分が頑張っている姿や活躍してる姿を親に見てもらいたいんですよね。」

自分の成長って奴ですか。だから、息子さんが頑張ってるリレーの選手になった気持ち、よくわかります。それを親、特に普段はいない父親に見せたいってことも」

「私は二人姉妹だから男の子のことはわかりませんが、親に見てもらいたいっていうことは同じです。ただ、母親に見てもらえば満足です。父の方は別に」

恵美が笑いながら、言葉を追加した。

「二人ともありがとう。何か胸につかえたものが取れた感じだよ。本当にありがとう」

大島が感謝の言葉を言って、お開きとなった。

「今日は本当に軽く一杯だ」

宏はちよっとおかしかった。時間をかけて飲んだ時はどうでもいい話ばかりなのに、軽く飲んだ時に真剣な話になる。

第五章 恋人と上司（3）

大島、恵美と別れた後、宏は美里に電話した。三日前に会ったーそして、結ばれたーばかりなのだが、声が聞きたかった。

「もしもし、私。何してた？」

耳元に優しい声が響いた。宏は今日あったことを簡単に話した。美里は、冗談交じりに

「じゃ、子供ができたなら、一緒に育児してよ」

と笑った。宏も笑いながら

「ちゃんと育児休暇取るよ」

と返した。

「宏君、今日会えない？」

「今日か。でも、もう遅いし、明日もあるからね」

「あ、そういうこと言うと浮気するぞ」

「どこで会うのよ？」

「私の部屋に来る？」

「着替えがないからな、明日の」

「じゃ、私が着替えを持って、宏君の部屋に行くって言つのはどう？宏君の部屋、行ってみたいし」

「じゃ、今から一時間後に藤沢駅改札で、一つしかないから、で待ち合わせよう」

「うん、わかった。じゃね」

二人は携帯を切った。

・美里は本当に可愛いな。子供できたら、育児してだって・

・でも、付き合い始めたばかりだし、結婚なんてまだ・・・

・いやいや、あり得るぞ・

自分で言っただけで答える、頭の中で宏は勝手にあれこれ想像して、ニヤニヤしていた。ふと周りを見回して、誰も見ていないことを確認した。

新橋駅で、下り電車に乗りこんだ。ちょうど約束した時刻に駅につく計算だった。

五十分ほどして、藤沢駅についた。結果的に宏と美里は同じ電車に乗っていた。二人で腕を組んで歩き始めた。途中、コンビニが見えた時、宏はあつと声にならない声を上げた。

「どうしたの」

「いや、何でもない」

宏は青神のことを思い出した。美里を連れているから、現れることはないと思ってみたが、あの青神のことである。何をやるかわからない。不安を抱えながら、アパートに近づいた。不安が的中した。灯りがついていた。

「あれ、電気、消し忘れたかな。そんなことはないな。もしかして泥棒かもしれないから、ちょっと待っててね」

玄関に美里を待たせ、恐る恐る、部屋の方にくと青神が何とカッブヌードルを食べているところだった。

「あんた、何やってるんですか」

「いやー、このカップブヌードルっていうの、旨いねえ」

「彼女と一緒にだから、消えて、お願い」

「まだ、食べ終わってないよ」

「いい、あげるから。全部あげるから、神様の世界で食べて」

「あ、そう。悪いね、じゃ、もううね」

青神が満足そうな顔で消えたのを確認した後、

「ごめんね。やっぱり消し忘れてたみたい」

「そう、じゃ、お邪魔しまーす」

「今、コーヒー入れるね」

両方の手にコーヒーカップを持ちながら、宏は美里の隣に座った。美里が甘えるように、宏にもたれかかってくる。宏は右手で美里の肩を抱きながら、こんなに幸せでいいのかな、とふと思った。その思いを遮るように美里がささやいた。

「宏君、一緒に住まない？家も中途半端に近いし、今日みたいなこ

と、これから、どんどん起きるような気がするの」

「俺はいいよ。なら、どこに住む？俺はここが気に入ってるけど、美里ちゃんが遠くなっちゃうね」

「私は宏君と一緒になら、どこでもいいよ」

「じゃ、今度、二人でもっと広い部屋を探しに行こう」

「うん、探そう」

宏は美里に優しくキスをし、そのまま抱きかかえて、ベッドの上に倒れ込んだ。

四月になって、春はいよいよ本格的になってきていた。新しい年度を迎え、宏の職場も活気に満ちていた。宏と杉田保が打ち合わせを終え、フロアに戻って来たのは、その日の終業時間の過ぎたばかりの時だった。

課長の大島が部長の片桐にすまなそうに頭を下げていた。

「部長、すみません。あさつては宜しく、お願い致します」

「あ、気にしなくてもいいよ。精一杯、応援してやれよ」

片桐が優しく答えた。

そう、あさつては、大島の息子の運動会だった。あの日の翌日、大野恵美は電光石火で部長の片桐を口説き落とし、接待ゴルフを肩代わりさせたのだ。「部長殺しの恵美」の面目躍如であった。恵美は大島に声をかけた。

「あさつては晴れるといいですね」

「うん、ただ予報では曇り時々雨って、言ってるからね。はずれてくれればね」

今週は後半から天気が崩れ気味だった。宏も天気がよければなあと思った。少しの時間はどうにかなるが、天気まで変えることは今の宏にもできなかった。

翌日からの土曜、日曜は美里に会う予定はなかった。美里は土日は・正確には、今日、金曜日の夜から・実家の名古屋に帰ることになった。

「おれも実家に帰ってないなあ」

今年の正月は一人で過ごした。実家の清水が今住んでいる藤沢とそう離れているわけでもないのに、帰ろうと思えばいつでも帰れる。そう思った思いが、あつてか、ゴールデンウィークやお盆、年末年始に里帰りしようという意識がそれほどなかった。今年のゴールデンウィークも二泊三日の予定で東京デイズ二ーリゾートに美里と行くことになっている。ホテルはリゾート近くの高級ホテルを何とか、押さえていた。

だから、土日は暇であつた。家でボーっとしててもつまらない。

「課長、息子さんの運動会、見学させてもらつてもいいですか」

何故、そんなことを思いついたのかはわからなかったが、暇だつたし、運動会という、今となつては何か、楽しい雰囲気にはたつてみたかつたのである。

「え、別にいいが、どうしてだ？」

大島が不思議そうに尋ねた。

「いや、土日暇だし、昔のことを思い出したら、行ってみたくなくなんです。それに」

「それに？」

「結婚して、子供ができたなら、毎年見に行かなきゃならないと思ひまして」

「お、近い将来の予行演習つて奴だな」

杉田保がからかった。

「うるせえ、そんなんじゃねえよ」

宏が少し恥ずかしそうに、言い返した。

課長に学校の行き方を教えてもらった。大島の家は大田区の蒲田にあつた。小学校は区立蒲田第三小学校とのことだつた。

「天気が良いければ、いいですね」

「ああ、悪いと言う予報が外れてくれればいいのだが」

「きつと、大丈夫ですよ。息子さんの晴れ舞台だし」

「ありがとう」

五時半になつて、終業のチャイムが鳴った。今日も暇だ。このところ、金土日は美里と過ごすことが多かったから、美里がいないと急に暇になる。仕事を立て込んでいたら、仕事をするのだが、早く仕事もなかった。杉田保を誘ったが、今日は彼女とデートだという。どうしようかと思つていたら、

「仕方がない、私が相手をしてやるか」

と隣の恵美が恩着せがましく、声をかけてきた。有り難かったが一応、今は彼女がいる身である。女性、それも一つしか年の離れていない女性と飲みに行くのは、さすがに気が引けた。

「梨香ちゃんもどう？」

と、恵美の向かいに座っている梨香に声をかけた。梨香は、

「あ、いいですよ。お付き合いします」

と、快く返事をくれた。

宏と恵美、梨香の三人は、ビアホールに向かった。今日の天気は曇りであつたが、やけに蒸し暑く、ビールが旨そうに思えた。

生ビールで乾杯した後、宏が恵美に尋ねた。

「お父さんはいかがですか。体調を崩されたと訊いてますが」

恵美の父は宏と恵美の故郷である静岡の清水で一番の海苔問屋の主人である。体を崩したという噂は地元では誰もが知っていた。

「うーん、何とか生きてるわね。私が帰る度に結婚はまだかつて、ウザイから、ここんところ、口利いてないのよ」

恵美は首を左右に振りながら答えた。

恵美は今年三十歳になる。今でこそ、晩婚化の傾向にあるが、自分たちの親の世代はやはり、二十代のうちに、と思つている人が多いのだろう。

「その点、梨香ちゃんはまだ若いから、親に何か急かされることはないよね」

梨香は短大を出て入社した三年目の社員で今年二十三歳になる。

「でも、私、結婚願望が強いんです。だから、早くいい人を見つけてと思つてます」

「あら、意外。で今、お相手はいるの」

「いるんですけど最近うまくいなくて」

「うーん、梨香ちゃんも恵美さんと違って、純だから、気をつけないよね」

と宏が冗談めかして言うと、恵美が口を尖らせて、応じた。

「何か言ったか！」

その後、何やかんやとりとめのない会話を楽しんだ後、お開きとなった。恵美は地下鉄、梨香はＪＲ山手線と三人別々の方角だった。恵美と別れて、梨香と新橋駅に向かう途中、梨香が、

「鈴木さんはお相手の方とはうまくいつてるんですか」

と訊いてきた。

「うん、おかげさまでね」

「いいなあ」

「何かあったら、相談してよ。僕にでも恵美さんにでも。どこまで力になれるか、わからないけれども、一人で悩んでいるよりは、いいと思うよ」

「ありがとうございます。その時は宜しく、お願い致します」

新橋に下りの快速電車がやってきた。

「じゃ、気をつけて」

「はい、ありがとうございました」

（続く）

第五章 恋人と上司（４）

宏は梨香と別れて、一人、電車のつり革につかまっていた。

「若いから、いろいろと悩みもあるんだろうな」

と梨香にことが少し、心配になった。電車は五十分ほどで、藤沢駅に到着した。

翌日の土曜日、愛知県は名古屋市。木村美里は両親の前で不機嫌な顔をしていた。父親の昭三は母親の美幸とともに写真を片手にお見合いを迫っていた。美里は

「お見合いなんていやよ。私はまだ今いるところを離れたくないの」
父親はすこし怒鳴り口調で、

「若い娘が一人で暮らしているなんて、危なくて見てられん」
というと、美里が

「セキュリティ万全のマンションだから大丈夫よ」
と反論した。

- 宏君と一緒に暮らすから心配ないってば -

本当のことを言ってしまうえば楽なのだが、宏に無断で言うことはできなかった。この後も両親と美里の押し問答がえんえんと続いていた。

その翌日の日曜日、ベランダに出てみると、雨こそ降っていないが、どんよりした曇り空であった。雨が降っても、振らなくても、どっちでもありみたいな、中途半端な空模様であった。

宏は軽く朝食を済ませ、大島課長の息子が通っている小学校のある蒲田に向かった。蒲田には、ＪＲ東海道線で川崎までゆき、そこで、京浜東北線の上りに乗り換えるのが便利であった。蒲田駅に着いて、大島に書いてもらった地図に従って歩いて行くと、やがて、

子供たちの歓声が響きわたる小学校の校舎にたどり着いた。たくさんの親たちがさかんに声援をおくったり、ビデオ撮影する光景がこちらこちらで見られた。

そうこうするうちに、大島の姿を見つけた。トラックのゴール手前の第四コーナー付近の前から三列目ぐらいに陣取っていた。

「大島課長、どうも」

と宏が挨拶すると、

「やあ、鈴木、ありがとう」

と大島が応じた。一緒にいた奥さんも紹介された。目鼻立ちのしっかりした、中々の美人である。

「いつも、主人がお世話になっていきます」

「いいえ、こちらこそ大変お世話になっております。課長、雨降らなくて良かったですね」

「ああ、最後までもってくればいいが」

大島の息子の守が出場する「カラー対抗リレー」はプログラムの最後である。予定では、午後三時くらいで、何となく、それくらいまではもちそうに思えた。

昼休みになり、宏は大島課長一家の昼食に招かれた。小学校の頃に戻ったように思えた。

午後はダンスから始まり、だんだん最終競技のリレーが近づいてきた。しかし、空模様が急に悪くなり、時々、ポツポツと雨が降っていた。それが少しずつ強い雨になってきて、後はリレーを残すのみとなった時には、本降りになった。親たちもいつせいに傘をさしたり、校舎の陰に隠れたりして、雨をしのいだ。このままではリレーを残して、競技が中止となってしまう。

宏はいやなことを思い出した。宏も小学校三年くらいの時に、リレーの選手に選ばれて嬉しかったことがある。しかし、その日は午後から雨が降り始めて、最終のリレーが中止になってしまった。宏自身、大泣きして、両親を困らせたことがある。

今、まさにその時の光景が現実のものとなって、甦ろうとしてい

た。それに、守は父である大島に見せたくて、頑張つてリレーの選手になったのだ。もし、中止となったら、その悲しみは宏のそれと勝るとも劣らないものであろう。

宏はジーンズの左ポケットに忍ばせたマジカルウォッチに手を伸ばし、

「雨よ、止め」

と念じ、その竜頭を押した。すると降っていた雨がウソのようにピタつとなりやんだ。しかし、降っていた雨で地面はぬかるんだままであつた。

教師たちはどうしたものかと悩んでいるようであつた。中止になると、宏の魔法が単なる現象となってしまう。その時、大島が本部席に向かって怒鳴つた。

「雨やんでいるだから、今のうちにぬかるみを砂で埋めて、リレーやれよ」

「そうだ、そうだ」

あちこちで、呼応する声が飛んだ。

やがて教師たちは決心したように手押し車に砂を積んで、ぬかるみを埋めだした。付近にいた親たちも手伝つた。

「ただいまより、最終競技のカラー対抗リレーを行います。選手入場」

一年生から六年生までの各学年の代表者たちが、入場し、リレーが始まつた。大声援の中、

大島の息子の守も懸命に走つた。順位などはどうでもいい。頑張つて走りきることに意義があるのだ。最後のアンカーが全員テープを切るのを見届けて、宏は再び竜頭を押した。あたりに再び小雨が降りだした。どこからともなく、

「まるで、リレーのために雨がやんだみたいだね」

という声が聞こえた。

慌しく閉会式が行われた後、守が大島のところへ駆け寄ってきた。「よく、がんばつたな」

大島が守の頭を撫でた。守も父に頑張る姿を見せることができて、満面の笑みを浮かべていた。これで、父と子の絆も深まるに違いない。守もずっと、このことを忘れないだろう。

「課長、それではこれで失礼します」

宏は大島に挨拶した。

「おお。どうもありがとな」

と大島が言葉を返した。

帰りの電車の中で、宏は満足していた。自分の力が、神様からもらった魔法の力なのだが、人の役に立つことがとても嬉しかった。何か自分の利益になることよりも嬉しかった。

藤沢駅に着くと、近くのラーメン屋に寄った。まだ午後五時であったが、空腹を感じたので、早めの夕食をとることにした。

ラーメン屋を出た後、コンビニでビールとチーズかまぼこ、ふと見つけたバームクーヘンを買った。夕食が早かったので、夜になつて小腹が空いた時のためであつたが、青神がいたら食べさせてやろうと三つほど買った。アパートに着いたら、案の定、青神がいた。

「この前は、追いつ返すようなことをして申し訳ありませんでした。でも、彼女と一緒にいる時はこないで下さいよ」

「別に気にせんでいいと思うよ。彼女には俺、見えねえから」

「え、そうなんですか。でも、僕と話していたら、彼女が変に思うじゃないですか」

「壁とお話してるんだなと思わせとけばいいんでねえの」

「だから、それがダメだと言ってるんです。それに」

「それに？」

「彼女とエッチしてる最中に出てこられたら、って思うと、集中できないでしょ」

「あー大丈夫。人間のエッチなんて、俺、全く興味ねえから」

「神様のエッチって、そんなにすごいんですか」

「ま。そりゃすごいよー。詳しいことは言えねえけども。まあ、できるだけ、緊急時を除いて、彼女という時は出ないようにするわ」

「お願い致します」

「しかし、今日もいいことしたね。父と子の絆を深めるなんて、味なことする人間もいるんだって感心したよ」

「ありがとうございます。そう、言って頂けると光栄です」

「まあ、そういう使い方してると、自然に運も向いてくるよ。ところで、彼女は？」

「昨日、今日と実家の名古屋に行ってます。用事があって」

「ああ、黄神さんがそんなこと言ってたな」

「きがみさん？」

「いやいや、こっちのセリフだから。んじゃ、今日は長居できるってことだな」

「そういうことじゃないでしょう。今日はビール飲んでないんですか」

「あ。ビールもいいけど、俺、缶チューハイっていうの、あれ飲みたくて。俺の仲間が缶チューハイはビールより旨いって」

「じゃ、今度買っておきます」

「今度じゃなくて、今スグ飲みたい」

「今ですか。まさか待ってるから買って来いって言ってるわけじゃないですよな？」

「いいや、そういうことだよ」

「冗談じゃ、ありませんよ。今、コンビニに寄ってきたばかりですよ。今日はビールで我慢して下さい」

「いやだ、今すぐ飲みたい。飲むまで絶対帰らない」

「本当に神様なんですか。人間にたかる神様なんて聞いたことありませんよ。わかりました。買ってきますから、待ってて下さい」

「ありがとね。あ、それから、つまみは鳥の唐揚げと柿の種、お願い」

・柿の種がバリエーションに加わってるよ・

宏は玄関を出て、コンビニに行った。缶チューハイは種類がいくつあったが、オーソドックスなレモンにした。鳥の唐揚げ、柿の種

と合わせ、レジを済ませ、アパートに戻ってきた。

「はい、買ってきました。これが缶チューハイ、それと鳥の唐揚げと柿の種」

青神は受け取ると、缶チューハイの栓を開け、ぐいっと一口飲んだ。
「あらま、本当に旨いこと、旨いこと。ビールも旨いけど、缶チューハイも旨いね。人間はどうして、こんな旨いもの作れるの」

「人間は努力するからですよ。より良く、より旨く、より安く、より速くって。神様は皆、

力をお持ちだから、そんなに努力しなくて済むでしょ」

「あ、それいいこと言ってるな。今度の神様会議の議題にしよう。それは何？」

「これはバームクーヘンっていうやつです。甘くておいしいですよ。三時のおやつにどうぞ」

「ああ、それもまた旨そうだな。でもカロリー高そう。近頃、血糖値が高くなってるからな。かあちゃんに知れるとまずいから、こんど来た時もらうわ。いつもいつも、いいもの頂いて、ありがとうございます」

「いいえ、どういたしまして。また、オススメのものがあつたら、買っておきます」

「本当に悪いね。じゃ、これにて失礼」

青神は例のごとく、くるりっと回って消えた。

「ふう、いつもいつも世話の焼ける人だ」。

宏はため息をつきながら、つぶやいた。

風呂から上がり。髪を乾かしていると、携帯が鳴った。美里からだった。

「今、帰りの新幹線の中。小田原に止まるから、そのまま、宏君の部屋行ってもいい？話があるの」

「話がある」と聞くと、大抵の人は「悪い話」だと思ってしまう。

宏も大抵の人の中に入っていた。

「話ってどんな？」

「電話じゃなくて、直接、話したいの」

「そう、わかった。じゃ、待ってるね」

なんともないように、電話を切ったが、心中は穏やかではなかった。どうしても、「いい話」には思えなかった。

「別れてくれ」

って言われたら、どうしよう。

その答えは見つからなかったが、何はともあれ、美里が着くのを待つことにした。

（残り時間 三十分 十三秒）

第六章 かけがえのない命（１）

第七章 かけがえのない命

一時間くらいしてから、美里から小田原についたという連絡があった。電車の待ち時間を除けば、小田原から藤沢まで三十分である。長くとも一時間もすれば藤沢に着くはずであった。宏は藤沢駅まで迎えに出ることにした。時刻は八時であったが、宏のアパートの近くは街灯が少なく、夜になると人通りも少なくなる。用心するに越したことはない。

三十分くらいしてから、藤沢駅に向かった。

宏が藤沢駅についた時、ちょうど彼女が改札口から出たところであった。顔を見るなり、彼女が抱きついてきた。

・別れてくれていうことはないな・

宏は少し安心した。それでも、不安が消え去ったわけではない。宏は美里のバッグを右手に持ち、左腕は美里と組んでアパートまで帰った。

アパートの玄関に入ると、美里がキスをせがんできた。熱いキスと抱擁をした後、美里をテーブルの前に座らせて、自分はコーヒーの用意をした。両手にカップを持って、宏は美里の横に腰を下ろした。そして、切り出した。

「それで、話って何？」

美里が宏の目をじっと見ながら、話し始めた。

「実家に帰ったでしょ。用事があるからこいって。そしたら、お見合いをしろって言われたの」

「お見合いって、美里ちゃんが」

「そう。私は一人娘だから親がうるさくて。それにこっちで一人暮らしをしているから、余計に心配してるの。私、イヤって言ったの」「そしたら？」

「そしたら、何故だつて、しつこく訊いてきたから、仕方なく、もう決めた人がいるつて、言ってしまったの」

「決めた人つて、俺のこと？」

「もちろん、そう。そうしたら、両親が一度会わせろつて。連れてこいつて」

宏はほつとした。「悪い話」ではなかった。

「いいよ。俺はいつでも」

すると、美里がまた、抱きついてきた。

「本当！嬉しい、ありがとう。私ね、宏君と付き合つて、とても愛してるんだけど、結婚なんて宏君と話してなかったから、心配だったの」

「確かに明確に意識したことはないけど、このまま、美里と一緒にいたら、結婚するんだろうなあつてことは思っていたから。で、俺、いつ行けばいいの」

「美里ちゃん」がいつのまにか「美里」と呼び捨てになっていた。

「親と調整してみるね。本当にありがとう」

美里は宏の胸に顔を埋めて、じつとしていた。

結局、この日、美里は宏の部屋に泊まった。

次の週の日曜日、つまり、美里が親から宏に会わせると言われていると聞かされた日からちょうど一週間後、宏は美里の実家にいた。会いたいと言ってきたのは美里の両親の方だから、別に緊張することもないように思えたが、やはり、彼女の両親に会うというのは結構、精神的にプレッシャーがかかるものである。

「お嬢さんを私に下さいと、相手の親に頼みに行く時はこんな心境なんだろうな」

宏はそう思った。一通りのあいさつを済ませた後、美里の父が切り出した。

「宏君は美里のことをどう思っているのかね」

「お付き合いをさせて頂いて日はそれほど経っていませんが、美里さんとはすぐに打ち解けて、もう何年もお付き合いしているような

気がします。ご両親に許していただければ、一生の伴侶にと思っております」

結局、お嬢さんを私に下さいって、言ってるのと何ら変わりなかった。美里の父が急ににこやかな顔になって、

「しかし、宏君は中々の男前だな。美里の奴、そういう選択眼は母さん似だな」

「お父さん、何言ってるの」

美里が笑いながら、自分の父をたしなめた。

「そうですよ、お父さん、それじゃ、自分が男前だといってるようなものじゃないですか」

美里の母も手で口を押さえながら、父に向かって言った。

「そう、言ってるつもりだが」

美里の父がそう言い返した。それを機に場が和やかになった。祝宴が始まった。美里の両親、とりわけ父は機嫌が良かった。宴は夕方まで続いた。

帰りの新幹線の中で、宏は少々グロッキーになっていた。美里の父に勧められるままに飲んでいたのでかなり酔っ払ってしまった。

「ごめんね。私のお父さん、お酒大好きで」

美里が宏を介抱しながら、申し訳なさそうに言った。

「別にいいよ。これから付き合ってゆくんだからね。馴れないと。それにしても美里の酒の強さはお父さん譲りだったんだね」

「そうかもしれない。もしかして、父より強いかも」

「それじゃ、俺も覚悟しないとね」

「私も早く、宏君のご両親に挨拶しないとね」

「はは。気にしなくてもいいよ。親父なんて美里のきれいな顔見た瞬間、ゴーサインですから」

「えー、そんな。私自信ないな」

「お前が自信ないなんて言ったら、世の中のどんな女性も俺の嫁さんになれんな」

「ありがとう」

「俺の両親に紹介が終わったなら、前に話した新居を探そう」
そう言っ、宏は目を閉じた。結局その日も予想していた通り、美里は宏のアパートに泊まった。

その週は月曜日から忙しかった。商談が三件並行して進んでいた。課長の太島と宏、杉田保、大野恵美は打ち合わせて、仕事のスケジュールを組んだ。場合によっては徹夜もあるかもしれない。そんな中、梨香は浮かぬ顔をしていた。先週、帰りに酒を飲んだ時、何か悩みを抱えているようなことを話していた記憶がある。宏は酒が弱いから、飲み会の後半はあまりよく覚えていないことが多い。だから、明確に何を言っていたかは思い出せなかった。

しかし、今の宏、そして保、恵美もそれをフォローする余裕などなかった。来週には時間が取れるだろう。梨香にはそれまで辛抱してもらおうしかなかった。

「ん？」

宏は何かを感じた。この感じ、ずいぶん前だけあったな。しかし、思い出せなかった。何かものすごく大事なもののような気がするのだが、思い出せない。何か不安のようなものを抱えながら、宏は目の前の仕事をかたづけにいった。

これだけ忙しいと美里に会うのもままならない。美里には仕事が忙しくて、週末まで会えないと伝えてあった。寂しそであったが、「体に気をつけて」

と優しい言葉をかけてくれた。

月曜から金曜まで、会社と取引先の往復、資料作り、打ち合わせと慌しく動きまわった。

月曜日と水曜日には徹夜もした。ようやく、落ち着いたのは金曜の午後三時を少し回ったくらいの時間であった。

第六章 かけがえのない命（2）

煙草を吸いに屋上へ行った。火をつけて、口にくわえた。両手を上に伸ばしながら、周りを見回すと、女性社員が一人フェンスに手を置いてじつと前を見て、たたずんでいた。よく見ると梨香であった。

宏の頭にあるものがよぎった。週の始めに梨香を見た時に感じた不安、大事な何か、それが宏の苦い過去とともに鮮明によぎった。

――梨香ちゃんは自殺しようとしている――

宏は確信していた。「梨香ちゃん！」と叫びながら走ってくる宏を見て、梨香はフェンスを足をかけて飛び降りようとした。宏は内ポケットのマジカルウォッチを握ると、

「時間よ、止まれ」

と念じて、竜頭を押した。梨香はフェンスのちょうど真上でぴたと止まっていた。

――やれやれ、向こう側に行く前で助かったな――

時間を止めると動けるのは自分だけになるので、梨香がフェンスの向こう側に行ってしまった後では、元に戻すためには宏がフェンスの向こう側にいかなければならない。女性一人をフェンス越しに運ぶには労力が必要だったし、宏自身が下に落ちてしまうリスクがあった。だから、フェンスを越え終わる直前に止まったことは宏にとっても幸運だった。それでも二メートルはあるうかというフェンスの上である。宏は梨香の体を左肩に担ぐようにして竜頭を押した。止まっていたものが再び動き出した。宏の左肩もずりとした重さを感じて、結局は二人とも屋上のコンクリートに倒れこんでしまった。梨香は何が起こったか、わからないようだった。――わからないほうが普通ではある――梨香が宏を向きながら、訪ねた。

「私は一体どうなったのですか」

「自分で命を絶とうとして、失敗したんだよ。その失敗はラッキー――

だったけど。僕にはピンチだったんだよ。目の前で人が死んでゆくなんて、二度と見たくないからね」

「え、二度とって、どういうことですか」

梨香が訊いた。宏は肩で一回大きく息を吸い込みはいてから答えた。「中学生の時、俺の目の前で今日の君と同じように屋上のフェンスをまたいで自殺した奴がいてさ。俺、屋上で友達とバドミントンしてたんだけど、そいつが今の梨香ちゃんのようにフェンスを握って、じつと前の方を見てるのを見て、「あれ？お前、大丈夫」って声をかけなきゃって思ったんだけど、別に何でもねえかって、そのまま遊んでいたんだ。そしたら、一緒に遊んでいた奴が「あつ」って声出したから、ずっと後ろを振り返ったら、そいつ、いなくてね。下に飛び降りた後だった。だから、俺、もし俺が声かけていたら、一緒に遊ぼうって誘っていたら、そいつが死ぬこと、止められたんじゃないかって、今でも思ってるんだ」

梨香はじつと聞いていた。

「その後、ホームルームがあつてさ、何故、自殺を防げなかったかって、みんなで考えたんだ。静かな奴でいじめられていたわけではないけれど、特に親しい友達もいなかったんだけどさ。結局、自殺した理由ははっきりしなかったんだけど、その時の担任が言っていたことで、今でも心に刻んでいる言葉があつてね。何故、自殺が悪いかっていう理由は生きたくても生きられない人間に対する冒瀆であること。生まれつきの障害や病気で亡くなる人は大勢いるけれど、そのうちの誰が好き好んで死ぬか、そんな人はいないんだよ。皆、生き続けたいのだけれど、それができない。それなのに、生き続けることができるのに、それをしない人間、自ら命を絶つ人間が許されると思うか、許されないでしょう。生きることができる人間は、それができない人の分も生きなければならぬ。それをしないのは泣く泣く死んでゆく人に失礼でしょう。梨香ちゃんは どう思う？」

梨香は涙を流しながら、
「そうですね。その通りですよね。ごめんなさい」

「わかってくれればいいんだ。でも何故、自殺しようと思ったの？」

「彼氏と親友をいっぺんになくしたんです」

「つまりは親友に彼氏を取られたってわけね」

「はい。小さい頃から仲良くしてた親友でしたから、ショックで」

「ショックなのは理解できるけど、命を懸けるようなことじゃないよ」

「そうですね。また、新しい彼氏を見つければいいですよね」

「そういうこと。このことは僕と梨香ちゃんの秘密にしよう。幸い、屋上には僕たちしかない」

「すみません、ありがとうございます」

「悩みの相談は恵美姉さんにしたらいいと思うよ。ああ見えて、結構頼りになるんだ。彼女って」

「そうします。本当にすみませんでした」

宏と梨香は階下のフロアに戻った。

第六章 かけがえのない命（3）

午後五時半の終業のチャイムが鳴るのを見計らって、宏は美里に電話を入れた。

「今日の仕事は終わり。今日、行ってもいい？」

「うん、いいよ。急いで帰って、ご飯作るね」

宏は帰り仕度をして、

「お先に失礼します」

と言って席を立った。帰り際に恵美の耳元で、

「梨香ちゃん、悩みがあるようですから、時間のある時、相談に乗ってやって下さい。女は女同士がいいと思いますから」

「オーケー！」

恵美は右手の親指と人指し指でマルを作りながら快く返事をした。

新橋駅で下り電車に乗り、四十分ほどで戸塚に着いた。恵美のマンションまでは歩いて七分ほどだった。

玄関でチャイムを鳴らすと、

「はい」

という返事が中から聞こえた。そして、ドアが開くと五日ぶりの可愛い笑顔がそこにあつた。玄関でキスをして抱き合った。仕事続きで疲れのたまつた体ではあつたが、それ以上に「美里を抱きたい」という欲求がこみ上げてきた。離れようとする美里をがっちり抱きしめて、スカートをたくし上げた。

「いやー、待って。後で」

「もう、我慢できない」

「じゃ、ここじゃなくて、ベッドで。それから火を消させて」

宏は一度、美里の体を解放した後、ベッドに飛び込んだ。そこへ、エプロンをはずした美里が飛び込んできた。欲求があるのは美里も同じであつた。二人は互いに服を脱がせあつた後、激しく愛し合った。

激しい情事後、しばらくしてから、

「ご飯、食べよ」と美里がいい、パンティー一つの格好で台所に消えていった。宏も下にトランクスを穿いただけの姿でテーブルの前に座った。今日のメニユーは匂いでわかった。カレーである。美里の作るカレーはとてもおいしく、宏は好きであつた。

半裸の男女がテーブルを囲んでカレーを食べる。外から見たら、何とも滑稽な風景であろう。しかし、今の二人には何のこともない自然なことに思えた。

ご飯を食べ終わった後、二人はそのままの格好でじゃれあつた。そのじゃれあいにはシャワーを浴びるために浴室に移つた後も続いた。そして、そのままベッドにもつれ込んだ。再び激しく愛し合った後、美里は死んだように眠りについた。宏も眠くなり、美里を腕枕しながら、目を閉じようとした、その時、

「こんばんは」

という声が足元から聞こえた。まさかと思つたが、そのまさかであつた。

「エッチは終つたようだね」

「見てたんかい、あんたは」

「人間のエッチなんか興味ないから、気にしないでいいよ」

「つてそういう問題じゃないでしょ。いったい何しに来たんですか。それにここ、美里の部屋ですよ」

「俺は神様だから、どこでも好きな時に来るんだ。しかし、お前さんも過去にいろいろあつたんだな」

「神様のくせに、知らんのかい」

「いや、お前さん自身の身に起こつた出来事はお前さんの履歴書見ればわかるよ。だけど、お前さんが思つたこと、感じたことまでは神の履歴書には書いてないんだな」

「何か、中途半端な神様だな」

「しかし、今日も、よく人の命を助けたな。彼女も自分が生かされた存在であることを十分わかつたと思うよ。良かった、良かった」

「こっちはひやひやもんでしたよ」

すると、美里が寝ぼけ眼で、

「うん？宏くん、何か言った？」

と声を上げたので、

「何でもないよ、お休み」

と静かに美里にささやいた。青神に向かつて、

「もう早く行って下さいよ。彼女が起きちゃうから」

とせつついた。しかし、青神は、

「ビールか缶チューハイと肴はないけ？」

と言ったので、宏は

「今日はない。俺のうちにしかないから。欲しかったら、俺の部屋の冷蔵庫からもって行って。電気消し忘れないでね」

とできるだけ、声を静めて、青神を説得した。

「あ、そう。じゃあ、そうするね。どうもお邪魔しました」

青神はくるっと消えた。

「本当にどこにでも出てくるんだから」

宏は悩ましげにぼやいたが、やがて、美里の頭を自分の左腕にのせて、スースーと眠りについた。

（残り時間 二十五分 三十六秒）

第七章 父の思いと娘の思い（１）

七月下旬、梅雨が明け、本格的な夏が到来した。今年は猛暑との予報であった。「湘南ボーイ」-ここでボーイというのが二十九歳になる男にふさわしいかどうかはさておき-

まさに「俺の季節」というシーズンの幕明けである。もともと、宏が静岡県清水市から東京の大学ではなく、神奈川県藤沢にある大学をえらんだのは-東京の大学はすべて落ちたという事情はあるにせよ-ひとえに「湘南ボーイ」にあこがれたからである。特に江ノ島がある藤沢には愛着があった。

何年か前、同じ神奈川県横須賀市議会か何かで「湘南市」構想というのがあるというのを宏は新聞か何かで見たことがある。その時、宏は、

「冗談じゃない！」

と憤慨した。宏に言わせれば「湘南」の「湘」は「相模湾」の「相」にさんずいをつけたものである。だから、湘南とは相模湾に面していなければならない。東京湾にしか面していない横須賀が湘南を名乗るなどもつてのほかである。宏の頭の中では湘南とは「藤沢」「茅ヶ崎」「鎌倉」の三つだけで、少し譲歩して「平塚」「逗子」「葉山」、大幅に譲歩して「三浦」「大磯」「二宮」を入れてもいいかなという感じである。それくらい湘南にはこだわりがあった。

この季節到来までの宏は仕事・恋愛とも順調で、身に起きた変化といえば、美里を宏の両親にも紹介し、両家の公認になったこと、それに伴い、藤沢のマンションを借りて同棲を始めたことくらいである。新しい引越先については藤沢と戸塚の中間をとって、鎌倉市大船というのも考えたが、宏の藤沢へのこだわりを美里が尊重してくれて、藤沢に落ち着いたのである。

ある朝、宏がオフィスに入ると部長の片桐が普段、恵美が使っている椅子に腰掛けて、課長の大島と何やら話し込んでいた。

「どうも、大野君のお父上、重いようなんだよね。本人は詳しいこと、あまり言わないけれど」

「今度、私が訊いてみますよ。緊急の時に備えて」

「ああ、宜しく頼むよ」

片桐が席を立つた。宏は課長の大島に尋ねた。

「恵美さんがどうかしたんですか」

「うーん、お父さんがずっと病を患ってるらしくてね。緊急の時に備えないといけないかもって話してたんだ。部長と」

「そんなに悪いのですか」

「具体的にはわからないんだがな。だから緊急の時に備えて。お前と杉田で大野君のバックアップを宜しく頼むよ」

「わかりました」

前にも書いたが、恵美の実家は清水の老舗の海苔問屋で、恵美はこの二人姉妹の長女である。ご主人・つまり、恵美の父・が病を患って、今は実質はその妻・つまり、恵美の母・が家業を取り仕切っている。恵美は長女だから、婿をとって実家を継いで欲しいというのが両親の考えなのだが、小さい頃から言われ続けているせいか、それには反発し、

「自分の好きなことをしたい」

ということ、今の会社に入ったという。だから、その点で両親、特に父親とは衝突が絶えないようであった。具合の悪い父とはもう何年もろくに口を利いてないと恵美は話していた。

やがて、杉田保が、梨香が、そして最後に恵美がフロアに入ってきた。

「鈴木君、おはよう。この頃早いね」

そこに、保がちょっかいを出してきた。

「ええ、何せ、この頃は奥様が起こしてくれますから」

「ああ、そうか。そうだったね。新婚ホヤホヤだもんね」

「まだ、結婚してませんから」

「でも、同棲と事実婚って、何が違うのでしょうか」

梨香が話しに加わってきた。

梨香も春頃と比較にならないくらい明るくなっていた。梨香が以前抱えていた悩みは強力な恵美のサポートで吹き飛んでしまったらしい。

「それは、結婚するつもりで一緒に住むのが事実婚で、そうでない場合が同棲なんじゃないのかな」

と保が答えると、恵美が

「なるほど、じゃ鈴木君は事実婚だから結婚してるっていいだね」

とうなずいた。宏が反論した。

「いや、違います。事実婚というのは、婚姻届を出していないけど実質的には結婚しているのと同様な関係にあることを指し、同棲とはただ一緒に住んでいるだけで、家計とかは別つていう関係を言うんです」

宏の説明はほぼ正しかったが、逆に墓穴をほってしまった。保が

「じゃ、やっぱり事実婚じゃないか」

と言ってきた。宏は話を終らせたくて、

「もう、どっちでもいいじゃないか」

と投げやりに言った。どつと笑いが起こった後、始業のチャイムが鳴り、皆仕事にとりかかった。そんな会話で盛り上がるくらい、宏のセクシオンは順調であった。恵美が時々、見せる物憂げな表情には、宏ならずとも、引かかるものがあつた。

宏は恵美に声をかけた。

「恵美さん、今日、軽く一杯行きませんか？」

「軽く一杯って、あんた大島課長かい？」

「いや、大島課長のは実質、軽くないですから」

恵美が笑って、答えた。

「そりゃ、そうだね。鈴木君のは軽くじゃなくて、ほとんどないよ。うな一杯だからね。いいよ、付き合ってあげる。悩み事の相談ならOKだから」

- 悩み事あるのは、貴女でしょ -

宏は思ったが、口には出さなかった。

保と梨香も誘い、四人で行くことにした。四人で飲みに行くのは久しぶりだった。

終業後。四人はオフィスを後にして新橋駅の方に歩いて行った。

夏だからビアホールにも考えたが、宏からすれば恵美の話をじっくり聞きたかったので、騒がしいビアホールより、落ち着いて飲めるところがよかった。保と前に行ったことのあるパブにした。

四人で生ビールで乾杯した後、しばらくは取り止めのない話をしていたが、やがて、目の前の恵美に向かって、宏が小声で話しかけた。

「恵美さん、お父さんの具合いかがですか」

「ああ、若い頃から酒ばかり飲んできたからね。バチ当たったんじゃないの」

「入退院を繰り返してるとか」

「そうだね、父より母の方が心配だよ。父の代わりに店切り盛りしてさ。だから、毎週末は母の手伝いに帰ってるんだ」

「前にお父さんと口利いてないっておっしゃってましたよね」

「うん。いつも口開くと説教が始まってね。いちいち口答えするのも面倒だから、できるだけ口利かないようにしてるの」

「そう言わずに一度じっくり話をされた方がいいですよ。俺、男一人だから、父親と娘の関係ってよくわからないけど、話してみてもいいんじゃないかなと思うんですよ」

「あーないない。男には結局、女の気持ちなんてわからないのよ。」

それに父は妹にフォローしてもらっているから、私の出番はないの。恵美はあまり触れて欲しくないという素振りだった。

「それより、飲もう。そんな湿った話するために来たんじゃないでしょ」

結局、恵美にはぐらかされた感じであった。

その後、パブを出て、カラオケに行った。

恵美は十八番の浜崎あゆみを楽しげに歌っていたが、それは足の痛みを隠しながら、何もないように走っているマラソンランナーのようで、宏には妙に痛々しかった。

お開きにして、家に帰った。美里に恵美のことを話してみた。

「あー、父と娘だから、微妙と言えば微妙よね。やっぱり、ある年齢以降になると父親には触れられない部分、「あんたには私のことわからないでしょ」ってところあるもの。私は一人娘だったから、比較的、父との関係は良かったけどね。そこらへんが同じ異性の中でも母親と息子とは違うとこだね」

一人息子の宏は自分の母親との関係を思い出してみた。確かに口うるさく感じたことはあっても確執みたいなものを感じた記憶はないやはり、男の自分が恵美と恵美の父親との関係を考えてみてもしようがないのかもしれない。

翌日、オフィスに行くと、行き先表示版の恵美の欄が「仙台」となっていた。

「そついえば、今日は仙台出張だったな」

と思い出した。恵美の父のこともあり、出張はできるだけ控えるようにしていたのだが、その用事は恵美でなければならぬものだった。何も起こらなければいいが、と思いながら宏は仕事をこなしていった。

第七章 父の思いと娘の思い（２）

まもなく、終業のチャイムが鳴るといふその時に課長の机の電話が急を告げるように鳴った。恵美からであつた。

「え、そうか。わかつた、わかつた。こつちのことは心配しなくてもいい。何かあつたらまた、知らせてくれればいい。じゃ、また」電話を切り、受話器を置くと皆の方を向き、

「大野君のお父上が倒れたそうだ。彼女は仙台から直接、地元の病院に向かう。鈴木、お前、実家が大野君と同じとこだったな。悪いが一足先に行つて、様子を見に行つてくれないか」

「わかりました」

宏は引き受けた。恵美の両親とは一度会つたことがあつた。入社したての頃、実家と同じ清水ということもあつて、正月に地元に戻つたとき、お呼ばれして訪れたことがあつた。家が近いこともあり、冗談で婿にこないかと言われた。恵美の父の顔が鮮明に浮かんだ。

「あの、お父さんが」

宏の頭の中では元氣よく酒を飲んでいる姿と倒れたという現実が結びつかなかった。宏は東京駅に出てこだまに乗つた。時刻にもよるが、通常はこだまで静岡までゆき、静岡から在来線で清水に行くのが最短であつた。

清水に着くと、宏は恵美の父が運ばれたという清水記念病院に向かつた。病院の受付で病室を確認し行つてみると、恵美の母と妹の留美が付き添つていた。恵美が仙台から直接こつちに向かつていること、自分が会社との窓口役になることを告げると、恵美の母は頭を下げて、申し訳無さそうに言つた。

「すみません。お手数をおかけします」

恵美の母親は宏のことを覚えていた。宏は恵美の父の容態について尋ねてみた。恵美の父が末期の胃ガンで余命わずかと言われていたこと、今度倒れた時は覚悟しておくよう医師に言われていたこと、

など宏が初めて聞くことを教えてくれた。

・そんなことを隠して、仕事していたのか・

気丈に振舞っていた恵美の心中を思うと胸が痛んだ。近くにいながら力になってやれなかった自分のことを恨めしく思った。願わくば、父の息のあるうちに恵美に着いてほしかった。

しばらくして、恵美が到着した。宏の願いはとりあえずは叶った。病院の廊下にある長椅子に腰掛けていると、恵美が隣に座ってきた。「恵美さん、知ってたんでしょ。お父さんの病状が思わしくないと。余命がわずかだったことも」

「知ってたよ。でも、私に何かできることがあるわけじゃないし」

「病気を治すことはできなくても、恵美さんにできることはあったはずです」

「どんなこと？」

「お父さんと仲たがいして、口を利いてないっていつていたじゃないですか。こうなる前に話をすることはできたでしょ？」

「そんなこと言っただって、別に向こうだって話したいわけじゃないだろうし」

「自分の子供と話したくない親なんていませんよ。確かに今は自分の子供なのに平気で虐待して殺すなんて親もいますが、大抵の親は自分の子供が一番と思ってるんです」

「知ったようなこと言うじゃない」

「大島課長のお子さんに対する思いを知ってますから。あんなに仕事熱心で家庭は二の次になっているように見える方でも、自分の子供が一番だと思っているんです。運動会のリレーで息子の守君を声をからして応援する姿に僕は感動しました」

「大島課長とうちのお父さんは違うのよ。うちのお父さんは頑固で自分の言っていることがいつも正しいって思っているような人だもの」

「なら、恵美さんはそんなお父さんは死んでも構わないって思っているんですか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そんなお父さん、いなくてせいせいするとも思っているんですか」

「・・・・・・・・・・」

「恵美さんはお父さんのこと、自慢するくらいに大好きなはずですよ」
「どうして、そんなこと・・・」

「僕が入社したての頃、実家から海苔のセットを持ってきて、職場中に言ってたでしょ。」

『うちの実家で売っている海苔は日本一おいしい海苔ですよ』って。
その海苔売ってるのお父さんじゃないですか。今でもそう思ってるでしょ」

「そう思ってるよ」

「だったら、そのお父さんに、日本一おいしい海苔を売って育ててくれたお父さんに、『ありがとう』って感謝しなきゃ」

「でも、お父さんは許してくれないよ。婿をもらって家を継げって言うのを私きかなかったから」

「たとえ、言うこときかなかったとしても、恵美さんはお父さんにとって大切な娘さんであるはずですよ。その娘と言葉を交わさずには死ぬに死ねないと思いますよ」

「私、何度もお父さんにごめんなさいって謝ろうとした。私が結婚して実家継ぐのがお父さんの望みだけど、私は今の仕事続けたかったから、お父さんの望みは叶えられないって。でも、言えなかった。クリエーターだか何だか知らんが、そんな横文字の仕事はろくなもんじゃねえって、頭から言われたから、私も頭に来ちゃって。これ以来だよ、口利かなくなっちゃったの」

「さっき、お母さんに聞きました。お父さんの部屋に一枚ポスターが張ってあるそうです」

「ポスター？」

「ええ、友人の方が来られるといつも自慢してたそうですよ。東京で仕事している娘が始めて手がけたものだって」

「え？」

「恵美さんが企画して、初めてクライアントに採用された記念のポスターです」

恵美の目から涙が溢れてきた。

「お父さんにとっても恵美さんは自慢の娘さんなんです。早く、お父さんのところへ行って下さい。自分が言いたくても言えなかったことを言うのは息がある今しかありません」

「でも、もう意識は戻らないし」

「意識が戻ろうが戻るまいが、関係ありません。息がある間、ずっと手を握っているだけでもいいじゃないですか。本当に息を引き取ってしまったら、何も通じなくなってしまうですよ」

「うん、そうだね。ありがとう」

恵美は病室に入った、母親の横に座り、点滴に繋がった父の左手を握った。その瞬間、その手が恵美の手を握り返してきた。

「お父さん」

と恵美が声をかけた。すると恵美の父がゆっくり閉じていた目を開いた。軌跡が起こったのだろうか。恵美の父が呼吸マスクが覆っている口を動かした。医師がマスクを取ると

「恵美、恵美はいるか」

と父が消え入りそうな声を上げた。恵美は

「お父さん、恵美は、私はここにいますよ」

「恵美か。仕事はうまくいってるか」

「うん、うまくいってるよ。お父さんの望み叶えられなくて、ごめんね」

「いいさ、恵美は小さい頃から勝気で、俺の言うことなんかきかなかったから、期待なんかしてないさ。はは」

「でも、自分の決めたことはきちんとやり抜くからね」

「ああ、好きな男はいるのか」

「そんな心配、お父さんはなくていいよ。私はちゃんと見つけるから」

「そうだな、お前を嫁さんにする男は大変だ。とんでもない、じゃ

「じゃ馬だから」

「失礼ね、私はちゃんと尽くすタイプよ」

「お前の花嫁姿、一目見たかったな」

「大丈夫、きつと見れるから」

「母さんと留美のこと、宜しく頼む」

「お父さん！」

その時、心音を告げる機械音が「ピー」と鳴った。最期であった。その機械音がしたのと同時に部屋の外にいた宏の胸ポケットのマジカルウォッチの秒針が自然に止まった。

第七章 父の思いと娘の思い（3）

宏は会社に連絡した後、通夜、告別式の手伝いをした。実家が同じ清水にあるのは手伝いをするのに都合がよかった。

通夜、告別式など一通りの儀式を終えた後のお清めの会で恵美は宏に礼を言った。

「鈴木君があの時、部屋に戻って、そばにいてやれって言ってくれなかったら、父と最期の言葉を交わすことができなかったと思う。本当にありがとう。主治医の先生も本当に奇跡的だって、おっしやっていたわ」

「恵美さんのお父さんを思う気持ち、お父さんの恵美さんを思う気持ちこそそういう奇跡を起こしたんじゃないですか。僕は何もやってませんから」

と宏は答えた。もちろん、何もしていないということはないのだが、お清めの会が終わり、参列者はそれぞれ帰途についた。宏も藤沢に帰ることにした。新幹線を小田原で降り、そのまま東京へ向かう大島、保、梨香と別れた。小田原から東海道線で藤沢に向かい、美里と暮らすマンションに着いた時、時刻は午後六時を回っていた。

美里に清水であった出来事を話し、

「お前もお父さんに連絡しろよ」

と美里に言った。

「あら。そうしようかしら」

と美里は早速、名古屋の両親に電話をし始めた。

宏は一服しようとベランダに出た。美里と暮らすようになってからはずっとホタル族であった。煙草に火を点けて、ふーっと一息すると、

「間に合ってよかったね」

と青神が現れた。

「出てくるんじゃないかと思っていたんですよ。命の時間は動かせ

ないって本当だったんですね。タイミングがちょっとでも遅れていたらなら、恵美さんはお父さんとの最後の会話できなかったですからね」

宏が青神にそう言うのと、

「でも、あのタイミングで竜頭を押せたこと自体は時計の力じゃなく、お前さんの力じゃないのかな」

と青神が意外なことを言った。

「僕の力？」

「そう、お前さんの力。彼女のお父さんの意識を戻させたのは時計の魔力だけど、時計をあのに間に合うように押させたのは多分、お前さんが起こした力だと思うよ。俺は詳しいことわからないけども」

「青神様もわからないことあるんですね」

「白神様っていうのが詳しいこと知ってるんだけどね。俺も聞いたことあるんだけど、難しくてさ」

「へー、そうなんですか。いずれにしても恵美さんとお父さんがお互いにわかり合えてよかったです。どうも、ありがとうございます」

「俺にお礼言うことじゃないよ。だけど、ちょっと、お願いがあるんだけども」

「何でしょう？」

「缶ビールか缶チューハイ、それとつまみあったら持ってきて欲しいんだけど。たかるように悪いね」

「いつものことですよ。美里に見つからないように持ってきますからね」

宏は冷蔵庫から缶ビールとチーズかまぼこをこっそり持ってきた。美里はまだ電話中であつた。

「はじめてですけど乾杯しましょう」

宏は缶ビールを青神に一つ渡し、もう一つの栓を開け、青神の持っている缶ビールに自分の缶ビールを押し当てながら、

「カンパ―イ」

と言った。青神もそれに合わせて

「カンパ―イ」

と声を上げた。

「あー夏はやっぱりこれだな」

「神様の世界もそうなんですか？」

「そりゃ、神様の世界も人間界のいいところは取り入れようとしてるからね」

「そうなんですか。随分、柔軟なところがあるんですね」

「そうしないと、今の世の中、成り立っていかないからね」

「さっきの話なんですけど、白神様って、僕がお会いすること、あるんですか」

「ここ百五十年くらい、人間とは会ってないって、言ってたな」

「それじゃ、僕が会うこともありませんね」

「それはどうか、わかんねえぞ。もしかしたら会えるかしんねえ」

「そうですか。余り期待せずに待ってます」

「んじゃ、ご馳走さま」

青神はビールを飲み干すと、いつものように消えた。

青神が消えた後、宏はまだ明るい外の光景を見ながら、ビールをぐいっと飲み干した。

（残り時間 二十二分二十一秒）

第八章 親友の恋人（1）

第八章 親友の恋人

夏も終わり、九月も半ばに差し掛かっていた。今年の猛暑は九月に入っても続き、秋の気配はまだ訪れていなかった。

相変わらず、宏は絶好調であった。マジカルウオッチを手にしてから何かすべてのことが上手くいくような気がしていた。もしかしたら、美里と出会うことができたのも、マジカルウオッチのご利益ではなかったのか。偶然助けたとはいえ、美里のような美人にはそうお目にかかれるわけではない。宏はそんな気がしてきた。一年前の自分には想像もできないほどの、自分が今ここにいた。

昼休みのチャイムが鳴った。

「昼飯食いにいこうぜ」

杉田保に誘われた。

「おう、行こう！」

と宏は応じた。この頃の保はどことなく元気がないように見えた。自分が絶好調であることを差し引いても、まだ、保のテンションは低かった。だからと言って仕事がうまくいかなかったからではない。保とタッグを組んだコンペはまさに全戦全勝であった。だから、宏の仕事のできはイコール、保の仕事のできであった。実際、仕事上の保は生き生きしていた。だから、保のテンションの低さは、仕事以外にある。宏の読みはそうであった。

昼休みなのに、昼休みはいつも空いてるいつもの喫茶店・名譽のために言っておくが、いつも空いてるからはやっていないわけではない。いわばコーヒー専門店だから、昼食メニューが少ないのでなくて、コーヒー通にはよく知られた店だった。で二人は定番のカレーピラフとコーヒーを頼んだ。宏は保に尋ねてみた。

「保、お前この頃、テンション低いけど、何か悩みでもあるのか？」

保が素っ気無く、答えた。

「いやー別にないよ。夏の疲れじゃないのかな」

「夏の疲れって、夏が始まる前からそんなにテンション高くなかったような気がするけどっていうか、明らかに去年に比べて、テンション落ちていると思うんだけど」

「それは相対的なものでしょ。お前、美里ちゃんと恋仲になって、今年に入って急激にテンション上がったから、それで、俺のテンションが下がったように見えるんじゃないか」「そうとも言えるけれど、去年のお前を思い出すと明らかに下降線だからな」

「別に仕事に支障きたしているわけじゃないから、別にいいだろう」

宏は七月の恵美のことを思い出した。宏も家族の誰かが病気で苦しんでいるのか？

「恵美さんじゃないけど、ご家族の誰かが」

と宏が言いかけて、保は、

「あーないない。親父もお袋も弟も、ついでにはあちゃんもピンピンしてるよ」

「と、すると優子ちゃん・・・」

と宏が言いかけてそれを遮るように、

「もういいじゃないか。ほっといてくれ」

と怒ったように吐き捨てた。少しバツが悪かったのか、

「すまん、大きな声出して。でも気にしないんでいいんだ。俺自身の問題だから」

保は少し自分を落ちつかせるように言った。

・ふふん、優子ちゃんの問題か・

宏はそう考えた。確かに今年になってから、優子の話が出ることが減った。保は会話が優子のこと流れしうになると、まるで、それを避けるように話題を切り替えようとした。

「そういえば・・・」

と、今年の年初の挨拶回りの後の飲み会で、課長がカラオケで熱唱しているとき、結婚がどうのこうのっていつていたのを思い出した。

それに美里と知り合ったばかりの時ケンカが絶えないとも言っていた。やはり、優子との問題か。もし、上手くいってないとしたら、宏と美里ののろけ話は単なる拷問に過ぎないとまで思った。

レジで勘定を済ませた後、外へ出て、会社のあるビルへ向かった。二人とも何も話さぬまま、気まずい雰囲気でフロアに戻った。

さすがはアンテナの鋭い恵美である。その雰囲気を察知したのか。宏に小声で、

「ケンカでもしたの」

と訊いてきた。

「いや、そうじゃないのですが」

と宏は喫茶店での出来事を恵美に話した。

「あー、そのことか」

「え、恵美さん、知ってるんですか」

「うん、相談されたから」

「相談？」

恵美が小声で宏にささやいた。

「長くなるから、今日帰りに軽く一杯、本当の軽く一杯、行きましよう」

「わかりました。じゃ、後で」

宏と恵美は終業時間を待った。

保がフロアを出るのを待って、宏と恵美は外へ出た。新橋の馴染みの店に、と思ったが新規開拓のつもりで、違う店に入った。話しをするのには、少し、静かでよさそうである。

生ビールで乾杯した後、本題に入った。

「杉田君、彼女とうまくいってないみたいなの。ほら、あの優子ちゃんって子」

「もう十年以上も一緒にいるのに、何が問題なのかな」

「長すぎた春っていうやつね。十年たったら、それに二十代半ばを過ぎたら、女性は結婚のこと、考えるでしょ」

「まあ、それはそうでしょうね。付き合いはじめて三ヶ月の俺がほ

「とんど結婚状態ですから」

「鈴木くんのはあまり参考にならないな。それはちよつと異常に早い気がする」

「でも、僕の場合、もう二十九ですからね。年齢的には結婚してもいい年齢だし、結婚はいつするかではなく、誰とするかだと思つてますから」

「杉田君はそうは思わないみたいなんだよね。自分は仕事は半人前だし、優子を養つていけるだけの収入がないって、渋っているのよ。別に共働きでいいと思うんだけど」

「あーあいつ、秋田出身で少し古風なところがあるから、結婚したら、夫が仕事して、妻は家庭を守るもんだって思い込んでるところがありますからね」

「そんなこと言つたら二十代の男なんて誰も結婚できないんじゃない？ 大体、結婚したら、女は仕事をやめて家庭に入るなんて、一体いつの時代の発想よ？」

「確かに余りに古すぎる。で、恵美さんは何てアドバイスしたのですか」

「彼女の気持ちを考えてつて言ったの。十年も付き合つて、自分は二十代半ばを迎える女性の純粋な気持ちを考えてあげてつて」

「そしたら、あいつ、何と？」

「自分は優子と結婚するつもりだが、今はまだ早い。三十過ぎてからでもいいって」

「それ自体は間違いとは言えないけど、優子ちゃんの気持ちを考えていないな。優子ちゃん、二つ下だから、今年二十七なんだよね。秋田で二十七だと、親にもう結婚しろつて言われるんだろうな」

「だから、議論が堂々巡りで、空回りするのよね」

「わかりました。僕、一回優子ちゃんと会つてみます。優子ちゃん側の事情もわかつていた方がいいので」

「うん、お願いね」

第八章 親友の恋人（２）

恵美と別れて、新橋から電車に乗った。つり革にもたれながら、ずつと考えていた。

・恋愛って期間じゃないだよな。十年付き合っているのに中々成就しないものもあれば、ほんの数ヶ月で成就するものもある・。

家につき、迎えに出た美里に

「どうしたの、浮かない顔して」

と訊かれ、今日の出来事を話した。二人が今のマンションに引っ越した時、引っ越し祝いに保と優子を招いたことがある。だから、美里も優子のことは知っている。

「えー、私だったら耐えられない」

「うん、だから今、一緒にいるんだろう？」

と宏が言うと、美里が

「長すぎた春は結ばれないっていうからね」

と縁起でもないことを言ったので、

「やめてくれよ。まだ、別れたわけじゃないし」

と慌てて宏が美里をたしなめた。

翌日、オフィスで仕事をしていると、携帯メールが一本入ってきた。差出人を見ると、何と優子であった。中を見てみると、

「お話しがあります。ご都合のよい日に会って頂けますか？」

とあった。今日はプレゼン資料の作成で、夜遅くなりそうだ。明日なら時間が取れたので、

「明日だったら、大丈夫だと思います。時間と待ち合わせ場所を連絡下さい。新橋付近は避けたほうがよいと思います」

と返信した。すると

「ありがとうございます。それでは六時に渋谷の１０９の前でいいですか」

とすぐ返事が帰ってきた。

「了解しました」

と返事を打った。保との間のことだろう。仲を取り持てと言われるのかな。だとしたら、難儀だなと少し不安になった。

翌日、宏は渋谷の109前にいた。やがて、優子が

「お待たせしました」

とやってきた。優子は二十七歳にしては少し童顔の可愛げな顔をしていた。色白のまさに秋田美人という感じの、スタイルのいい女性だった。- もつとも、美里にはかなわないけれど -

宏は余計なこと考えてしまったと後悔しながら、優子と近くの喫茶店に向かった。ひとしきり、近況を報告し終わった後、優子が突然、こう切り出した。

「私、秋田へ帰ろうと思っています」

宏は口にしていたコーヒーを噴出しそうになった。

「秋田へ帰るって、保は知っているの」

宏はまだ優子の言葉の意味を解せないでいた。

「まだ、話していません。帰る直前に話すつもりです」

「帰る前に話すんじゃないくて、話してから帰るでしょ。結果的に同じに思えるけれど、意味合いは違うよ」

「わかっています。わかった上で、帰る前に話すと申し上げているんです」

宏自身はまだ意味を解せないでいた。優子が

「帰ることは決めているんです。だから、帰る前に話すんです」

宏はやつと意味が理解できた。

「なぜ、帰ることにしたの。保とは？」

「タモちゃんとは別れるつもりです。秋田に帰って、結婚しようと思います」

優子は保のことを「タモちゃん」と呼んでいた。

「結婚だって？」

「ええ、高校時代の同級生と」

「どうして、そんなことに」

「ちよつと前に高校の同窓会があつたのです。そこで再会した人と話しているうちにプロポーズされたんです。高校時代から私に好意を寄せていたようで。私は高一の時からタモちゃんと付き合つてましたから、そんなこと全然気が付かなくて」

「保のこと、嫌いになつたの」

「嫌いになつていたら、とつくにタモちゃんとは別れています。嫌いになれないでいるから、別れて、秋田に帰ることにしたんです」

「それ、どういうこと？」

「私、タモちゃんとは十年以上付き合っています。高校を卒業した後もタモちゃんを追つて、東京の大学に進学したし、東京で就職しました。口には出さなかつたけど、多分、このまま、タモちゃんと結婚するんだろうなと思っていました。でも、タモちゃんそれを切り出すとはぐらかすんです。俺はまだ一人前じゃないからとか言つて。まだ未熟だから二人で築いて行くのが家庭だと思ふんです。五月に宏さんの新居に行つて、宏さんと美里さんの仲睦ましい姿を見て思つたんです。二ヶ月しか経つてないのに本当に夫婦みたいだつて。私、タモちゃんと十年、東京に出てきてから八年経つのに、一緒に住んだことすらないんですよ。これだけ長く付き合つたのに結婚できないのは、きつと縁がないからなんだつて思ふようになりました」

優子は目に涙を浮かべながら、訴えるように言つた。はたから見たら、別れを切り出す男にすがっている女のように見えるかもしれない。しかし、そんな周りのことを気にする余裕はない。入社以来六年タッグを組んだ相棒の危機なのである。何とかせねば。

優子の言うことももつともである。保はその父がそうであるように頑固で保守的なところがある。それが時に男らしいと思えるときもあるから、短所とも長所とも、両方言えた。

嫌いになれないから別れるというのも、矛盾するように見えて、実は真理をついていると言えた。

「でも、優子ちゃんは、その同級生のこと好きなの」

「それは……」

「好きじゃない人と結婚するのは不幸だけど、自分のことを好きじゃない人と結婚する人も不幸だと思うし」

「……」

優子は明確に反論できないでいたが、

「でも、一緒にいれば段々好きになることもあると思うんですよ」と一応反論してみた。

「僕の想像によれば、好きだった女性と変な意地のせいで結婚できなかったって不幸になる男が近い将来、出そうだけだな」

「でも、その人は……」

「そう、これは僕の想像。想像だけど六年の付き合いの中で感じた現実に近い想像」

「現実に近いですか」

「限りなく、現実に近いと思うよ。秋田の同級生には返事をしたの？」

「まだ、していません。今週の金曜日に帰って、返事をしようと思ってます」

「保に何も話さないでいくの」

「実際に今の部屋を出払って帰る前に言おうと思ってるんです」

「保の親友として頼みがある」

「頼みって？」

「保に最後のチャンスをやってほしいんだ」

「最後のチャンス？」

「そう、あいつは事の重大性にまだ気づいてないだけなんだ。だから、事の重大性をわからせるチャンスをやって欲しい」

「具体的には何を」

「金曜日は何時に秋田に行くの」

宏が尋ねると、優子はバッグから切符を取り出し、

「十八時二十八時のこまち九一号でいく予定です」

宏はキップ手帳にそれをメモすると、

「保が、俺が想像する通りの男だったら、その切符は無駄になると
思うよ。そうでなかったら、優子ちゃんの判断が正しかったって
いうことになるんだけどね」

そう告げて、宏は席を立った。

第八章 親友の恋人（3）

それから二日後の金曜日の午後四時、宏は得意先から出ると、同じく外出中の保の携帯に電話をした。予定通りなら、保は新宿にいるはずである。

「お、宏、どうした」

「保、お前今、客先か？」

「ああ。でももう終って、会社に帰るところだ」

「ちよつと、話があるから、新宿で待っていてくれ」

宏と保は新宿駅東口の小田急前で待ち合わせた。二人で喫茶店にゆき、向き合った。

「話って何だよ？」

「優子ちゃん、秋田に帰って結婚するそうだな」

「何だって！」

「だから、秋田に帰って、高校時代の同級生と結婚するんだってな」

「そんな話、聞いたこともないぞ」

「あら、彼氏のタモちゃんがそのこと知らないんだ？」

宏は茶化した。

「一体、どういうことだよ」

「彼女、本当はお前と結婚したいいいんだ。でも、お前はその気がない」

「その気がないんじゃない。今はまだってことさ」

「十六歳の時から十一年最初の二年を除いてほとんど一緒にいた人と結婚せずに、九年ぶりかなんかにあった同級生のプロポーズにYESと返事をする女性の気持ちがわかるか」

「・・・・・・・・・・」

「彼女、本当はお前と結婚したいんだ。でも、お前は煮え切らない。俺と美里を見ていて、男女の仲は年数じゃないって思ったってさ。十年以上も付き合っても、結ばれないものもあるんですねって」

「・・・・・・・・・・」

「彼女はお前ではなく、俺に相談してきた。そりゃそうさ、お前に相談しても相手にしてくれないんだから」

「優子とは結婚するつもりさ。ただ、俺がもう少し・・・」

「もう少しって、三年後か、五年後か、十年後か、一体いつだ」

「それは・・・」

「いつの問題じゃないだろう。誰とすることが問題なんじゃないのか。未熟と言えば、俺だって、美里だって、そして、優子ちゃんだって未熟さ。でも未熟だからこそ、二人で助け合ってゆくんだろう。結婚の報告に『未熟なふたりですが・・・』って書いてあるだろう。夫婦なんて最初は未熟さ。でも、お互い助けあって、子供ができたら共同で子育てして、段々成長していくんじゃないのか」

「・・・・・・・・・・」

「それを変な意地張りやがって。結局、優子ちゃん是他の人のお嫁さんか」

「どうしたらいいんだ？」

「お前はどっしたいんだ？」

「優子を誰にも渡したくない」

「だったら、それをお前の口から伝えろ」

保が携帯を取り出そうとしたのを見て、宏が止めた。

「携帯で済まそうなんて思うな。面と向かってお前がその口で伝える」

「でも、どこにいるんだ」

「今日の秋田新幹線、こまち九一号三号車六番A席だ。早く行け」
二人は新宿駅に向かった。時刻は午後五時半、こまち九一号は十八時二十八分発だから、十分間に合うはずであった。

ところがここで、宏の目論見に大きな狂いが生じた。新宿から東京へ向かう中央線と山手線が同時に止まってしまったのだ。正確には山手線が信号故障でストップしている間に中央線御茶ノ水駅で人身事故が発生してしまった。地下鉄を使う手があったが、おりしも

ラッシュ時に振替え輸送の客が加わり、駅が大混乱していた。このままでは、優子が秋田に行くのを止められなくなる。

二人はタクシーを使うことにした。宏と保はタクシーに乗り込み「東京駅まで」と告げた。

「どれくらいかかりますか」

「すいていれば三十分くらいなだけだね、金曜の夕方だからね」と運転手が自信なさそうに答えた。一か八かの掛けであった。しかし、運転手の心配は的中した。最初こそ流れていたものの、高速を降りたところで大渋滞にはまってしまったのである。車はほとんど動かなかった。このままで間に合うのか、不安に思っていたら、運転手が

「お客さん、これは乗っていてもしょうがないね」と言ったので

「東京駅まであとどのくらいの距離ですか」と宏が運転手に尋ねると

「ちょうど三キロくらいだね。オリンピックのマラソンランナーなら十分で走れる距離だよ。はは」

と笑いながら言った。こっちは時間がない。

宏はとりあえず時間を止めた。しかし、時間を止めただけならそれで終わりである。動けるのは宏だけだから、保を動かすには宏がおぶってでも行くしかない。宏は思案した。そして、ふと運転手の言葉を思い出した。これしかないと思った。

宏は竜頭を押して、止めていた時間を再び動かした。そして、運転手に

「ここで降ります。ありがとうございます」

と言って、保と車を降りた。そして、保に

「お前、ここから走れ」

「えっ」

「ここ真っ直ぐいくと東京駅だから、ここ真っ直ぐ、全力で走れ」

「あと三キロだろう。十四分しかないのに間に合わないよ」

「火事場の馬鹿力を見せる。死ぬ気で走れば間に合う。つべこべ言わずに走れ」

保は走り始めた。どう考えても無理だと思った。マラソン選手じゃあるまいし。ところが、急に体が軽くなった。足も自然に前に進む。前方に見えた景色が自分の横を通り、あっという間に後方へ流れて行くのを感じた。本当にマラソンランナーになったような気がした。- 間に合うかもしれない。これが火事場の馬鹿力っていうやつか - 真剣にそう思った。死ぬ気でやれば何とかなると宏はいつたが、その通りかもしれない。絶対に間に合わせて、優子を見つける。そしてもう離さない。本気でそう思っていた。ちらつと看板が見えた。

- 東京駅まであと一キロメートル -

東京駅の秋田新幹線のホームに優子は立っていた。プロポーズしてくれた同級生に返事をしに秋田へ帰るために。

「保にチャンスをやってくれ」

って言うてたけど、どういう意味なのだろう。

保がどうこうするとは、思えなかった。火曜日に宏と会う前日にも大ゲンカをした。

「それなら秋田に帰る」

「おー帰れ帰れ。静かになっていいわ」

だから、秋田へ帰るんだ。そう思った。

しばらくして、こまち九一号がホームに入ってきた。三号車のところに並んだ。やがて、ドアが開き、優子も車中に入った。荷物を棚に載せ六番A席に座った。何故だかわからないが目から涙がこぼれてきた。周りの人に気づかれないように、ハンカチで目を覆いながら下を向いていた。

もうすぐ発車というその時に窓の外から『トント』と窓を叩く音がした。涙が止まらない顔を上げて見た。保だった。驚いた。最初はどうすればよいかわからなかった。保が左手で反対の右手の方角を指差した。ドアの方を指していた。ー降りなくちゃー

「まもなく発車致します」

という社内アナウンスが流れた。車内通路をドアの方に向かって懸命に走った。秋田新幹線こまち九一号は東京駅を静かに発車した。走り去ったホームには保と優子の抱き合う姿があった。

「ごめん、優子。俺が悪かった」

保が優子の頭を胸に抱いて、言葉をかけた。

保のシャツは優子の涙でグショグショになっていた。だが、それはさつき流していた涙とは違う、感激の涙であった。保は

「優子、一緒に暮らそう。結婚しよう」

と優子に言った。

「うん。うん」

声にならない声で優子は何度もうなずいた。

宏はこまち九一号の発車時刻を過ぎてからマジックウォッチの竜頭を押した。

「保は優子ちゃんを止めることができたのだろうか」

宏は保に電話で確認し、間に合ったことを知った。

「そうか、よかったな。もう離すなよ」

宏はそういつて電話を切った。そして、自分以外の誰にも見えないように、ウォッチを確認した。それを見て、少し不思議そうな顔をしたが、

「まあ、いいか」と言って、そのまま。そこから一番近い地下鉄の駅に向かって、歩いた。

その日は会社に戻らず、そのまま藤沢に帰った。家に帰ると大抵、美里にその日あった出来事を話すのだが、保と優子のこととは話さなかった。美里は保と優子が付き合ってた将来は結婚すると思っていて、どっちせよ結論はかわらない。今日のことを話すことはないと思っただけである。

美里がシャワーを浴びに浴室に消えると宏はベランダに来て一服した。待ってましたとばかりに青神が来た。

宏は缶チューハイとチーズかまぼこを用意して待っていた。

「こんばんは、青神様。缶ビールとおつまみをどうぞ」

「あら、今日は優しいのね」

「何かいい気分なんです。保と優子ちゃんがうまくいった」

「あそこで、あんな方法思いつくなんて、やっぱり、お前さん切れてるな」

「いえ、運転手さんがいいこと言ってくれたからですよ。あれがなかったら、どうしようって立ち往生してましたよ」

「前にもいったけど、その言葉を引き出したのもお前さんの他人を思いやる気持ちにマジカルウォッチが反応したってことだと思うな」
「自分ではそんな風には思いませんけどね」

「今日は金曜の夜だから、営みも激しくなるね」

「何を言ってるんですか。人間のエッチには関心ないんですよ」

「いや、エッチそのものには関心ないけど、お前さんという人間には興味あんのよ」

「おかしいと言いますね。僕のどこに関心があるんですか」

「おれもここ四十年ほど、この仕事してるけど、お前さんみたいな人初めてだ」

「何が初めてなんですか」

「いやー、詳しいことは、年末近くになると多分、白神さんがきて教えてくれると思うよ」

「ふーん。そうなんですか」

その時、部屋の中から「宏くーん」という美里の声がしたので、宏は「すみません。美里が呼んでますので失礼します」

と青神に一礼して、中へ入った。青神もビールを飲み干すとくると消えていった。

（残り時間 十七分 五十四秒）

第九章 逆転のフリースロー（１）

第九章 逆転のフリースロー

その年も十一月を迎えていた。まだ振り返るには早いような気がするが、宏は

「今年はいいい年だったな。最高の収穫はこの娘だろうな」と隣で寝ている美里の髪を撫でながら、つぶやいた。

その時、不意に電話が鳴った。相手を確認すると、佐藤明であった。

佐藤明は高校時代からの宏の親友である。一年生で同じクラスになり、宏の姓が鈴木、明の姓が佐藤だったので、「ありふれた名前」、「時間が経つと、えーそんな人いたっけ、覚えてないと言われそう」と一緒にからかわれたのが縁で仲良くなった。中学からバスケットボールをやっていて、高校でもバスケット部のエースで主将、スポーツ推薦でいった大学でも活躍し、バスケットボール界では注目選手の一人であった。そのまま実業団リーグのムーンスターズに入り、日本代表に得たばれるほどの有力選手である。宏は明と親友であることが隠れた自慢であった。ただ今年は長年酷使してきた膝の故障で、シーズンオフ中に手術をし、リハビリに励んでいた。しかし十月に始まる今シーズンには間に合うという話であった。宏と最後に顔を合わせたのは、今年五月に膝の手術で入院した時に宏が見舞いにいった時であった。明には悪かったが、今シーズンが開幕してからのチームや明の状態について宏は知らなかった。

「もしもし、宏か、俺」

「おう明、元気か。今シーズンはどうだ？」

この言葉で明は、シーズン開幕後の状態を宏は知らないかと気づいた。開幕三連敗の後、初勝利を飾って、また二連敗であった。

「うん、まあまあの出足だ」

「そうか、良かったな」

「今度、一緒に飲まないか」

シーズン中は余り飲みに行くことはなかった。シーズン開幕後のチーム状態はわからなくても、何かあったなという宏の感度は鋭かった。高校卒業後は別の道を選んでも親友であった。

「いいよ、時間と場所を決めてくれ」

「じゃ、渋谷の八子公前で、明日午後六時というのはどうだ？」

「午後六時だな、わかった」

宏は電話を切った。

何かあったのだろうか、宏は別に不安にならなかった。調子に乗っているわけではなかったが、多少の困難は乗り切れる。いつもマジカルウォッチを使っているわけではなかったが、マジカルウォッチを手にした後の宏は恋も仕事も順調であった。多少のことは大丈夫とポジティブシンキングになっていた。

翌日の朝、宏は今日、佐藤明と会うことを美里に告げた。今年四月のリーグファイナル戦は美里と応援した。その時に明に美里を紹介していたので、明のことはよく知っていた。

「何かしらね、四月に会った時はどちらかという宏君のほうがネガティブで、宏君のことお願いしますなんて、言ってたのに」

「まあ、あいつのことだからバスケのことだとは思うけどね」

午後六時に明と会って、宏は驚いた。

「お前、なんだ、その顔浮かない顔」

外見自体なそんなに変わらないのだが、無表情で生気がなかった。

「いや、開幕戦以降、負けがこんでね」

宏は初めて知った。明の所属するムーンスターズは優勝争いをする強豪で、今年の二〇一〇〜二〇一一年のシーズンのファイナル戦でも宏たちの目の前で勝利し、優勝を勝ち取っていた。そのチームが開幕後、一勝五敗とは。宏はストレートに訊いてみた。

「お前の調子はどうなんだ」

明も正直に答えた。

「最悪だよ」

「原因は何なんだ」

「五月に手術したろう。それから、リハビリして七月頃復帰したんだけど、何か感覚が取り戻せないっていうか、相手がぶつかってくるのが怖いんだよね。動こうとすると足に痛みが走って。多分先シーズンのファイナルでぶつかられて、怪我が悪化したことがトラウマになってるんだろうけど」

「ずっと、そうなのか？」

「最初の頃は慣れれば何とかなると思っていたんだ。でも、やっぱり感覚が戻らなくて。そのままシーズンを迎えてしまったんだ」

「で、チームも連敗ってわけか」

バスケットボールはチーム戦であるから、一人のせいなんてことはあり得ない。しかし、肝心要のエースが不調ではチームの成績も上がらない。明の顔を見て、チームの不調も納得できた。

「で、俺に何をしろって？バスケのこと、訊かれても俺はわからないぞ」

「試合を見に来て欲しいんだ」

「げんかつぎって言うわけだな」

実は宏が見に行くと、ムーンスターは勝つというジンクスがあった。勝率でいうと実に九割を超えていた。ここ二、三年はリーグのシーズン戦は見に行っていない。

バスケットボールのリーグ戦は八チームがレギュラーシーズン戦を総当りで戦い、勝率のいい上位四チームがセミファイナル戦に進出する。セミファイナルではシーズン一位と四位が、シーズン二位と三位が三回の対戦を行い、先に二勝した方がファイナルへ進出する。そして、ファイナル戦の勝者が優勝となる。ムーンスターは常にファイナル戦に進出していたから、宏が見に行かなくても、レギュラーシーズンでは、セミファイナルの条件である上位四チームに必ず入っている。だからセミファイナル戦から応援すればいい。昨シーズンまではそうだった。しかし、今シーズンは今の状態でい

くとファイナルはおろか、セミファイナルも難しいということだった。

「応援には行ってもいいけど、俺は神様じゃないから、俺が行っても勝つ保証はないぜ」

「わかってる。でも、今は藁にもすがりたい思いなんだ」

幸い、次の試合は今週末の土日、横浜であつた。応援に行くのには都合がよかった。

「じゃ、今週末に応援に行く。勝利の神が行くんだからちゃんと勝てよ」

宏はそう言つて、明と別れた。高校時代からの付き合いであつたが、あんなに落ち込んでいる明は見たことがない。ムーンスターズには他にもいい選手はいるのだが、明の調子が良くないとチームがリズムに乗れないのも事実であつた。

「まあ、俺、今絶好調だから、いくらか明に分けてやってもいいかな」

宏は気楽でいた。俺が見てるということも明はチームメイトに伝えるだろう。チームの中でも宏は常勝の神ということになっていた。

「自分が行けば、チームの皆も勢いづくかもしれない」

宏はそう思った。

第九章 逆転のフリースロー（2）

その週の土曜日、宏は美里と横浜体育館にいた。バスケットの試合を見に行くのは今年の四月のファイナル最終戦以来で、その時は付き合いだしたばかりの - しかし、極めて親密な関係にあった - 美里と応援した。美里も久しぶりの観戦を楽しみにしていた。

明は宏の姿に気づき、軽く右手を挙げた。すると、コーチや他のチームメイトも宏に気づき手を振ったり、会釈したりした。宏もそれに応えて、会釈した。

試合が始まった。バスケットボールの試合は十分のハーフタイムを挟んで前半と後半に分かれ、前後半とも二分のインターバルを挟んで、前半が第一クォーターと第二クォーター、後半が第三クォーターと第四クォーターに分かれる。クォーターはそれぞれ十分間である。

前半は三十二対三十のほぼイーブンであった。宏の見たところ、それほど調子悪いようには思えなかった。明もいつもの明の動きをしていた。しかし、後半は急坂を下るように、ムースタースの動きが鈍くなった。きっかけは明がタックルを受けて転倒してからだ。ムーンスターズというより、明の動きが悪くなっていた。他のチームメイトの動きは悪くない。しかし、明にボールが回ると好調な時の素早い動きができなくなっていた。だから、すぐにディフェンスに囲まれる。また、敵陣に飛び込んでするシュートにも切れ味がなかった。スリーポイントシュートはおろか、ファウルを受けた時に与えられるフリースローも決まらなくなっていた。仕方なく、第四クォーターにはベンチに引込まざるを得なかった。結局、その試合は五十四対七十六でムーンスターズは敗れた。

試合後の控え室の廊下で宏は明と椅子に座って話をした。宏が尋ねた。

「何故、後半ダメになるんだ」

「よくわからないんだ。リーグの開幕戦で相手に派手にタックルされて倒れたんだ。その時に手術したところがちよつと痛くなって。大事には至らなかつたんだけど。それから、相手に強めに体を入れられると痛みが走って、上手く動けないんだ」

バスケットは球技とはいえ、野球のように攻守ところを変えてとか、バレーボールやテニスのようにコート隔着て相手と向き合うようなものではない。同一エリアで敵味方入り乱れてのぶつかり合いだから、だからタックルされることを恐れていては話にならない。その点、格闘技であるとも言えた。特に明はエースであるから、相手にマークされやすい。そんなことは明自身わかつているだろう。

「明日、また応援に来る。今日みたいな試合はするな。足は痛くないって頭の中で百回唱えろ」

そう言つて、宏は美里の待つ出口付近へ足を進めた。美里は宏の顔を覗くように、声をかけてきた。

「負けちゃったね。前半は良かったのに」

「メンタル面だと思ふんだ。後半すぐに強くタックルされたり。あれをきつかけに動きが悪くなった。今年、春の手術もタックルをうけての転倒がきつかけだから、恐怖心があるんだ。相手チームもそんなの先刻承知で、ファウルとられても体を入れてくる。明自身が乗り越えないといけない壁なんだ」

「どうすればいいの」

「明自身が本来の明に戻れば、チームも本来の強さに戻れる。問題はどうかやつて本来の明を取り戻すかだ」

「いい案あり？」

「俺がどうこうできるわけじゃない。スタンドで応援することしかできない」

「じゃ、明日も応援しよ。明日は勝利を呼ぶ神になれるかもよ」

「そうだな、美里も一緒に来てくれるか」

「もち、ついていきまーす」

宏は美里の肩を抱いて引き寄せた。

翌日の横浜体育館も観客の熱気でムンムンしていた。ムースターズはここまで一勝六敗。ここで勝って、上昇気流に乗らないと、セミファイナル進出条件のシーズン四位内にはいることが難しくなる。正念場であった。

宏はチームのところにつけより、明に声をかけた。

「明、覚えているな。『足は痛くない』って唱えろよ。わかったな」
明は手を挙げて応えた。その顔は湿ったものだった。第一クォーターはムースターズの動きは良かった。明の動きも良かった。しかし、第二クォーターの終盤、明にボールが渡ると相手チームがここぞとばかり、体を入れると明は転倒した。それで降明の動きはみるみる悪くなった。パスを受けても流すだけで、ドリブルで突破することもできず、リズムを崩していた。明らかにボールを持つことに怯えていた。

「あいつ、ボールを持つことを怖がっている」

宏は隣の美里に言った。

「あれじゃ、シュートはできないし、点もとれない」

ハーフタイムになった。宏は控え室の廊下で明と向かい合った。

「お前『足は痛くない』って本当に唱えているか。そう思わないと勝てないぞ」

「念仏じゃあるまいし、唱えて痛みがどうにかなるわけじゃないだろう」

「自分で暗示をかけないとその通りにならない俺に教えてくれたのは高校時代のお前だろ。そのお前がそれをしなくてどうするんだよ」
明は怒った口調で話す宏に驚いた。

「すまない。俺が悪かった」

明は宏に素直に謝った。

「コートの中で信じられるのは自分とチームメイトだろう。その中でも自分自身を信じろ。自分を信じることができれば、チームメイトのことも信じられるし。チームメイトもお前を信じてくれる」

宏は明の肩をぽんとたたいて、スタンドに戻った。

後半の第三クォーターが始まった。明の動きはまだ鈍かった。明にパスが回ってきた瞬間、相手チームのプレイヤーが体をぶつけてきた。明は転倒したが、ファウルでフリースローを獲得した。明は一回、大きく深呼吸した。そしてゴールポスト目掛けて第一投を放った。入った。続けて第二投を放った。これも入った。歓声がこだました。

それからの明は見違えるような動きを見せた。屈強な相手ディフェンスの中を分け入るように体をねじ込ませ、ゴールを連発した。守っても、体を入れて、相手のゴールを阻止した。第四クォーターに入っても、勢いは衰えなかった。結局四十七対七十一の大差でムースターズの大勝利だった。

明は宏を見て、ガッツポーズをした。宏も左手を挙げて応えた。

もう大丈夫だろう。明の調子が戻れば、ムースターズの調子も上がるに違いない。宏は美里と出口の方へ向かった、後ろを振り返り、小さな声でつぶやいた。

「セミファイナルとファイナルは自分の力で何とかしろよ」

帰りは横浜の中華街で夕食を食べることにした。美里は中華街はしばらくぶりで、

「うわあ、久しぶりだね。本当に中華街って感じだね」

と感嘆の声を上げた。

「美里は何が食べたい？」

「チンジャオロースーとか麻婆豆腐とか、いかにも中華街に来ましたっていう感じがいいな」

少し値は張るが、有名な店に入った。紹興酒で今日の勝利の祝宴を挙げることにした。

「乾杯！」

二人は声をそろえて、乾杯した。美里が訊いてきた。

「でも、あのフリースローをきっかけに佐藤さん、急に調子上がったみたい。宏君、何かおまじないした？」

「おまじない」と聞いて、宏は少しドキッとしたが、すぐ気を取り

直して、

「したよ。明が本来の明の力を発揮できますようにって」

「そのおまじないが効いたんだね。じゃ、私にもおまじないして」

「何を」

「私が宏君とずっと一緒にいられますようにって」

「あ、それならもう一年中、おまじないしてるから」

二人で笑い合った。

二時間ほど夕食会を楽しんで、中華街を後にした。マンションに着いて、美里が先にシャワーを浴びることになった。美里がシャワーを浴びている間、宏はベランダに出て煙草に火を点けた。しばらくして、青神が現れた。現れるのに備えて、ビールとチーズかまぼこを用意していた。美里と一緒にくらすようになってから、青神と話をするのは、このベランダと決まっていた。

「だんだん寒くなるから、ビールはこれくらいにして、熱燗の日本酒がいいな」

青神がねだるような顔をして言った。

「だんだん要求に品がなくなっているような気がするのですが」

「神様業界も不況だね。手当てが大幅カットになってんの。だから酒は外で飲めつてかあちゃんに言われてっからさ」

「でも、熱燗となると、美里に見つからないようにするのは無理ですね」

「あー、いいの、いいの。酒屋で売ってるコップ酒で。そしたら自分で両手に挟んで、エイって念じれば、温まるから」

「へー、そんなことできるんですか」

「俺も一応神様だから、それくらいのことは出来ないかね」

「わかりました。今度、ワンカップ何とかっていうの買っておきます」

「うん、お願いします」

「で、今日のフォローは」

「別ありません」

「明に力を貸したのって、誤った使い方じゃないですか」

「だって、お前さん。明君が心で唱えた通りのことが実現するように念じたべ。明君が自分で唱えたことが実現しただけだから、別に問題ありません。もし、マイケル・ジョーダンにしてくれてなんて願いだったら、若干、倫理規定に反するかもしれないけど」

「倫理規定って、そんなのあったんですか」

「あ、昨日、つくったの。会議で」

「今年ももう終わりですね。この時計も返さなければなりませんね。本当にこの時計のおかげでいい一年になりました」

「年末までまだ時間あるから。それまでは持つてていいから。じゃ、俺はこれで帰るから、お酒宜しくね。さよなら」

ビールを飲み終わると青神は消え去った。

（残り時間 十三分 二十三秒）

第十章 大仕事と時計の秘密（１）

第十章 大仕事と時計の秘密

十二月に入った。今年も残すところ、あと一ヶ月だ。今年も何とか無事に終えそうだという時に事件が起こった。正確にいうと事件は十一月二十五日に起こったのだが、宏たちに影響が及ぶことになったのは十二月に入ってからだった。隣の部の黒木っていうクリエーターが飲酒運転で人身事故を起こしてしまったのである。今は検察に身柄を拘束されていた。黒木はその性格やセクハラまがいの行動は問題があったが、クリエイターとしての才能はずば抜けたものがあった。だから、行動に多少の問題があっても、会社としては重宝した。しかし、今度は飲酒運転した上で人を轢いてしまったわけなので、会社としても容認は出来なかった。

黒木の手がけていた案件については客先に謝罪し、出来たものは辞退したが、進んでしまっているプロジェクトもあって、すべて辞退できるわけではなかった。その中に大田機械工業向けの仕事があったが、これを宏たちが所属するセクションで担当することとなった。宏たちのセクションは恵美が中規模二件、宏と杉田保が中規模一件、大規模一件のプロジェクトを年内に終えるよう、タイトなスケジュールが組まれていたから、課長の大島は大田機械工業向けの仕事は断るよう、部長の片桐に進言したが、重要商談ということで、押し切られた。

今年に入ってから宏のセクションの業績には目を見張るものがあった。宏と保の組んだ案件で失注したものはなかった。そういうこともあって、宏と保は社内でも注目される存在になっていた。これが、宏のセクションに大田機械工業の案件が振られた最大の理由である。

課長の大島は仕事の割り振りに悩んでいた。恵美にこれ以上の仕

事を抱えさせることは不可能であった。結局、宏と保が担当することになった。宏は苦しいとは思ったが何とかできると思っていた。保も宏と組んでいるから大丈夫と考えていた。宏と保はまず詳細にスケジュールを練った。それこそ、分刻みのところまでブレイクダウンした。梨香にもちよつと手伝いをしてもらうことにした。そうやって、なんとかぎりぎりのところで三件こなすスケジュールができた。

明日からは戦場になる。深酒は出来ないが、武士が出陣を祝うように、軽く飲みに行くことにした。新橋駅近くの居酒屋に行った。

「カンパーイ」

とビールで乾杯した。恵美が口火を切った。

「しかし、黒木の奴、最後の最後でやってくれたよね」

梨香がすぐに応じた。

「いつか、こんなことになると思ってました。会社も悪いと思います。私たち若手の女子社員が集団で抗議言っても、『まあ、そこは』って全然、取り合ってくれなくて。業績を挙げているからって、甘やかし過ぎです」

「おかげで、師走は奥さんに寂しい思いをさせることになったね」

と恵美が宏に言くと、宏は

「あの、まだ籍は入れてないんで」

と答えた。

「あれーそうだったけ。もう入れてると思ってたよ」

恵美がちよつと意外という顔で宏に言った。

「まあ、一応今年中には入れようと思ってるんですけどね」

「じゃ、来年の新年会は宏の結婚祝いを兼ねてつということだ」

「忘年会やってないのに新年会の話しか」

宏が言くと、恵美が

「あれ、忘年会っていつだったけ」

というと、梨香が

「十八日に予定してたんですけど。今日の話でふつとんじゃいまし

た」

と答えた。

「じゃ、仕事が落ち着いた最終日にでもやろうか。別に予約してなくてもいいじゃねえの」

と保が提案すると、恵美が

「軽く一杯行っちゃって」

一同、どつと笑った。

一時間ほどでお開きにし、帰途についた。東海道線下りの中で、つり革に捕まりながら、
「俺は幸せだよな」とふと思った。信頼できる上司と仲間たち。それには美里。

「一生の運を今年一年で使ってしまったんじゃないだろうか」

と逆に不安になったりもする。いずれにしても今年はあと一ヶ月で終わる。あの仲間たちと一緒にならどんなことだってできそうな気がした。

家に着くと、美里に明日から毎晩遅くなること、休日も出勤になることを告げた。美里は一言、

「体には気を付けてね」

と優しい言葉をかけてくれた。

明日に備えて、シャワーを浴びて早く寝ることにした。

第十章 大仕事と時計の秘密（2）

次の日からまさに戦争であつた。客先との打ち合わせ、関係部門との打ち合わせ、電話でのスケジュール調整。詳細に作つてあつたスケジュール表も少し狂うと練り直しになる。時には怒号が飛び交う時もあった。

そうしてうちに西尾電気への広告ポスターの納入が終了した。そして、翌週には山田興産へのプレゼンを終了し、無事受注。恵美も抱えている二つの案件を順調に進めているようである。宏のセクシオンは忙しいながらも一体感に満ち溢れていた。

残る大きな案件が黒木の事件で宏たちが負うことになった「大田機械工業」である。大田機械工業は放電加工機などの業務用機械を生産している。主要な客先はメーカーなどで、

宏たちが扱っている個人向け商品の広告とはそのジャンルが異なる。また、製品そのものではなく、企業広告の要請であつた。課長の大島が抵抗した理由の一つがこのことであつた。しかし、後になつてわかつたことだが、部長の片桐は受注できないことは覚悟の上で、宏と保に経験を積ませることを優先したのである。企業広告とはいかなるものかを知って欲しいと思つていたわけである。

宏と保は会議室に入つて、打ち合わせをしている最中であつた。宏が口を開いた。

「しかし、企業広告っていうのは、一般の人に対して自分の会社を知ってもらいたいと思つてやるんだから、目線は一般の人と同じなんじゃないの」

「でも、一般の人に訴えて、何の広告になるの」
保が反論した。宏は

「別にお客さんに製品売るためにやるもんじゃないでしょう。いい企業イメージを持ってもらえれば、直接のお客さんであるメーカーとかにも評価してもらえるし。学生の評価がよければ採用でもいい

人取れるし」

「うーん、なるほど」

宏と保の会議はしばらく続いた。そして、二人の意見が一致したところで企画書を書くことにした。

大田機械工業へのプレゼンを明日に控え、社内で入念なりハーサルが行われた。最終的に部長の片桐のOKも出た。

宏と保は明日に備え、結束を固めるべく、

軽く一杯に行った。宏が

「何か今日のリハーサル、大島課長、緊張してたな」

というと、保が

「大田機械工業って大口の仕事だからね。それに俺たち、企業広告なんて初めてだから、失注してもしょうがないって思ってるけど、課長の立場だとそういうわけにも行かないじゃない？」

と返答した。宏が

「管理職って大変だよな」

つていうと、

「俺は絶対ごめんだね」

と保が応じた。

一時間ほどで、飲み屋を後にした。

「じゃ、明日はがんばろう」

宏がJR新橋、保が地下鉄とそれぞれに別れ、お互い健闘を近い合つて別れた直後、宏は車のブレーキ音と「ドン」という鈍い音を聞いた。そして、女性の悲鳴と「誰か轢かれたぞ」という男性の声があったので、寄っていった。そして見る見ると顔が蒼くなった。轢かれたのは保であった。救急車で病院に運ばれた。幸い命に別状はなく、足に大怪我をした以外は奇跡的に軽傷であった。病院のベッドで保は目を覚ました。

「どうだ、足は痛むか」

宏が尋ねた

「ああ、大丈夫だ。でも俺どうなったんだ」

「信号無視の左折車に巻き込まれたらしい」

「まったく、なんてこった」

「神様が休養しろって言ってんじゃないか」

「明日のプレゼンどうしよう」

「気にするな。俺が何とかする」

「何とかするって、お前がプレゼンやったら始まって三分で失注だぞ」

「他の奴に俺の企画をプレゼンなんかさせられるか」

「すまん、がんばってくれ」

保が急になみだ目になって言った。

「俺、別に特攻行くわけじゃないから」

宏が笑って返した。

やがて優子が、課長の大島が、恵美が来た。三人それぞれに状況を説明した。優子が付き添うことになった。宏は病室を出る際、優子に向かってささやいた。

「優子ちゃん、保のこと、お願いね」

「いえいえ、こちらこそ、ありがとうございました」

保と優子は来年の三月に結婚式をあげるようになっていた。

「奥さんになる予行演習ということで、介護のね」

「まあ、宏さんたら」

課長の大島に対しては、

「ということで、明日は玉砕覚悟で私がプレゼンやりますから」

「すまん、責任は俺が取るから」

「じゃ、来年、四国辺りに二人で飛ばされますか」

宏は笑いながら、冗談を飛ばした。恵美には、

「恵美さん、ワイフの邪魔しないようにね」

「わかってるわよ。でも大したことなくて安心した。明日のプレゼン、私が行こうか」

と恵美が言うので、

「四国に飛ばされるの、三人になっちゃいますよ」

と笑い飛ばした。保のことは優子たちにまかせて自分は明日の練習をせねばと思っていた。

・それにしても、俺って何で自分の企画を説明できないのだろう・プレゼンテーションは二十分の企画説明と五分から十分の質疑・応答からなる。企画・説明は企画案の趣旨、訴求点、効果などを簡潔に説明しなければならない。質疑・応答も同様に質問されたことに正確かつ簡潔に答えなければならない。また、コンペティションである場合がほとんどなので時間は守らねばならない。宏がやると趣旨・訴求点が自分のクオリティの高さの自慢になったり、質疑・応答では質問に対して、関係ないことを応えたりすることがあって「鈴木 of 企画はいいが、プレゼンはダメ」というのが、社内の通説であった。

しかし、だからといって今から保以外のプレゼンターを探すのは不可能だった。

家に着き、美里に

「大変だったね。杉田さん大丈夫？」

「ああ、しばらく入院しそうだけど。命に別状ないから、一安心だ」明日のプレゼンの話をする

「その時間だけ、杉田さんになればいいのにね」

と美里が言った。宏は美里を抱き上げ

「ありがとう。いいこと言ってくれた」

と抱き上げて、キスをした。・そう、俺にはその手があった・しかし、手元に残っている時間は十三分二十三秒。プレゼンの時間は二十五分から三十分であった。十三分では半分程度しか奥の手は使えない。中途半端にするならいっそのこと大失敗して撃沈か。

しかし、これは重要商談である。十分他社とやり合っただけの失注ならまだしも、プレゼンの拙さでの失注は何としても避けたかった。自分が飛ばされるのはかわらない・美里も付いてきてくれる・が子供のいる大島に迷惑がかかるし、何よりも保が自分を責めることに

なり兼ねない。さつきまで何とかなるさと気楽に思っていたのがウソのように宏は精神的に追い詰められていた。プレゼンは明日なのに。時間だけがいたずらに過ぎてゆく。美里に「会ってから一番」というくらい顔色が悪いと言われた。

ベランダに出た。コップ酒を持っていったのはぼやき相手でもいから、青神に出てきて欲しかったからである。煙草を一本吸って見たが、青神は出てくる気配はなかった。来て欲しい時に来てくれない青神を恨めしく思ったその瞬間、

「こんばんは」

とひよっこり姿を現した。

「いやー、待ってましたよ」

「あれ、いつも何しに来たって訊くのに調子いいこと」

「まあ、そう言わずにぼやかせて下さいよ」

青神が何かヒントくれなしかと期待した。

「今度は人生相談？それは街の占い師にでも訊いてよ」

「お酒持ってきましたから」

「あら、これこれ。これが飲みたかったの。さーっと手で熱くして青神が両手で持つとあつという間に湯気が立った。

「じゃ、頂きます。ふー、うめーなー。で相談って何？」

宏は保の事故のこと、明日のプレゼンを自分がすることになったこと、でも、うまくいかないことなどを話した。

「んで、お前さん、あきらめるのかい？」

「だって、今度ばかりは」

「あら、いつでもあきらめずに頑張ってきたでしょ。今年最後の大仕事なんだから前向いてがんばろうよ」

「うーん、そうかな」

「探せば道は見つかるって。じゃ、俺はこれでサヨナラするから。プレゼン頑張ってね」

青神はくるっと回って消えてしまった。

「ああ、行っちゃった」

でも、青神は探せば道はあると言っていた。

「探せばって、どこを探すんだ」

宏は自問自答してみた。よくわからない。でも青神はいいかげんなことを言ったことはなかった。何かやり方はあるのだ。問題はどこにあるかだ。

「うーん、寒い」

十二月の空気は芯から冷え切っていた。宏は煙草を消して、部屋の中へ入った。

第十章 大仕事と時計の秘密（3）

翌日のプレゼンには大島と二人で行った。朝、フロアに入った時。大島に

「お、何かスッキリした顔をしているな」と言われた。宏は

「ええ。もう悩んでもしかたありませんから」

「そうだな。その意気でがんばろう」

実は大島はある決意をしていた。もし、この商談が失敗して、責任問題になったら、自分が責任をとろう。そもそも、プレゼンを本来はクリエータの杉田保にやらせていたのは自分の責任である。営業を通して鈴木を他の人間と組ませるということもできたし、鈴木のプロゼン能力を上げるよう教育しなかった責任も自分にある。誰も責める資格は自分にはない。降格か減給か地方に飛ばされるか。いずれにしても覚悟はできていた。妻にもそう話してあった。

「頑張ってきてね」

「頑張ってきて下さい」

大野恵美と加藤梨香が声援の声を上げた。二人に見送られて、宏と大島はオフィスを後にした。

二時間ほど経って、宏と大島がオフィスに戻ってきた。二人の顔は晴れやかであった。

宏は屋上に出て、煙草に火を点けた。横からコツコツと足音がした。その方向に顔を向けると白い衣装を見にまどった、頭も真っ白の品のよさそうな老人が近づいて着ていた。

老人が口を開いた。

「仕事は上手くいったようじゃの」

宏は最初誰だろうと思っていたが、青神の言ったことを思い出し、こう返答した。

「ええ、おかげさまで。貴方は白神さまですね」

「そう、いかにも白神じゃ。いつもは青神じゃが、今日はわしが来た。青神じゃ説明できんと言ってな」

白神はゆつくりとした口調で宏に答えた。

「魔法の時計は役にたったじゃ。青神はマジカルウォッチなどと横文字で言っておったかの」

宏が応えた。

「ええ役に立ちました。今日のプレゼン、二十六分三十秒だったのですが、残り時間十三分二十五秒のところを使い始め、結局、今は残り時間十二分五十三秒です」

「ほお、随分残っているの」

「ええ、昨日わかったのです。この時計の秘密が」

「秘密というと？」

「この時計、後になればなるほど使える時間が長くなってくるんです。青神様に『探せば道はある』と聞いて何のことか考えたんです。そしたら、この時計の指し示す十三分二十三秒が計算に合わないって気づいたのです」

「ほー」

「今年の一月に僕はこの時計を貸して頂きました。その初日に僕は十分ほどの無駄使いをしました。そして、残り時間は約五十分。その後、美里を助けた時間を十分とみて、残りは四十分です。喧嘩の仲裁と恵美さんのお父さんの意識を戻した時間を合わせて五分とみても残りは三十五分です」

白神はじつと話を聞いていた。

「問題はその後です。杉田保を東京駅まで走らせた時間は十四分でしたから残りは二十一分。この後、時計を確認した時、残り時間が多いなと思いました。でも、その時はそんなもんかと気に止めませんでした。そして、決定的だったのは、佐藤明のバスケの試合です。僕は後半の第三クォーターの始まりに「明にタックルなんて怖くない」と思わせると念じて時計の竜頭を押し、試合終了までのイン

「タールをはさんでの二十二分、竜頭を押しました。つまり、本来ならこの時点でこの時計は六十分経過、つまり、タイムオーバーのはずなんです。ところが、実際は昨日の時点で十三分二十三秒あった。僕は今まで、残り時間しか見てなかったけど、今みたいに実際の使用時間に照らして考えると、段々使える時間が長くなっていることに気づいたんです。昨夜、やっと気づきました。それで、今日のプレゼンるとき、「保の上手にプレゼンができる能力を保から貸してくれ」と念じて、竜頭を押しました。二十六分三十秒使ったはずですが、実際の使用時間は三十秒でしたけど」

「その通りじゃ、しかし、一つ誤りがある」

「誤りとは？」

「その時計がそうにできているのではなく、お前さんがそういうふうに使ったから、時計の方が自らそういう時計になったということじゃよ」

「それでは、もし、いい加減に使ったらそうならないと」

「ああ、時計が渡った人間で、お前さんのように実際の時間より長く使えたのは、昭和以降ではお前さんが最初だよ」

「昔はそういう人がいたのですか」

「いたものにも、その時計を使つて、時代を作り、時代を乗り越えてきたのじゃ」

今度は宏の方が白神の言うことをじつと訊いていた。

「事の始まりは鎌倉幕府を築いた源頼朝公じゃ。八幡様じゃからの。その後は武家諸法度をつくり執権政治を確立した北条泰時公、中国は元の襲来を神風をもって追い返した執権、北条時宗公」

「元寇は神風が吹いたと言われてますね」

「たまたま吹くのは通り風、神風は吹かせてこそその神風じゃ」

「北条時宗公が吹かせたと？」

「当たり前じゃ。そうでなくて二回も同じことは起こらんじゃろ。」

そして、次は室町幕府を開いた足利尊氏公じゃ。あることを成し遂げた時は必ず魔法の時計が関係する」

「鎌倉幕府も室町幕府も滅びましたが」

「使い方を誤る人間の手に渡っている間は時計はその力を発揮できないのじゃ。実際八百有余年の歴史、つまり、八百有余人の手に渡ったということじゃが、時計のもつ本来の力を十二分に発揮させるような使い方をした者は数えるほどしかおらん。ほとんどのものは悪用して罪人になるか、そうならなくても己の欲望に目がくらんでしまった。そうやって、よい使い方をできない人間に渡る期間が長くなると世が乱れるのじゃ。話をもともどそう。室町の時代までじゃったな」

「次は応仁の乱を経ての戦国時代ですね」

「そう、油売りから身を起こした斉藤道三、駿河の今川義元、甲斐の武田信玄とな。とくれば、次は誰か、察しがつくであろう」

「織田信長ですね」

「そうじゃ、信長公じゃ。桶狭間の戦いで勝利したは奇襲作戦が奏功したという奴があるが、それはとんだ誤りじゃ。この時計で、今川方の兵を封じ込めたから、戦に勝利したのじゃ」

「次が秀吉公」

「そうじゃ。しかし、その次に徳川家康公に渡ったのは豊臣家の不運じゃったな。関が原の合戦で小早川秀秋が動かなんでは家康公が時計で動けなくしたのがその理由じゃ」

「なるほど」

「その後は幕末に至るまで人物を得なかったのう。やっと、登場したのが坂本龍馬」

「坂本龍馬も？」

「時代が大きく動く時は、必ずこの時計がかかわっておる。そうそう、人の命を救うために時計をつかったのは、お前さんとこの坂本龍馬じゃよ。その後、西郷隆盛、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文と次々と大人物が現れたの。しかし、その後は大正、昭和とつまらない人間ばかりが持つようになった。いずれも己のみの欲に走った小さい人物じゃ。そういう長い時間を経て、魔法の時間の効力も失

せ始めた」

「時間の効力って何ですか」

「使える時間は六十分と聞いておるじゃろ」

「はい、確かにそう聞いております」

「浦島太郎の話は知っておるかな。竜宮城でひとしきり楽しんだ後、陸に上がって玉手箱を開けると、老人になってしまったという話じゃ」

「はい、知っております」

「要するに、かみの世界でいう時間は、人間の世界でいう時間に例えると、つまり換算すると長いということじゃ。神の世界で言う六十分という時間は人間の世界でいう一年間と同じ長さなのじゃ」

「え、そんなに長いのですか」

「だから、この時計を貸し与えられた人間はつまりは一年間という時間を与えられたということじゃ。人によって異なるがの。八百有余年の歴史の中できっかり、一年の時間を与えられたのは、後にも先にも坂本龍馬だけじゃ」

「それ以前や以降の人たちは？」

「ほとんどの者が悪事に使って没収されたが、そうならなかった者でもは半年間、あるものは三ヶ月といろいろじゃ。まあ、お前さんのような一般の人間は人間の世界で言う六十分きっかりというのが圧倒的に多かったの」

「さつき昭和以降の人間で人間の時間より長く使えたのは僕だけだとおっしゃいましたが」

「昭和の日本人、特に政治家や軍人はおろかじゃった。だから、あんな戦争に将来ある若者を引っ張り込んで死なせてしまった。もし、魔法の時計がその効力を十二分に発揮できるような為政者に渡っておれば、あんな愚かな戦争は起こらんじゃったろうて」

「何故、私がこの時計を六十分より長く使えたのでしょうか」

「お前さんは始めのころは愚かな使い方をしたが、青神の話を聞いて、心を入れ替えたじゃろ。そして、人の命を救った、親子の絆を

深めた、愛し合う男女の心を通わせた、自信を失いかけた者にそれを取り戻させた。神の時間を使う資格があると時計自身がそう認めたのじゃ」

「この時計はあとどのくらい使えるのでしょうか」

「期限の年末まで使っても時間は余るじやろ。だから、戻す時は八幡様の境内の舞殿の上にこつそり、置いておくれ」

「もう一つ、お尋ねしたいことがあるのですが」

「美里も、僕の彼女との出会いもこの時計の効力なのでしょう」

「ははは、それはお前のご利益^{りやく}ではなくて、彼女自身のご利益^{りやく}じゃよ」

「彼女自身の？」

「お前のお連れさんは、今年、八幡様にお参りしての、縁結びを願っておった。そして、引いた大吉のおみくじを、お前さんが引いたおみくじの横に結びつけたのじゃ。彼女が結びつけたのが後じやつたろう。だから、言うなれば、彼女の方がお前の方に寄ってきたという事じゃ。その縁結びをしたのがうちの黄神という女の神なのじやが、こいつがイケイケの奴でう、彼女に随分けしかけておったのう。だから、お前さんがその時計を仮に持たなかったとしても、彼女とは何らかの形で出会っていたというわけじゃ。まあ、このことは彼女には言わん方がいいがの」

「はい、どうもありがとうございます」

「はい、どうも。連れを大事にするんじやぞ。良い年をな。それから青神が随分、酒をたかつておったの。すまん、よく言つとくで、じゃ。」

白神は青神がそうであったように、くるりと一回りして、消えて言った。

「あつ！」

宏は「青神によろしく」というのを忘れたことを悔やんだ。

その日の夕方、保を見舞った後、受注をしたお祝いの宴を開いた。

第十章 大仕事と時計の秘密（４）～エピローグ

十二月二十四日の夕方。

宏と美里は自宅のマンションにいた。テーブルの上にはシャンパンにチキン、お寿司などのご馳走が並べられていた。部屋にたくさんの電飾を飾ったクリスマスツリーが置かれていた。

「それじゃ、メリークリスマス」

「メリークリスマス」

宏が音頭をとって乾杯した。

家ではなく、横浜あたり的高级ホテルを予約することも考えた。しかし、二人水入らずで、人目をはばからずに過ごしたかったこと、そして、この後に行う行事のことを考えて、自宅でクリスマスパーティーを行うことにした。美里が

「今年は宏君に出会えて本当に幸せだった」

「俺もだよ、美里」

宏は白神の言葉を思い出した。宏と美里が出会ったのは美里側のご利益だと言っていた。

「いや」と宏は思った。

「俺にとっても、美里との出会いは十分なご利益さ」

おいしいものをたくさん食べて、最後にデコレーションケーキを紅茶を飲みながら食べた。それで、宴も終わりを迎えたというその時、宏は窓の外に人影を見た。一瞬ギクリとしたが、その体型で相手が誰かすぐにわかった。青神であった。宏は慌てずにそっと立ち上がり、トイレにゆく振りをして、ジーンズの左ポケットに忍ばせてあった、マジカルウォッチを握って、

「時間よ、止まれ」

と言って、その竜頭を押した。青神を中へ迎え入れ、シャンパンの残りをグラスに注いで、青神に渡した。

「これ、シャンパンです。どうぞ」

青神はシャンパンを一口飲んで、

「これも旨いね。ちよつと気が抜けてるけど」

「あ、すみません」

「いいの、いいの。今日はおめでたい日だからね」

「あれ、知ってたんですか」

「俺は神様だよ。知らないわけないでしょ。でも、なんでキリストの誕生日についていうのはちよつと引かかるけど」

「すみません。この日と決めてましたもので。それから、ちゃんとご挨拶せずに今年が終わってしまうと思っていたので、会えて、嬉しいです」

「ああ、本当はそのつもりでいたんだけど、白神様が大事なことをの忘れてたから頼むって言うからさ」

「大事なこと？」

「うん、マジカルウオッチ、八幡様の境内の舞殿に大晦日に返すよと言われたでしょ。その時間なんだけど、実は大晦日の除夜の鐘になり始めてから、今年が終わるまで、つまり大晦日の午後十二時までの間じゃないといかんのよ」

「はーそうなんですか」

「悠長に紅白歌合戦、見てる場合じゃないからね」

「それは、そうですね」

「それを伝えにきたの。あとその時間に舞殿の近くいないとだめだから。それを伝えにきたってわけ」

「いや、大事なことを聞きました。どうもありがとうございました」

「いやいや、これもお勤めだからね」

「青神様もよいお年をお迎え下さい」

「まあ、神様界も人間界も大変なのは同じだからね。お互い、頑張ろうね。じゃ、さようなら」

「さようなら」

宏は竜頭を押して、時間を再び動かした。が、次の瞬間、宏の動きがぴたつと止まった。

今度は美里が黄色い衣装に身をまとった黄神と話を始めた。

「黄神様、今年は大変お世話になりました。黄神さまのお導きで、大変いい男性を巡り会うことができました。本当にありがとうございました」

「いやー。それが縁というものだからの。あの男と出会ったのも、縁があつたということじゃて」

「でも、新橋駅のホームから線路に落ちた時は本当に死んでしまうと思つて、一瞬、黄神さまを疑つてしまいました。そこで生涯の伴侶と巡り会うなどウソだ思つてしまいました。

本当にすみません」

「いや、あんな場面に遭遇すればの、誰でもそう思うだろて。人間は」

「それに、二回目に宏さんと会つたら、そのまま押し倒せなんて、おつしやるから、そんなことしたら、変な女と思われるんじゃないかと」

「男女の仲というものは時として勢いというものがあるのじゃよ。それを逃すとな、成就するものも成就せなんだ。今の男どもはの、昔とちごうておとなしいからの、そんな場合は女子からいかなば、しょうがないのじゃ」

「名古屋の両親からお見合いを勧められた時はどうしてよいものかと」

「あれはお前さんがどう乗り切るか見ものだったのう」

「黄神様はわかつていらしたのですか」

「そうじゃ。あの時、そなたがどうするか見ものじゃった。お前は正しい選択をした」

「それでは、私がもし、お見合い話に乗っていたとしたら」

「はは。それはないのう。八幡様の境内の木におみくじを結んだ時からの宿命たぐひだからの」

「両親に断る時、決まった人がいるなんて口をついて出てしまったとき、宏君に断られたらどうしようと思つて」

「ははは、まあ断られることはあり得んじやろ。あの男の宿命だからの」

「でも、宏君と出会えて本当によかったです」

「あの鈴木宏という男、名前はシンプルだが、たいそうな人物じゃぞ。わしらのリーダーで白神様というのがあって、随分と褒めておったわ。お前がしつかり、支えんとな」

「はい、そのつもりです」

「あ、それとな」

「はい？」

「八幡様にお参りにいくと思うが、その時に必ず二人でおみくじを引くのじゃ」

「はい、二人ですね」

「そして、二人のおみくじをピッタリくっつけて木に結ぶのじゃ」
「ピッタリつけてですね」

「そうじゃ、さすれば、二人の絆はいつそう固く結ばれるじゃろう」
「はい、わかりました」

「そしてもう一つ、もしかしたら。二人で八幡様に並んでいる時に不思議なことが起こるかもしれん」

「不思議なこと？」

「そう人間の世界では考えられんことじゃ」

「はい」

「たとえば、それが起きても、余計な詮索はしてはならん。いいな」

「はい、わかりました」

「それではよい年を迎えておくれ」

「はい、黄神さまもよい年を」

黄神は青神と同じように、くるつと回って消えた。時は、そして、止まっていた宏が再び動き出した。

「それじゃ、行こうか」

と宏が美里に声をかけた。

二人は手を繋いで、外に出た。冷たい空気が二人を包んだ。宏の

手には「婚姻届」と書かれた書類が握られていた。

十二月二十八日 夕方。

今日は宏の会社の仕事納めの日である。午後から書類の整理や机の上の掃除が始まった。

宏は今年一年間を振り返っていた。今年はマジカルウォッチで始まったな、と思う。一番最初のくだらないのとは一番最後のプレゼン以外は自分のために使ったわけではないけれど、宏は満足であった。自分が他人のために役立てることがこんなに嬉しいことなのかを初めて知った一年であった。美里のこともマジカルウォッチのおかげだと思った。白神は美里の運だと言ったけれど、そもそもマジカルウォッチが引き合わせてくれた縁であった。マジカルウォッチを使うことはもうないな。宏は胸の内ポケットを外から触って、ウォッチを確認しながらそう思った。

隣の恵美が

「鈴木君、何ぼんやりしているのよ。早く片付けないと終わらないよ。杉田君の分もちゃんと働いてよ」

と声をかけてきた。

「いやー、すみません。今年はいろいろあったなと思って。恵美さんにもお世話になりました」

宏が挨拶すると、

「そういう挨拶は今日の忘年会でいいよ」

と返事を返した。そう、これから会社が終わった後、宏のセクシヨンは忘年会を行うことになっていた。十二月に入って、急に仕事を立て込んできて、伸び伸びになっていた。交通事故で入院中だった保も退院して、松葉杖について参加することになっていた。

梨香が宏に話しかけてきた。

「鈴木さん、杉田さんの書類、どうしたらいいですか」

「あー、それは来年持ち越しでいいよ。わかる部分は俺がやっておくから」

「はい、わかりました」

やがて、職場で部長の片桐の音頭で納会が始まった。

「今年は皆、よく頑張ってくれた。特に大島君のセクションの頑張りには目を見張るものがある。また・・・・・・・・・・」

片桐の話はいつも長い。

隣の恵美にささやいた。

「うちの部長の話の長いのは、今年もどうにかならなかったですね」

「本人に直す気がないからね。多分、一年後も同じこと言ってると思うよ」

恵美が笑った。やがて、

「乾杯！」

という声とともに納会が始まった。フロア中

に今年を振り返る輪ができた。宏もそうした輪に加わりながら、挨拶して、回った。

やがて、課長の大島が

「じゃ、みんな行こうか」

と宏、恵美、梨香に声をかけた。これから忘年会にゆくことになっていた。四人はフロアに残っている部員に挨拶をして、フロアを後にした。

午後六時半。新橋の居酒屋で宏たちのセクションの忘年会が始まった。保が先に来ていた。

「足、大丈夫か。あまり、飲むなよ。怪我の直りが遅くなるから」

課長の大島が保に声をかけた。

「あ、大丈夫です。最初の一杯だけで、後はウーロン茶飲んでますから」

保が応えた。皆にビールが注がれたのを見て、大島が

「それじゃ皆、今年は本当に良く頑張ってくれた。心から感謝します。来年も今年同様、頑張っていこう。乾杯！」

「乾杯！」

皆がビールの入ったコップを挙げて声を揃えて唱和した。

課長の大島が宏の近くに来て

「鈴木、本当に今年はよく頑張ってくれたな。心から感謝するよ。最後のプレゼンは杉田がお前に乗り移ったのかと思ったほど、完璧なプレゼンだった。企画もお客さんが大満足してくれたよ」

「いえ、私も何故あんなに上手くできたか、わからないんですが、きつと上手くいってくれという、課長や保の気持ちに僕を応援してくれたんだと思います」

「それに息子の運動会、わざわざ、来てくれてありがとう。おかげで息子ともうまくやっているよ」

「そうですね。それはよかったです。今年もお世話になりました。来年も宜しくお願い致します」

次に梨香がやってきた。

「鈴木さん、今年は本当にお世話になりました。もし、鈴木さんがあの時あそこになかったら、私、今ここでこうしてビールなんか飲めなかったと思います」

「いいえ、こちらこそ梨香ちゃんにお世話になりました。その後どう、いい彼氏は見つかった？」

「いいえ、まだです。来年こそはって」

「それじゃ、鎌倉の鶴岡八幡宮をお勧めするよ。何たって、俺とかみさんを結びつけたところだからね」

「なんか、いまの「かみさん」っていうの、とても自然ですね」

宏の顔が紅潮した。恥ずかしがった。保が

「だって、実質は五月から夫婦だからね」

と突っ込んできた。宏は

「うるせー。お前も来年はそうなるんだよ」

と言い返した。梨香は

「それじゃ、私も来年は八幡宮にいつてみます。ありがとうございます」

と笑顔で言った。

今度は恵美が話しかけてきた。

「本当に鈴木君、今年はがんばったよね。今じゃ、わが社のエースクリエーターだもんね。私も自慢だよ、隣に座ってるのが」

宏は笑いながら、

「そんなことないですよ。一步間違えたら、課長と僕の四国転勤の送別会になっていたかもしれませんから」

一同どつと笑った。恵美が続けた。

「それから、父のことは本当にお世話になりました。鈴木君があそこでああいつてくれてなかったら、父とは仲たがいしたままで、お別れすることになっていたから。父と最後の最後で分かり合えることができて、本当に感謝しています」

宏は首を横に振りながら、

「いいえ、父と娘のお互いを思いやる気持ちがあうという結果になったんだと思います。僕は何もしていませんから」

と以前答えたのと同じように答えた。そして、すぐに

「恵美さんも八幡宮にお参りしてはいかがですか、仕事も恋も上手くいくかもしれませんよ、僕のように」

「そうね、じゃ、私も行ってみようかしら」

最後に杉田保が来た。

「俺、今年はいつも違うなっと思うんだよ。二つほど」

「どう違うんだ、保」

「何かこう、物凄くお前に感謝しなければならない感じって、実際に感謝してるんだけどさ」

「二つって、なんだ」

「いや、優子のことと年末のプレゼンのこと。あれ、お前がいなかったら、絶対上手くいかなかったと思うんだけど、不思議なんだよな」

「何がさ」

「優子を追って、東京駅に走った時、俺絶対一キロ三分くらいのスピードで走ってたと思うんだけど。その後、どんなに走ってもそん

なスピードじゃ走れないんだ」

「それは火事場の馬鹿力っていう奴じゃないの？必死の時は人間凄い力出るらしいから。優子ちゃんと離れたくないっていう思いが奇跡的な力を生み出してくれたんだよ」

「じゃ、プレゼンは？」

「俺も不思議なんだけど、あの時はお前になったような気がしてね」

「やっぱり、気のせいじゃなかったんだ」

「気のせい？」

「うん、プレゼンの時間とき、俺、病院のベッドで急に眠くなつてな。お前に申し訳ないと思うんだけど、ぐっすり寝ちゃったんだよ」

「ほー、それで」

「でも、眠っている間、夢見ててさ。俺があのプレゼンをやっている夢なんだ」

「ふーん、それは面白い」

「でさ、いつもプレゼンやる時はお前と大島課長が近くいるのに。その夢のプレゼンでは課長しかいなかったんだよ」

「それは、杉田君が鈴木君に乗り移ったんじゃないの」

恵美が横から口を出した。

「恵美さんもそう思います？それにプレゼン終わって、終わりますって言った途端、眠りから覚めたんですよ」

今度は大島が口をはさんだ。

「確かに、あの時の鈴木君のプレゼンは杉田がやってるのと同じだったから、大野君の意見もまんざら間違つてないぞ」

宏がまとめた。

「それでは、あの今年最後のプレゼンは杉田保君が鈴木宏君の体を使って行ったということでしょうかでしようか」

「異議なし」

皆で声を揃えた。

二次会はカラオケに行った。それぞれに好きな歌を歌って、午後十一時にお開きにした。

「これでは皆さん、よいお年を」

お互いに挨拶して、分かれた。

東海道線の車中で宏は忘年会の一次会を思い出していた。あれはひやひやものだったな。あの時のプレゼンはその直前に「保の力を貸してくれ」って念じて、竜頭を押した。だから、その間、保は能力を失って眠っていたわけだ。願い事も気をつけてしないとえらいことになる。残りの使用期限がほとんどなくなってからそれを知っても、遅いような気もするが、知らずにいないよりましだろう。使うかもしれないし。

藤沢に着き、家のチャイムを押した。美里は起きていた。玄関でお歸りのキスをし、忘年会の話をした。

「杉田さん、大丈夫だった。退院したばかりだよ」

「足は痛めていても、口は達者だよ」

宏は笑うと、美里も笑い返した。

「その口達者のところ、宏君もあつたらいいのにね」

「あーそんなこというと、こんなことしちゃうぞー」

宏はベッドに美里を押し倒し、抱きしめた。

十二月三十一日 AM十時

今日は朝から大掃除である。といっても、美里はきれい好きで掃除もきちんとしているから、掃除するのは、換気扇など普段、掃除してない部分である。だから、掃除は宏が担当し、美里は御節作りをした。今日は夕食の後、鶴岡八幡宮にお参りに行くことになっている。宏は何時に出るか、考えあぐねていた。除夜の鐘が鳴ってから、今年が終わるまでの間はそんな長くない。そんな短い間で舞殿に行くにはよほど早く行って、舞殿の近くで待っているしかない。しかし、あまり、早く行くと美里に不思議に思われる。 - さて、どうしよう -

ここは鎌倉の鶴岡八幡宮。

紅白歌合戦を早めに切り上げて、いつもより早めに来たつもりであったが、境内には既に大勢の人が詰め掛けていた。本当は青神が言っていたように紅白歌合戦など見ていないで、来たかったのであるが、美里がどうしてもEXILEを見たいというので、それが終わるのを待つて出てきた。これでは、今年の内に舞殿にマジカルウォッチを返すという約束が果たせない。宏は奥の手を使った。もう使うことはないだろうと思っていた奥の手である。自分と美里を少しずつ何回も瞬間移動させ舞殿の横まで二人で来た。これなら今年中にマジカルウォッチを返せる。美里に何か言われてもとぼけるつもりであったが、不思議と美里は何も言わなかった。やがて、遠くで除夜の鐘が響きわたった。宏はこっそりとマジカルウォッチを舞殿に投げ込んだ。

そして、周りで新年へのカウントダウンが始まった。「十、九、八・・・三、二、一」

「おめでとぅ」

の挨拶があちらこちらから響いた。宏と美里もお互いに「おめでとぅ」を言い合った。

随分待つて本殿への階段を上ることができた。

- 神様たちはいるのかな -

宏はふと青神や白神の顔を思い出した。お参りの順番が来ると賽銭を投げながら拍手を打って手を合わせた。

「昨年は幸せに過ごさせて頂き本当にありがとうございました。本年も妻ともども、平穩無事に暮らせるよう、お守り下さい」
隣の美里も手を合わせていた。

- 何をお願いしているのかな -

そんなことを思いながら美里が終わるのを待った。絵馬を買って、二人がともに思ったことを書いて、板に掛け二人でおみくじを引いた。二人とも中吉であったが、それが何であっても、二人には大吉

であった。宏が結んだ後、その横にぴったりつけて、美里が結びつけた。夫婦となった二人の新しい年の始まりだった。

エピソード

平成二十四年一月四日 午後六時

一年前と同じように五色の衣装を身にまとった神様たちが八幡宮の本殿の上にいた。

白神が口を開いた。

「去年は実にいい男に時計を渡せたのう。八幡様も大喜びじゃ」
黄神が続いた。

「私も去年はいい縁結びをしたと八幡様にお褒めの言葉を頂いたわい」

赤神が誇らしげに

「俺が選んだ絵馬だぞ。皆、俺に感謝せな、いかんすな」

青神が反論した。

「この俺がきちんとフォローしたから、あの男が正しい使い方をしたんだべ」

緑神が皮肉たつぷりに言った

「二年も続けてうまくいくとは限らんぞ。百年に一度の運を去年使つてしもつたで、今年からはまたダメだろう」

青神がまた反論した。

「緑さんは自分が何もせんと文句ばかり言うてるわ。大体なんであんたがこの会議のメンバーなんだ。それに、交通安全の祈願にきた、あの黒木という男、飲酒運転で人身事故起こして会社クビになつたっていうべ」

緑神が色をなして反論した。

「交通安全は対象人数が多すぎて、一人一人見るのは大変なんじゃ。それにわしゃ定員が足りんと言われてメンバーになっただけじゃない。それより、青さん、あんた、あの男のところへ行つては酒飲んでたようじゃのう。ありや、規則違反だぞ」

それを聞いて、青神はバツが悪そうに言った。

「それは、あの男がどうぞどうぞって勧めるもんだから、お呼ばれただけだべ」

すると、白神がもうやめてくれと言わんばかりに言った。

「ええー、もういいじゃろ、今年の人選を早く済ませよー。赤さん、宜しく」

「はい、行ってきます」

赤神が返事をして、かかっている絵馬の中から一つを選んで持ち帰った。持っていた絵馬の掛かっていた板の場所のすぐ隣にこんな絵馬が掛かっていた。

昨年はどうもありがとうございました。今年も自分を信じ、愛する人と無事に過ごせますように、お願い申し上げます。

平成二十三年元旦 鈴木 宏・美里

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7633p/>

神様がくれた60分

2011年1月28日12時21分発行